
理想の恋愛・・・未満！

玉紀 直

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理想の恋愛・・・未満！

【Nコード】

N4352G

【作者名】

玉紀 直

【あらすじ】

プライドの高い学と、意地っ張りな美春。幼馴染で、お互いずっと好きなのに、その気持ちを言い出せないまま迎えた高校一年の春。悪い虫(?)がつかないように、陰ながらずっと美春を守ってきた学だが、美春が学園祭のミスコンで優勝した時、最大のピンチが訪れた！通じそうに通じない恋心。一途にお互いを思う気持ちは、幼い頃からずっと変わらない。「理想の恋愛完璧な愛」の二人が高校一年の時のお話です。作者にしては珍しく(?) R-15指定がありませんので、15歳以下の方も是非どうぞ！青春真っ盛り！突っ

走る二人を応援してやってください！信君と涼香ちゃん
の番外編も
ありますよ！

第1話 幼馴染・美春の場合

「みはるー。愛してるよー」

男の子が女の子をキュッと抱き締める。

「まなぶー。大好きー」

女の子が嬉しそうに男の子に抱きついた。

春の暖かな木漏れ日の中。

仲良く寄り添う二人を、互いの両親もくすぐったそうに見ている。

幼い頃の、素直な心。

ずっと、この気持ちを持っていられたら。

ずっと。

成長してもこのまま。

素直なままでいられたなら……。

でも、人は成長する。

成長と共に、どんどん変わっていつてしまう。

心も体も。

そして、少年には男としての「プライド」が、

少女には「意地」張りな心」が

思春期の体に、宿ってしまう。

こんな無邪気な、二人でさえ……。

「この……！アホっ！美春っつ！!!」

「何よ！バカ学っ！」

売り言葉に買い言葉。

一見、殴りあいでも始まりそうな雰囲気か漂う休み時間の教室内。

一ヶ月前、高校に入学して二人のクラスメイトになったばかりの頃ならば、慌あわてて担任の先生でも呼びに走あつてしまふ所だろう。

しかしこれは、この二人の日常茶飯事。毎日2〜3回は見られる光景。

しかも、その言い争いの原因が・・・

「だからっ！ドーナツは中身が入ってるモンのほうが美味うまいって言っただろうがっっ！！」

「何言ってるのよお！ドーナツは生地の食感くわんかんってモンを楽しむものよ！ふわふわだったりカリカリだったり！そこにかかるシナモンパウダーやお砂糖あつぱん！それがドーナツの王道わうだうってモンだわー！」

まるで痴話ちわげんかのような内容。他から見れば、ハッキリ言っただっちでもいい。

そしてこの二人は、私立西海学園せいかい高校、1年1組の有名有名（迷？）人。

「この、意地いぢっ張り！！」

くだらないことで怒鳴る顔もサマになる。

高一とは思えないくらいの大**大人**びた表情。

成績優秀。眉目秀麗。容姿端麗。

その3拍子を、自他共に認めた上で併せ持ち、更に家は製薬会社を営む大企業。その一人息子という御曹司。

何という不公平。まさに神は彼に二物も三物も与えてしまった。

そんな少年。葉山学まなびがく。

「何よ！わからずや！自信過剰！女メつたらし！！」

ひとつ言われてひとつ返すだけじゃ納まらない。

そんなところも非常に可愛い。

クセ毛のせいでウェーブがかかったようになびく、背まで届く栗色の柔らかい髪。

白い肌はくに、引き込まれそうな綺麗な瞳。

制服の上からでも解るスタイルの良さ。

まるでファッション雑誌から抜け出してきたかのような少女。光ひかり

野 美春^{みはる}。

「何だよ！女つたらしつて！」

「本当の事でしょ！こんなんが幼馴染かと思うと悲しくて涙が出るわよ！」

「悲しいなら、お前がヤラせるよ！美春！」

「下品っ！！！」

バシーンッ！それはそれはキレイに決まる平手打ち。

そしてこの「かっつてにやっつてなさい」と言われそうな痴話喧嘩は、たいてい美春の一発で幕を閉じるのだ。

「今日はまた派手にやっつたわねえ」

空になったお弁当箱をパタンと閉じて、菱崎^{ひしざき} 涼香^{りょうか}は目の前で

「ヒィ牛乳の紙パックから美味しそうに中の液体を吸い上げる美春に目をやった。

「何があ？」

「今日の痴話喧嘩よ」

「ち、痴話・・・っつてっ」

美春がちよつと動揺する。「痴話喧嘩」といえば、一般的に恋人同士など「そういう関係の男女」に対して使われる言葉だ。

「やっ、やめてよおっ！そんなんじゃないんだからあっつ！！！」

「本当に仲が良いわよね。美春と葉山君って」

「おっ、幼馴染なだけよっ！家も隣だから、2歳の時からずーっと一緒なのっつ！そんだけっ！」

明らかに言い訳を繰り広げている友人を、涼香は呆れ顔で見る。はつきり言っつて彼女は、美春が学を好きなのではないかと疑っている。

涼香が美春と友達になつたのは高校に入学してから。

美春の人懐^{ひとなつ}っこい性格もあつて、何となくすぐに仲良くなった。

この一ヶ月、近くで美春の学に対する態度を見ていて「これは・

・「という疑惑を持つようになったのだ。

そしてそれは、大正解なのだ……。

「我俵^{わがまま}だし！俺様主義だし！自信過剰でえ！おまけに顔が良いからって女の子の噂ばかり立ててる女つたらしでえ！……悪い奴じゃないけど……ううん、優しい所もあるし、思いやりのあるところもあるし……良い奴だけど……、えーっと、えーと……」
動揺ついでに自分が何を言っているのか解らなくなる。

学の悪口を言っていたはずなのに、いつの間にか褒めてしまっている事に気付いて、美春は赤くなりながらコーヒー牛乳の紙パックを指でいじり回した。

美春は、学が好きだ。

「好きだ」というレベルではない。

「大好き」だ。

2歳の時から。初めて学に会った時から。
ずっとずっと、彼の事だけを想い続けて来た。
美春の、「初恋」なのだ。

幼稚園から、小学校中学校そして高校。全て同じ学校で、どういう訳かクラスもいつも一緒。

痴話(?)喧嘩もするが、別にお互い根に持つ訳でもないし後に引く事も無い。

かえって学は、美春に凄く優しい。

その優しさが、学の事を好きな美春にとっては凄く嬉しくて、ますます心が学から離れられなくなる。

「解った解った。そんなに照れなくても良いわよ」

お弁当箱をランチバックにしまいながら、あまりにも動揺する美春が可愛そうになり、涼香は美春の頭を撫でた。

ホントツ。可愛い性格よねえ。美春って。

「光野さん」

その時クラスメイトの女子が、二人が昼食を取っていた机の横にやっけてきて廊下のほうを指差した。

「何か、光野さんに用事、って。・・・3年生みただよ」

「3年生?・・・女の人?」

美春がちよつと嫌な顔をする。昔から彼女はよく「葉山君と付き合ってたんの?!」と上級生などに詰め寄られる事が多々あるからだ。無理もない話したが、学は非常にモテる。いつも一緒にいる美春が疑惑の目を向けられるのも無理もない話か・・・。

「うっん。男の先輩」

「男の?」

じゃあ、自分に文句を付けにきた訳じゃないだろう。

そう思いながら涼香に「ちよつと行ってくるね」と言って席を立つ。

「はい。何か御用ですか?」

無意識のうちにしてしまう。実に可愛らしい笑顔。

その笑顔を湛ただえたまま、美春は廊下に出た。

パシャッ!いきなりたかれるカメラのフラッシュ!

「・・・?!」

笑顔が驚きの表情に変わる。

目をぱちくりさせていると、目には3年生の男子が二人。

一人は今のフラッシュの原因である大きな1眼レフカメラを手に持っている。

「生徒会でーす。こんにちはー」

カメラを持った他にいるもう一人がにこやかな声で挨拶をして、美春を上から下までしげしげと眺めた。

「いやあ・・・噂には聞いていたけど。本当に可愛いね」

「は？」

「今年の1年の中じゃピカイチだもんね。間近で見たの初めてだけど、ホントツかわいいつつ」

「あ・・・あの、冗談はやめて下さい・・・」

褒められて嬉しくない訳じゃないけど・・・なんでそんな事からかわれるんだろう・・・いやだなあ・・・

私・・・可愛くなんてないのに・・・

美春の困った性格。

自分の事が解っていない。

この3年生が言う通り、美春は美人だし可愛い。

美春を好きになる男の子は、今まで沢山いた。

ただ・・・とある理由があつて、それを彼女に伝える事は絶対に不可能だったのだが・・・

自分が可愛くて異性にも好かれるという事実を、美春自信が認識できていない。

昔からずっと・・・

「ところでさ、学校がそろそろ学園祭の準備に入ってるのは知ってるよね」

「え？はい」

この高校の学園祭は7月の初め、夏休み前に行われる。1学期最大のイベントなのだ。

「そこでさ、学祭の人気イベントに生徒会主催の『ミス西海学園高校コンテスト』っていうのがあるんだけど」

「ミス西海？」

「そう。学校内の可愛い女の子にエントリーしてもらって、校内投票と学祭に来る来場者投票で、文字通りウチの学校で一番可愛い女の子を選ぶってやつ」

「はあ」

それで？何で私のトコにそんな話しに来るの？

「でさ。光野さん、それに出てくれないかな？」

「・・・は？」

「『ミス西海学園高校コンテスト』ウチの学校ってさ、美人が多くて有名だけど、君も群を抜いて可愛いから絶対にいいところ行くと思うんだよね！」

「・・・」

ミス？ せーかいがくえんこーこー？ コンテスト？

「私がですかあ?!?!」

第1話 幼馴染・美春の場合（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

今回初めて玉紀の作品に目を通してくださった方、初めまして。読んだ事があるという方、今回もありがとうございます。御座います。

玉紀にしては珍しい、R - 15指定のない連載（笑）を始めさせて頂きました。

ただ・・・R - 12位ではあるかもしれませんが・・・。

R - 15で、（性表現レベルの違いで、一部他サイトではR - 18になっています）「理想の恋愛 完璧な愛」という連載をさせて頂いているのですが、これはその二人が高校1年生の時の話になります。

そちらを読んだ事がないという方にも、二人の関係性が解るように書き進めていこうと思っていますので、安心して読んで下さいね。

さてさて、幼馴染の二人は微妙な関係です。

美春ちゃんは自分の事をよく解っていない、少々オトボケちゃんなどところがある子なんですネ。

そんな彼女にミスコンの話・・・。

さて？どうする？

それでは、また次回！

明日、更新です！

第2話 幼馴染・学の場合

「ミス西海学園高校？」

よく整った綺麗な顔を不可解そうに歪め、学は手に持っていた缶コーヒーの残りをグイッと飲み干した。

彼がそんな不可解そうな顔を作る原因になる話を持ってきたのは、中学の時から友人で、今でもクラスメイトの田島たじま信しんだ。

「ついさつき、生徒会のやつらが来てさ、光野さんに頼み込んで行ったんだ。光野さんは『恥ずかしいから嫌だ』って言ってただけど、押し切られたみたいだなあ・・・」

「学祭のイベントだよな。確か」

「生徒会主催のメインイベントのひとつだよ。生徒会としては成功させなきゃならないから、必死で可愛い子集めてんだろ？」

「そりゃあ、美春に声が掛かるのは当たり前だな」

遠慮も照れも何も無く、アツサリと言っただけのける。

あれだけ毎日くだらない事であだこうだと言いつ争いしていても、美春の魅力を一番知っているのは学なのだ。

性格的な物も。容姿的な物も。全て。

「美春は、誰よりも可愛いからな」

そう満足気に呟きながら、美春の笑顔を思い出し、微笑む。

昼休みの屋上。学のちよつと長めの前髪を、微かすかに吹き抜ける暖かい風が揺らす。

学は美春が好きだ。

「好きだ」というレベルはすでに、「愛している」に達している。

2歳の時。初めて美春に出会った時から。

ずっとずっと、彼女の事だけを想い続けてきた。

学の、「初恋」なのだ。

運命のような一目惚れ。

もうすぐ3歳になる幼い学は、出会ったその瞬間に、美春にプロポーズまでしてしまった。

学校もクラスも常に同じ。

学が美春と一緒に居たいがために、彼が親に頼んで根回ししてもらっている事は言うまでもない。

美春のことを好きだという男は、今まで沢山居た。しかし、その想いを彼女に伝えられた者は誰一人としていない。

何故か？

愚問だ。

美春に近付こうとする男は、全て学が排除してきたからだ。

学は雰囲気的に歳には似合わない人を抑え込むような威圧感いあつかんを持っている。家柄的に社会的権力にも恵まれ、オマケに腕つぶしもよく喧嘩では負け知らずだ。

はつきり言つて、ちよつとやそつとの大人でも彼には敵かなわない。

美春に知られる事無く、彼女に悪い虫が付かないように常に彼女を守ってきた。

そこまでするのなら、さつさと告白して自分の物にしてしまえば良いものだが、厄介な事に「何でも出来る男」にもプライドがあり、完璧に美春を守り満足させてやれる男になれたと自分が思えるまで、美春にこの気持ち伝えないと心に決めている。

そして自信家の彼は、自分は絶対そういう男になれる、と確信しているのだ。

「そんなに可愛い可愛い、言っつてんなら、いい加減に他の女と遊ぶのやめたら？まなぶくんっ」

信がからかう様な口調で小さく溜息をつきながら、フェンスによしかかる。

信は学が美春を好きな事を知っている。

中学1年になる前に知り合い「自分の命に代えても守りたい女だ」

と美春の事を教えられた。

この歳でそんな大きな志を持つて^{たくましく}いる学の気持に感動して、信はそれ以来、何に対しても学への協力を惜しまない。

信の家は大手法律事務所^{ロースタディ}で父親は所長であり弁護士だ。そして、学の家、葉山製薬の顧問弁護士も務めている。

もちろん将来自らも弁護士を目指している信は、幼い頃からの環境も手伝つて、情報収集能力にたけている。

学が欲しい情報は大抵、調べ上げて持つてきてくれる。彼らは友人同士でありながら、どこか主従関係のような物で繋がっているのだ。

「今だつて、アレだろ？上級生のオネーサンに呼び出されてたつて事は、付き合つてくれとか言われてたんだろ？」

「まあな。いつもの事だよ」

「んで？なんて返事したん？」

「『あなたにはきつと、俺みたいにフラフラした男より、しつかりと愛してくれる人が現われますよ』つつと断つた。当たり前だろ」

歯が浮いて抜けてしまいそうな台詞をツラツと言つてしまう学を見ながら、その台詞の恥ずかしさに信のほづが赤くなつてしまった。

こんな台詞を吐いてもサマになるといふ所は、学の特権としか言いようがない。

「・・・お前、いつつも、そんな事言うのか・・・？」

「時と場合によるけどな。今日の3年生は粘り強かつたぞ。最後には『一晩でいいから付き合つて』って言い出したな。よつぽど『ソツチ』には自信があるらしい」

「付き合つてやりやあいいジャン。お手のモンだろ？得意分野だろ？」

からかう信に、学は両手の人差し指でバツテンマークを作る。

「同じ学校の女はパス。後々が面倒だ。美春以外の女に深入りするつもりもない。色んな女と付き合うのだつて、何事に置いても美春を満足させられる男になるための手段の一つだ。面倒な女はごめん

だ

遊んだ女は光野さんの為の「踏み台」かよ……。他の女性達に同情を感じながらも、学のような「愛した女しか見えない」男にひっつかかってしまった事が不運だったと思ってくれ、とささやかに弁護する。

「でさ、どうすんの？ミスコンの話、ほっとくの？」

信が話を戻すと、学は腕を組んで右手を軽く顎の辺りに当て、考えるような顔をした。

「学祭のイベントなら、一般の人間にも美春をさらす事になるな」

「下手すりゃ、一般の来場者の中にも光野さんに目を付けるような輩が出てくるかもな」

学はチツと舌打ちする。学生連中だけでもうるさいっていつの間に……。

「……生徒会で、誰が美春を推薦したのか調べてくれ」

「生徒会で？」

「ああ。自薦他薦なら、誰かが美春を推薦したはずだ。生徒会の中の『誰が』美春を出場させるように押したのか調べてくれ」

「……そのくらいなら、すぐに解るとは思っけど」

学は考え込みながら、切れ長の鋭い目を細めた。

「……誰が、余計な事をしやがった……」

「今年のミスコンは盛り上がりますよー！間違いないですよー！」

「最初は『出ない、出ない』って言ってたんですけどね。押しに押ししましたよ。アレだけの美人、出場させなかつたら逆に生徒会に苦情が来る」

「出場者告示ポスター、ちょっと多めに作っておいたほうがいいのかもしいれなくてよ。毎年、どっかこっかで剥がされて持っていかれるけど、今年は貼った傍から盗まれそうだ」

「いやー、でもマジで可愛かったっ！」

「今年は絶対彼女ですよ！間違いないでしょう！」

「もう優勝は決まったようなもんじゃないですか？さすがは会長の推薦だ。校内投票、来場者投票、トップ間違いなし！」

生徒会室に戻った二人が、興奮した様子でまくし立てる。

さつき美春にミスコン出場を薦めすすて来ていた二人だ。

そんな二人の報告を聞きながら、生徒会長用の机の前で椅子に腰掛け、その少年は満足そうにニコニコしていた。

「そうだろうか？可愛かっただろうか？」

彼が、美春を推薦した。

一年生歓迎会の時、お礼の挨拶に一年生代表で成績優秀者が男女一人ずつ壇上上がった。

男子代表は学だったが、女子の代表として立った美春の姿を見た時、彼は思わずその姿に見とれてしまったのだ。

「・・・僕も、楽しみだよ・・・」

そう呟いて、生徒会長、本條ほんじょう 由貴人ゆきとは、にやりと笑った。

第2話 幼馴染・学の場合（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

二人は両想いです。

小さい頃は「大好き」とか言い合っていたはずなのに、いつの間にか言えなくなってしまっただけですね……。

美春ちゃんが自分の魅力を認識できていないのは、学君が常に陰から目を光らせて他の男が近寄らないように小細工しているせいです。

学君が警戒してますが……。

美春ちゃんには本当にミスコンに出場するのでしょうか？

今回はちょっとじれったくてラブラブな（？）二人の姿をお届けします。

多分明日、更新できると思います。

では、次回！

第3話　ベランダ・大好きな時間

「あつ。学だ！」
思わず口から出る呟き。その声は、呟き声とは思えないほど弾み上がる。

カタン・・・カタ・・・カタ・・・カタン・・・。

塀からベランダへ上がる音。

美春は机に手を付いて勢いよく立ち上がると、部屋の大きな窓へ駆け寄った。

美春の部屋は8畳ほど。窓は大きなベランダ窓だ。窓を開けると6畳ほどの広いベランダがある。小さな頃はここでよく学と遊んだ。そしてこのベランダは、時々、いや頻繁に、美春にとって嬉しい来客を迎える場所にもなっている。

カーテンを勢いよく開ける。そしてそこには美春の予想通り、美春にとつての嬉しい来客者がベランダの柵を乗り越えて、ベランダ内へ入ってくるころだった。

「よお。美春。起きてたかあ？」

学が笑顔で片手を上げる。

美春はその笑顔にちよつとドキツとしながら、鍵を開け窓を開いた。

「まだ8時よ。いくらなんでも起きてるわよ」

美春の部屋は、塀側の2階角だ。登りやすいのか何なのか、学はいつも塀をつたってベランダへ上がり、美春の部屋へ遊びに来る。小さな頃からそれは続いていて、美春も美春の両親も、もう慣れっこだ。

その時に聞こえる、学が塀をつたってベランダへ上がる音。美春にはその音がすぐ解る。

「今日は来るの早いわね。夜遊びには行かないの？おぼっちゃま」
からかうように下から学を見上げる。

美春は165センチ。学は180センチ近くあるので、嫌でも見上げる事になる。すると学は手に持っていた長細い箱を美春の手に持たせた。

「今日、美春と話してたら食いたくなつてよ。いっぱい買ってきたから一緒に食おう」

そう言いながら部屋へ入る。学が渡したのはドーナツショップの箱だ。そういえば今日の休み時間、ドーナツの事で少し言い争いをしたな、と思い出した。

「わざわざ私の所に来なくなつて、遊びに行つて引つかつた女の子でも食べたなら良かったんじゃないの？」

学が来てくれて嬉しいのに、つつい出る憎まれ口。

しかし学は、クスツと笑つて美春の頭を軽くコンツと小突いた。

「ばーか。『美春と』食いたんだよ」

かあ・・・と顔が熱くなる。真っ赤になつてしまったのを悟られないように、美春は学から顔を逸らした。

「ばっ、ばかねえ。大好きな夜遊び蹴つてこんな所に来てっ。よっ、欲求不満になつても知らないからねっっ」

顔を逸らしたまま、部屋の中央にあるガラステーブルにドーナツの箱を置く。

「美春と」などというご指名付き。顔が熱くてしょうがない。

何となく動揺を隠せない手付きでドーナツの箱を開ける美春を見ながら、学はニヤツとする。

「んー、そうなつたら美春をオカズに自分でなんとかするさ」

「ひっぱたくわよっっ！・・・ん？」

いつものからかい口調に右手が上がる。が、その手は途中で止まった。

「学・・・このドーナツ・・・」

箱の中には、二人で食べきれないくらいのドーナツが入っている。

しかし、いずれも・・・

「・・・学が好きな・・・クリームとか入ったやつ、一個もないよ・・・」

ふわふわやカリカリ。時にパリパリ。そんな生地の上に、シナモンパウダーやシュガー、ハニーシロップ、ココナツ、チョコレート。色々とトッピングされたドーナツ達。今日の休み時間、美春が好きだと言った部類の物ばかり。

「んー？俺、こっちも好きだぜ」

テーブルの前にあぐらをかいて座り、箱の中からハニーシロップがたっぷりとかかったドーナツを取り上げる。一口ぱくつとかぶり付いてから、そのハニーシロップと同じくらい甘い微笑を美春に向けた。

「美春も食えよ。美味いぞ」

「あ、うん。ちょっと待ってて」

戸惑いながら返事を返すものの、ドーナツは意外と手が汚れる事に気付いてウエットティッシュを取りに立つ。

机の横の棚からウエットティッシュのケースを取り、ついでにその棚の上上がった木彫もくちゆうデザインの小型冷蔵庫の中から、缶コーヒーと缶入り紅茶を一本ずつ出した。

「・・・学は、いつもこうだ。」

パタン・・・。冷蔵庫を閉める。

意見が分かれるような言い争いをして、結局は私の良い様にしてくれる。

何気ない態度で、いつも私が喜ぶ事をしてくれる。

目の前の冷蔵庫を眺める。

この冷蔵庫だって、3月の私の誕生日に、学がプレゼントしてくれた。「ちょこちょこ下に飲み物取りに行くの面倒だろ？小さい冷凍室も付いてるから、アイスも冷やして置けるぞ」って。「俺用のコーヒー、いっつも置いておけよ」って、一言付きだったけど・・・。

一見冷蔵庫には見えないデザイン。木彫家具にしか見えぬ、普通に部屋の中にマッチする。おそらく「特別注文」なのだろう。

女の子全体に優しいけど、私には特別色々とかまってくるように感じるの……。「幼馴染だから」なんだよね。……きつと。

「どうしたー？みはるちゃん」

冷蔵庫の前で立ち止まったままの美春の後ろから、学が声を掛ける。美春は「何でもないよー」と言いながらウエットティッシュと缶飲料を2本、テーブルの上に置いた。

「ほら食べよ。美春の好きなシナモンドーナツもあるぞ」

「うん。ありがと」

学が私に特別優しく感じるのは、「幼馴染」だから……。そう考えると、美春は少し切なくなる。

すでにひとつ食べ終えた学は、ウエットティッシュで指を拭くと美春の分の缶入り紅茶の口を開け、美春に差し出す。

「ありがと……」

美春がそれを受け取り口を付けると、学も自分用のコーヒーの口を開けた。

小さな事ではあるが、常に学は美春に対する心遣いと優しさを忘れない。

美春はお目当てのシナモンドーナツを取り上げると、一口パクツと口に入れた。

「おいしいよつ。まなぶつ。ありがとねっ」

シナモンパウダーが沢山唇についてしまい、ちよつと恥ずかしい。美春は口元を押さえながら、幸せそうな笑顔を学に向けた。

この笑顔が、学には堪らなく嬉しい。

この笑顔が見たくて、この笑顔を守りたくて、学は美春の傍から離れられない。

本当につ、美春は可愛いっ。

嬉しそうにドーナツを食べる美春を見ると、学まで嬉しくな
ってニコニコしてしまう。

「あ、そうだ、学。あのね」

パクパクパクと、調子よく3分の1くらい食べて、今日の事を話
しておこうかと思いいち切り出す。

「昼休みに生徒会の人に来てね」

「ん？」

「私に……」

そこまで言っつて、なんとなく言葉が止まる。……ミスコンに出
てくれて頼まれたなんて言ったら……大笑いするんだろいなあ。

学はとつくに信に聞いて知っていたので「ああ、ミスコンの話か」
としか思っていないかったのだが、美春はまた学にかかわれると思
い、少々その先の言葉を躊躇^{ためら}った。

「ミスコンに出してくれ、つて。頼まれたんだろ？」

躊躇う美春の台詞を、学が続ける。美春は驚いてコーヒーの缶に
口を付ける学を見た。

「どうして？」

すると学はニヤツとして、美春が手に持ったままの、食べかけの
シナモンドーナツをヒョイツと取り上げ、口の中に放りこんだ。

「俺の情報網は完璧なのっ」

「私のシナモン〜」。『ちようだい』くらい、言いなさいよお」

学がその話を知っていた事を訊く前に、ドーナツを取られた事を
責めてしまっつ。

学は可笑し^{おか}しそうに笑いながら、箱の中から新しいシナモンドーナ
ツを取り出して美春の手に持たせ、ニコツと笑う。

「ほら。おかわり」

「あ……ありがと……」

何となく学の「にこっ」に騙されてしまったような気がしないで
もないのだが、美春は「おかわり」を受け取り、ぱくつと口の中へ
入れた。

「で、でも……。変でしょう？冷やかしか思えないよね。私がミスコンだなんてさ。よっぽど出る人がいなかったのかな」

からかわれる前に先手を打つが、返って来たのはあまりにも照れくさいがどこか嬉しい一言。

「目の付け所は間違いないな。お前が出れば優勝間違いナシだ」

美春はドーナツを食べる手が止まる。そんな言葉が返ってくるとは思っではいなかった。

「俺が言ってるんだ。間違いないぞ」

「……ありがと……」

いつもならば「ふーん、自信家」と言い返すところだが、学にまで褒められているような気がして嬉しい。心なしかドキドキしてきた。

「美春自信はどうなんだ？出たいのか？ミスコン」

「……私なんか、って思うんだけど。生徒会の人が凄く一生懸命だったの。……そんなに言ってくれるなら、って思って。どうしようかって、迷ってたんだけど。でも……」

照れくさくて食べかけのドーナツを凝視していた目を、チラッと学へ向ける。学が優しい顔をして自分を見ていて、再び恥ずかしくなって顔を逸らした。

「学が……大丈夫って言ってくれるなら……。出ようかな……」

珍しく素直な言葉が口から出る。女の子として、好きな男の子に褒められて嬉しくない訳がない。

学は肩をふつと落として、俯き気味になっている美春の額をツンツンと突っついた。

「もしお前が嫌だって言ったら、生徒会顧問脅してやめさせようかと思っただけど、その必要もないな」

学ならそのくらいやりかねない。そう思いつつも、特に言い返すことも無く、美春は突かれた額を押さえてはにかんだ。

しかし今日は、何となく学の優しい態度と言葉に、自分がすっか

り負けてしまっているような気がする。それがどこか悔しくて、美春は一言言い返した。

「学におだてられて出るんだからね。誰も入れなくても、学は私に一票入れてよ」

「ああ。10票でも100票でも、入れてやるよ」

「ヤダよー」と言い返してくるだろう。そう思った予想は外れる。何か、今日の学。妙に優しい……。

そんな事を考えながら、再びドーナツに口を付ける。

ちよつと赤くなりながらパクパク食べる美春を、学は愛しそうに眺めていた。

ベランダから訪れる、幸せな時間。

美春は、そして学も。

この時間が、大好きなのだ……。

第3話 ヘランダ・大好きな時間（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

思いは通じ合っていないなくても密かにラブラブでしょ？
じれったいです。（笑）

美春ちゃんがミスコンに出る事になったのですが・・・。

これをきっかけに、ちょっと色々起こってしまっくんですね・・・。

それは、次回。

第4話 告示・ミス西海候補者

「あつ！美春！ポスター貼ってあるよお！」

叫び声とまではいかないが、涼香の大きな声につられるように、校舎前に設置されている生徒用掲示板の前に集まっていた2、30人が、一斉に美春を振り返った。

「うわっ！何？！今、校門から入って登校してきたばかりの美春の足が止まる。」

振り返った生徒達は、掲示板と美春を交互に見て「あー、この子か」と納得するように頷く。

「ほらあ。早くおいでよお！」

自分の一声で美春が戸惑ってしまっていると知ってか知らずか、涼香は悪気無く手招きする。

「りよ・・・涼香あ・・・」

ちよつと恥ずかしそうにしながら、掲示板の一番前に立っていた涼香の横に立った。

「はっ、はずかしいでしょっ。そんな大声でえ・・・」

「だって、ほら。今日から貼ってあつたんだもん」

涼香が掲示板を指差す。そこには大きなカラーポスター。

ミス西海学園高校コンテスト・候補者一覧

学園祭まであと1ヶ月。

今日から候補者の発表で、学祭前日まで学校内投票が行われる。

学祭2日間は来場者投票になり、3日目午前のステージイベントで結果発表がされるのだ。

ポスターには9人の候補者。

1年生は美春が1人。2年生は3人、3年生が5人。

西海学園高校の学祭メインイベントのひとつという事もあって、

生徒会も気合が入っているのだろつ。気合を表すかのような鮮やかなカラーポスターだ。

候補者の一人一人が最高の笑顔を湛え、その横にはクラスと名前の紹介が記載されている。

・・・うわあ、1年生って私だけなんだあ・・・。何か、生意気！、って言われそう。

美春は何となく気が引ける。まさか1年生が自分ひとりだけとは思わなかったのだ。1人だけのせいかな、少々目立つ上のほうに写真が載せられている。

他の2、3年生を見て、小さな溜息が出る。

皆、綺麗だなあ・・・。私ってば完全に「冷やかし出場」みたいじゃない？

と、思っているのは自分だけなのだが・・・。

「おっ、あの子だぜ。あの子っ」

「どれ？ホントだ・・・。すっげーえ、かあわいいっ」

「覚えてる覚えてる。1年生歓迎会で壇上上がった子だろ？」

掲示板からかなり離れた場所で、3年生の男子が3人、噂話をしている。

「美人だなあ・・・。ミス西海に出させられるの解る気がするな」

「顔だけじゃないぜ・・・。見るよ。キレーな脚してんじゃん」

「スタイルいいよなあ・・・。たまんねーな、アレ」

いささか会話が下品なほうへずれる。

「一回『お願い』したいタイプだな」

「いやー、オレ、一回じゃ嫌だな」

「1年生だしよ。『先輩のいう事』利きかしちまおうか」

話がとんでもない方向へ行きそうになった時、そんな3人の後ろから何者かが声を掛けた。

「楽しそうなご相談ですねえ。先輩方」

その声に振り返った3人が、ギョツと驚きの表情を作る。

「美春を見て何か言っていたようですが・・・美春に何か？」

丁寧な言葉。しかしその口調はあまりにも冷たく、3人の体を凍りつかせた。

相手は1年生。しかし、その1年が学だというのが不運だったと言うべきだろう。

「は・・・葉山」

1人がやつと愛想笑いをするが、その笑いに不敵な笑みを返されてビクツとする。

「くれぐれも、美春には変な気を起こさないように。・・・お願いしますよ」

夜遊びに出ると、この3人とはたまに会う。知らない仲ではない分、3人も学の事はよく知っている。

逆らって、決して得な相手ではない。

「なっ、なんだっ。葉山の女だったの？あの子っ」

「ま、似たようなモンです」

「そんなっつ、お前の女に手え出す訳ねえじゃん。なあ？」

同意を求めるように他の二人を見る。首が折れてしまっくらい、二人とも首を縦に振った。

「それなら、いいです」

学がニヤツとすると、3人は「じゃあ、またな」と言って逃げるように校舎内へ入っていった。

ただでさえこんな奴らが多いつてのに・・・。困ったもんだな。

学は小さく溜息をついて、掲示板前でポスターを眺める美春に目をやった。

白い肌の頬をちょっとピンク色に染めて、恥ずかしそうにポスターを眺めている。

・・・お前が可愛いから悪いんだぞ。美春。

ペリペリペリペリ……。

突然美春の後ろから伸びて来た手が、目の前のポスターを剥がし始めた。

え?!何??!

驚いて美春が後ろを振り返ると、学が平気な顔をしてポスターを剥がしている。

「な、何やってんのぉ?学つつつ」

「よぉ。おはよう。みはるっ」

美春の質問には答えず、にこやかに挨拶をする。

学の出現に、周囲にいた女子生徒達が黄色い声を上げ始めた。

「あ、おはよう。……じゃなくてっ、何やってんの?そんな事したら怒られるわよっつ」

「んー?あんまりお前が可愛く写ってるから。貰って行こうと思っ
てさ」

「……」

嬉しいが困る。何故なら、その言葉を聞いていた女の子達が、一斉に美春を睨み付けたから。

学は綺麗にポスターを剥がすと、美春が写った部分が残るように丁寧に折り込んだ。

「上手く写ってんじゃん。可愛いぜ。良かったな」

ニコツと笑って、更に頭を撫でるようにポンポンツと叩く。

ポスターの写真を褒められて嬉しいが、自分と学を見ている女の子達の視線が物凄く痛い。とうとう「何よ。ちよつと可愛いと思っ
ていい気になって」という小声まで聞こえて来た。

いい気になんてなってないよぉ!と、叫びたい気持ちで美春は
いっばいだ。

「じゃあ、俺、生徒会室に行ってくる」

美春が見えるように折り込んだポスターを見ながら学が言つと、
美春は小首を傾げた。

「どつして?」

「今日から投票できるんだろ？お前に入れてくるよ。約束だからな」
「でも、投票用紙は、今日から生徒一人に一枚だけ配られるらしいよ」

多重投票を防ぐため、投票用紙は生徒一人に一枚と決められている。もちろん学祭当日の来場者にも、受付で一枚ずつのみ配られる。

「かんけーない、かんけーないっ」

ポスターで美春の頭をポンポンツと叩いて、笑いながら学が歩き出す。・・・が、2、3歩歩いてピタツと止まり、振り返った。

「ごめん！菱崎さんに挨拶すんの忘れてたっ！おはよう！涼香嬢！」
ずっと美春の横にいたのに、存在を無視（？）されていた涼香が呆れたような顔をする。何だかんだ言っても「坊っちゃん」のわりに礼儀には厳しい躰しつぱをされている学は、挨拶などは忘れない。

「いいえっ。どういたしまして。おはよう。葉山君」

どーせ、美春しか見えてなかったんでしょ。

タイプじゃないのか、興味が無いのか、涼香は珍しく学を見て騒ぐ部類ではない。

笑いながら校舎内へと入っていく学と、その後姿を見ながらポ一っとしてゐる美春を見比べて、涼香は更に疑惑の念を深める。

絶対に怪しいけど・・・この二人。

これだけ仲が良くて、彼氏彼女関係じゃないって言うのは、ちょっと異常じゃない？

と、思われても、これが昔からのこの二人なのだからしょうがない。

ポ一っ学の後姿を眺めていた美春に、今まで学を見て黄色い声を上げていた女の子達が詰め寄った。

「ちよっとお！葉山君と付き合ってたの?!?!」

またかっ！

入学してからこの台詞、何度浴びせられたか解らない。

「違いますっつてばあー!!..!!」

第4話 告示・ミス西海候補者（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

結果が出るまで1ヶ月。

ミスコン告示がされましたが・・・。

早くも周囲の美春ちゃんを見る目が変わってきました。

次回は学君と何故か生徒会長が一騎打ち（？）！
どうして？

それは、次回。

第5話 生徒会室・学VS生徒会長

「もはや3枚、やられましたよ!」

困った口調。しかし顔は笑いながら生徒会2年生男子が、あらかじめ多く作ってあった補充ポスターを3枚抜き取った。

「校舎前掲示板と、玄関内2枚。もう剥がされてしまったらしいんです」

今日から告示された学園祭のイベント、「ミス西海学園高校コンテスト」候補者ポスター。

毎年ポスターが剥がされる事件は数件起こるが、告示日の朝からというのは、ミスコン始まって以来ではないだろうか。

「やっぱり多めに作っておいて良かったですね。生徒会長」

2年生の言葉に、生徒会長である本條 由貴人はニコツと笑う。

「あれですよ。会長推薦の1年生効果ですよ。誰が見ても一番ですから!」

そう言いながら、彼はポスターを抱え、張り切って生徒会室を出て行った。

ガランとした広い生徒会室の中に、由貴人だけが残る。

由貴人は生徒会室の中に貼られたポスターの前に歩み寄った。

「本当に、可愛いよね」

ポスターの上部。1年生でただ1人の候補者。

1年1組。光野 美春。

自分が推薦した女の子を、皆が間違いないと褒めてくれる。

無理もないよな。本当に「間違いなし」だから。

由貴人は満足そうに微笑み、そしてポスターの下部、3年生候補者5人の中の1人に目を移した。

ちよつとキツメの顔をした美人。薄化粧をしているせいか、少々唇の色が濃い。

昨年、一昨年、2年連続の「ミス西海」。朝比奈 繭子。

その顔を見ながら、由貴人は馬鹿にするようにフツと笑った。
もう君の時代じゃないのだよ……。繭子……。

その時、生徒会室のドアにノックの音がして、由貴人が返事をする前にドアが開いた。

「失礼します」

入ってきたのは学だ。その姿を見て、由貴人は驚いた顔をした。

「生徒会長。いらっしやいましたか。ちょうど良かった」

物怖じしない口調は、学が1年生である事をまったく言っていないほど感じさせない。

「葉山君……。だよね。君みたいな有名人が、なんの御用かな？」

その逸脱した容姿と頭脳、そして家柄。あまり良い噂ではないが、遊び人な事でこの界限で知らない者はいない、と言われる葉山の御曹司。その彼が系列中学を経て、この高校へ入学してくるという話は、入学前からの大きな話題だった。

もちろん由貴人も学の事は知っている。

学は生徒会室の中をキョロキョロと見回すと、部屋の隅の長机の上に、コンテスト用投票箱と一般来場者用の補助投票用紙が乗っているのを見つけた。

「投票箱が、まだ生徒会室の前には出ていなかったようなので、投票しに来たのですよ」

投票用紙を1枚取って、傍にあったボールペンで記入を始める。

「生徒用の投票用紙は、今日の朝のH、Rで配られるはずだよ。ポスターは見ていないのかい？」

すると学は、ちょっと馬鹿にするようにフツと鼻で笑う。

「知っていますよ。そのポスターもとくに頂きました……。まあ、コイツの場合は今さら1票や2票増えたって、何の影響もないと思いますよ」

そう言いながら、美春が見えるように折り込まれたポスターと、今書き込んだ投票用紙を自分の顔の前でかざして見せる。

投票用紙には、しっかりと「1年1組 光野美春」と書かれています。

た。

「美春を推薦したのは、会長だそうですね」

顔の前でかざしていたポスターをゆっくりと下げる。学の表情が、さつきまでとは違う冷たい無表情に変わっていて、その目を見た瞬間、由貴人の体は意識しないままに身震いを起こした。

「実にお目が高い・・・」

褒め言葉のわりに、口調は冷たい。

学は手に持っていた投票用紙を投票箱の中に入れ、長机に後ろ手を付いて、さつきと同じ目で由貴人を見据えた。

「美春を推薦するなんて、あなたの目に間違いはありませんよ。さすがは生徒会長だ」

「・・・あまり・・・褒められている気がしないのは、気のせいかい？」

学の目に見据えられて緊張した体が、かすれた声を発する。

「何故。美春を推薦なさったのですか？」

「君がそう言うくらいだ。・・・解るだろ？彼女は非常に美人だよ。今年の1年生、いや、我校の女子の中では1番じゃないかと思うくらい。・・・1年生は、上級生に遠慮して、自薦どころか他薦でも滅多に出ない。・・・でも、彼女、光野さんを出さないのは間違いだと思わないかい？」

「それだけの理由ですか・・・？」

由貴人は言葉に詰まる。確かに、そんな理由だけではない。

学は腕を組むと、上から由貴人を見下ろすように見た。

「美春に、ヘンな気は起こさないほうがいいですよ・・・」

気になっている女の子を「好きになるな」と言われているようなものだ。由貴人にだって男としてのプライドがある。彼は一度ごくりと喉を鳴らしてから、自分を冷たい目で見据える学を見据え返した。

「・・・彼女は、君の『彼女』なのかい・・・？」

「・・・俺のもの」みたいなものです。だから、余計な手は出す

な、と言っている。・・・これ以上の説明は必要ありますか？」

由貴人のささやかな反撃も、学には何の効果もない。

黙ってしまった由貴人を見て、これ以上の攻撃は不要、と判断した学はフツと勝者の笑みを浮かべる。

「では、失礼します。生徒会長」

生徒会室を出ようとして、ちょうど入ってくるころだった2年生女子とぶつかりそうになる。それに驚いた女子生徒がよろけるが、その腕を学が素早く支えた。

「大丈夫ですか？驚かせてしまって申し訳ありません、先輩」

実に優しく彼女の体勢を立て直させ、につこりと笑って立ち去る。それをされた女子生徒は、あつという間に大興奮だ。

「いつ、今の、1年の葉山君ですよねっ！えっ・・・えっ？生徒会室に何の用事だったんですかぁ？！会長！！」

ハシヤギまくる女子生徒をよそに、由貴人の体の緊張はまだ解けない。

あいつ・・・。なんて目をしているんだ・・・。

壁のポスターに目をやり、美春を見詰める。大概の男性ならば誰でも、引き込まれずにはいられない。可愛らしく爽やかな笑顔。

「こんな笑顔を向けられて、「好きになるな」って言うほうが間違っている。そうは思わないか？葉山君。・・・彼女に対して、ガードが固すぎるよ・・・。

引き込まれてしまいそうな美春の瞳。その瞳を見詰めながら、由貴人は「人懐ひとなつつこく、気さくな生徒会長」という評判には似合わない顔で、にやりと笑った。

「・・・まだ君に、手を出せる時期ではないみたいだね・・・。美春ちゃん・・・。」

「遅かったね。もうH、R始まるよ」

学が教室に入ると、先日の席替えで幸か不幸か廊下側の一番前の

席になってしまった美春が、自分の席から声を掛けて来た。

美春としては、自分は女子の中では背が高いほうなので、出来るなら席は後ろのほう良かった。自分が前に居るとうしろのひとが黒板を見づらいのではないかと思ってしまうのだ。

しかし席替えはくじ引き。廊下側の一番前なら、そんなに後ろの人に支障もないかな、と諦めた。

ちなみに学は、その美春の斜め後ろだ。

もちろん学自信その席がよくて、本来その席になるはずだったクラスメイトに快く(？)相談の上で代わってもらった。

そんな事をするなら、いつそ横のほうが良いのでは？と思われるかもしれないが、真横より斜め後ろのほうが授業中に美春の横顔を眺めやすいという理由がある。

「美春に1票入れて来たからな」

座っている美春の高さに合わせて、机にひじを付き同じくらいの高さまで屈む^{かが}。美春がちよっと照れくさそうに笑った。

「ありがと」

学の手には、美春だけが見えるように折り込まれたポスターが、しっかりと握られている。嬉しいような。恥ずかしいような。複雑な思いが美春の胸をいっぱいにする。

「じゃあ、その感謝の気持ちを手で表してくれよ」

「は？」

美春の両頬に手を当て、顔をグツと近付ける。

「キスして。みはるっ」

「あっ・・・あほっ!!」

パシーーンッツ!!

毎朝恒例の光景。

本日1発目。

終了。

第5話 生徒会室・学VS生徒会長（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

とりあえず、由貴人君は美春ちゃんを諦めるようです。

・・・今は・・・ですが。

彼がこの先数年後、何をしてしまっかが知りたい方は「完璧な愛」
の方の第1部をどうぞ。（笑）（あっ、でも15歳以下の方は駄目
よ！）

さて、学君に敗北をした由貴人君ですが、その彼にもう1人、文
句を付けに来る人がいます。

誰？

それは、次回。

第6話　モトカノ・プライドと嫉妬

「美春ちゃん」

背後から自分を呼び止める、妙に甘ったるく舌足らずな声。

学園祭のクラス看板制作のために美術室へ画材を借りに行き、借りた画材が沢山入った箱を抱えた美春は、教室へ戻る途中その声に呼び止められた。

「大変だねえ。重くない？」

そう言つて横に並んだのは、隣のクラスの桂木　静香だ。

合同授業の時に一緒になる程度の間柄なのだが、静香が人懐っこいらしくよく声をかけられる。

肩に付くか付かないかほどの長さの髪はパーマをかけているのだろう。きれいに内側に巻かれ、その髪にカチューシャが可愛らしい。

「うん。大丈夫だよ。見た目ほど重くないから」

「あと2週間だね。学祭」

そう言つて笑つてから、下から美春を覗き込み指を指す。

「美春ちゃんに入れてきたよお。ミス西海」

「あ、ありがと……。ごめんね。気を遣わせちゃつて。同じ1年だから入れてくれたんでしょ？」

笑いが引きつる。未だにミスコンの話をされると照れくさい。

すると静香は大袈裟おおげさに手を左右に振つた。

「無理なんてしてないよお。噂だけだね、生徒の80パーセントは美春ちゃんに投票してるらしいよ」

「……。うっ、うそお……。そんなわけ無いよ……」

「ホントよお。ウチ彼氏が言つてたもん。2、3年生もほとんどが入れてる。って」

「……。静香ちゃん、彼氏いるんだ？」

思ったより自分に票が入っているという話よりも、静香に彼氏がいるという話のほうが気になってしまう。

静香はニコツと笑って、美春の横に立ち歩き出す。

「うん。いるよ。3年生。先月からつきあってるの」

「へーえ」

中学の時もそういう子は結構いたけど、やっぱり高校生とかになると皆彼氏がいたりするんだなあ。私は全然、縁が無いけど。

本当なら「縁」は吐いて捨てるほどあるのだが、自分が片想いをしている（と、思い込んでいる）学が原因で「縁」が無くなっているとは、美春は知るよしも無い。

「美春ちゃんにだっているじゃない。カッコいい彼氏」

「え？いないよお。私そういうの、全然縁が無いし」

「やだあ。見てたら解るよお。彼氏なんでしょ？葉山君っ」

ドサツ！！手に持っていた箱を落としてしまう。

「ち・・・違うよおっつ！！」

なぜか美春は真っ赤になってしまった。

「由貴人！！」

幸か不幸か、そのとき生徒会室には彼一人しかいなかった。そこへ怒鳴り口調で飛び込んできた一人の女子生徒。

しかも、自分の名前を叫びながら飛び込んで来たという事は、明らかに自分に対して怒っている。

由貴人は最初驚いたが、飛び込んできた人物の顔を見て呆れたように笑った。

「何か御用ですか？現在『まだ』ミス西海、の朝比奈さん」

口調が少々嫌味っぽい。

キツイ目を更にキツクして、朝比奈 繭子は由貴人を睨み付ける。そして会長用デスクの前に立つ由貴人の傍へ歩み寄った。

「どうしてあんな1年、出場させたのよ！聞いたわよ！あなたが推薦したんですってね！」

「おやあ？何を怒っているんだい？生徒会長として僕は学祭を盛り

上げなければならぬ立場なんだよ。その為にした事だ」

「だからって、何であんな・・・！」

「あんな」そこまで言つて言葉は止まる。つい「あんな可愛い子」と言つ所だった。繭子にとって見れば、一番認めたくない事実だ。

「繭子・・・」

由貴人は少々冷たい口調で、繭子を見下ろした。

「君が『ミス西海』になる事はもう無理だよ。多分知っているから怒っているんだと思うが、全生徒の約80パーセントの票をあの一年生が獲得している。生徒の間ではもう噂になっているよ」

悔しげな繭子から目をそらして、壁側のポスターの前へと歩み寄り美春の笑顔を見つめた。

「ほぼ彼女に決まりさ。来場者投票だつて恐らく同じような事が起こる。諦めなよ繭子。今回の君の出場はまさに彼女の『引き立て役』でしかない」

「そんな事言わないでよ！由貴人！」

情けない声を出しながら繭子は由貴人の背後へ走りより、その背中に抱きついた。

「お願い。協力してよ。あなたと私の仲でしょう？」

「・・・またそれが」

由貴人がちよつと忌々（いまいま）しげに舌を鳴らす。

「去年だつて、はつきり言えば繭子がミス西海になれるはずじゃなかったんだ。それを僕が票数操作をしたお陰でその座を守れた・・・でも今年は、そうはいかない」

「由貴人！」

「どう考えたつて、誰が見たつて、優勝はあの子しかない。そんな見え見えの票数操作ができるものか・・・する気もない！」

繭子は由貴人の体に回した腕に力を入れた。大きな胸を押し付けるように抱きつき、彼の制服のネクタイを意味ありげに指でいじる。

「お願いよ・・・由貴人・・・」

声のトーンが、どこか色っぽく由貴人の耳に響く。しかし由貴人は「そんな声は聞き飽きた」とばかりに繭子の腕を振りほどいた。「やめろよ今更！だいたい、別れるって言ったのはお前のほうだろう！それも1ヶ月前に！もう僕とは関係ないはずだ！」

「でも、あなたのごときは好きよ！本当よ！」

まるでさすがのように由貴人のブレザーを掴むが、そんな繭子を由貴人は冷たく見下ろした。

「ご執心しゅうしんだった1年には、フラレたんだろ？」

凶星を衝かれたように繭子の表情が固まる。

「お前が入れ込んだ1年の色男には、心に決めた姫がいるようだ。お前がどんなに体を張ったって無駄さ」

由貴人から手を離して、繭子はバツが悪そうに顔をそらした。

「・・・あんまりアツサリ断るから、『一晩でいいから付き合って』って言ったのよ。そうしたら絶対私のものにする自身があったのに・・・それも断られたわ。遊んでるって噂だから、ソツチならノツてくると思ってたのにさ」

「お前、ソツチ好きだもんね」

繭子の肩に手をかけて、ちよつとからかうように顔を覗き込む。

そして由貴人は楽しそうに喉の奥で笑い出した。

「でも無理だな。お前に引つかかるような男じゃない。諦めな」

1ヶ月前、繭子のご執心の1年生、学に告白をしてアツサリとフラれた。由貴人は言わば心変わりをした繭子に、フラれたことになる。

「あなたまさか。私への腹いせにあの1年生を推薦したんじゃないでしょうね」

繭子是由貴人を睨み付け、壁に貼られたミス西海学園高校コンテスト候補者ポスターを指さした。

その指の先。美春の顔に目を移して由貴人はふつと笑う。

「・・・最初はそのつもりだったけどね。・・・お前と同じさ。僕も、あの1年生にご執心気味だ」

ボタン……。生徒会室のドアを後ろ手に閉めて、繭子は険しい顔で足元を見つめていた。

冗談じゃないわよ……。

悔しさに手が震える。

何で私が、あの1年に馬鹿にされなきゃならないの。

自分が学にフラれた原因は、美春。

そして由貴人は、自分を貶める為おとしめに美春を推薦した。その彼も、今は美春に心が動いている。

プライド高い繭子は、非常に面白くない。

「引きずりおろしてやるわ……」

憎々しげに、呟いた。

第6話　モトカノ・プライドと嫉妬（後書き）

こんにちは。玉紀　直です。

ちよつと危ない先輩が登場です。

繭子サンはよく敵役に使われがちな「美人を鼻にかけて、わがままでプライドが高い」タイプの人ですね。

知らないところで対抗意識を燃やされてしまった美春ちゃんです
が……。

さて、何か生々しい元カップルの後は、爽やかでじれったい甘々な二人でお楽しみ下さい。

では、次回。

第7話 教室・優しさと切なさ

「学！今日、夜遊びに行くの?!」

帰りのH・R・最後の礼をして頭を上げた瞬間、くるっと後ろを振り返って美春は学に訊いた。

「ん？今日？」

美春がそんな事を訊いてくるのは非常に珍しい。「何だろう。急に」と思うものの、美春が何となく不安げな顔をしているのを見てピンと来た。

美春、緊張してんのか？

学園祭まで、あと1週間もない。平気な顔をして過ごしてはいるものの、1年生候補は美春一人。いやでも好奇の目にさらされ続ける毎日。

何となく声をかけてきそうな男連中は、すぐに学が何とかできるが、さすがに人の目までは防ぐ事が出来ない。

意外に度胸があり、本番に強い美春ではあるが、直前はやはり不安だし緊張もする。そんな時、学と一緒に居てもらいたがるのを、幼い頃から美春を見ている学には解っている。

不安な時に自分を頼ってくれるのが、学は凄く嬉しい。

学は上半身を折り曲げ、美春の顔を覗き込む。

「お前のトコに行くよ。待ってる」

ドキン……。

まるで自分の心を読み取ったかのような学の言葉に、美春の胸は高鳴ってしまう。

優しい顔で微笑みながら発せられるその言葉は、美春の耳の奥で響き続ける。

「ケーキでも買っついていこうか？甘い物食べると気持ちが落ち着くから。何がいい？」

自分が緊張気味なのを解ってくれている。冷やかしもせずに優しく接しられると、さすがにいつもの意地っ張りな態度も出てこない。「・・・何でもいいよ・・・」

「よしつ。じゃあ、「メリイ・メリイ」のミルフィーユにしよう。しっとりパリパリ系。好きだろっ？」

そして、人差し指で美春の鼻先をツンツとつつく。

「ちゃんとコーヒー用意しておけよ。今日はたまに美春お手製のアイスコーヒーがいいな。　　本当は、ビールのほうがいいんだけどっ」

アルコールに強い父親を持っているせいなのか、はたまた遊び歩いているせいなのか、あまり大きな声では言えないが、学はアルコールに強い。

強気の時ならば「未成年！！」と怒鳴って、頭のひとつも怒突いしてしまうところだが、今は少々そんな気分じゃない。

「アイスコーヒー作ってあげるから、我慢しなさいよ」
そう言っって赤くなりながら、学を見詰めた。

学は、何だかんだで優しい。

私が、傍にいて欲しい時がすぐ解る。

不安を抱えている事を、すぐに解ってくれる。

「幼馴染」だから・・・？

だから私には、こんなに優しいの？

キュッ・・・。

ちょっと胸が、締め付けられるように痛くなる。

学が、女の子に優しいのは、当たり前……。
「特別」な感情が入っている訳じゃない。
特に、「幼馴染」なだけの私になんて……。

「美春」

いつの間にか目を伏せ気味にして、泣きそうな顔をしていた美春に、学が心配そうに声をかける。

「……どうした？」

「うつん。何でもないよ……」

美春は顔を上げて、ニコツと学に笑いかけた。

「待ってる」

そんな二人の様子を、ちょっと離れた席からジーツと眺めていたのは涼香だ。

「じれったいねえ……」

涼香の横から誰かが声をかける。涼香が目を向けると、いつの間にか信が横に来ていて、ニコツと笑った。

「あれだけ仲良しさんで何の進展もないんだよ。どう思う？ 菱崎さん」

「どう思うも何も、じれったいを通り越して気持ち悪いわ。あんなに美春にかまうなら、手のひとつも出してみる、ってもんじゃないの？ 遊び人の名が泣くわよね。葉山君」

「……菱崎さんは……葉山の事が、気になるの？」

さりげなく、さりげなく。信が一番聞きたい事を切り出す。すると涼香は、少々怒ったように信の鼻先へ指を突きつけた。

「私は、美春が心配なの！ 葉山君なんて論外っ！」

本心から繰り出されるその言葉に、信はホツとする。

実のところ信は涼香が好きだ。

入学式の日、桜の木の下に佇む涼香を見て一目惚れをした。

しかし彼は何と書いてもあの学の親友。学と一緒に居ると、何と
言うか、目立たない。

学が美春と仲が良く、そして美春は涼香と仲が良い。そのお陰で
涼香と話す機会は結構あるものの、自分の事を嫌っていないかが気
になるところだ。

「・・・菱崎さんは、どういった男が好きなの？・・・葉山のこ
と気にしない女の子なんて、珍しいよ・・・」

学の事にかこつけて、再び自分が凄く訊きたい事を訊く。

「かつこいい人」

間髪居れず返事が返ってくるが、信は少々へこむ。・・・それつ
て、モロ葉山の事じゃねーの？

「ただ・・・」

訊かなきゃ良かった。と、地獄に落とされそうになった時、涼香
はもう一言「天使の言葉」を付け加える。

「田島君みたく顔が可愛い人がいいな。でも、たまにカツコ良くな
るの。そんな人が一番好き」

倒れそうになるくらい胸が高鳴る。どちらかといえば、信はアイ
ドル系の可愛い顔付きをしている。

そのせいなのかどうかは解らないが、中学の時に付き合っていた
のは高校生や大学生など、いつも年上のオネーサンばかりだった。

・・・ただ、付き合ってくれと言うのも、別れる、と言うのも、いつ
も女性から。・・・という少々可哀想な経歴の持ち主でもある。

もしかして、オレの事、気にかけてくれてんのかな？！などと浮
かれた気持ちになるものの、天使の言葉の後にすぐに悪魔はやって
きた。

「まっ、私の周りにそんな人、居ないけどね」

ガクン・・・。

りよ・・・りよーかちやあん・・・。

「葉山君」

学と美春が何となくほっこりとしたムードを作っている時に、ちよつとキツイその声とその場の空気を乱した。

前のドアから聞こえたその声に、背を向けていた美春が振り向く。少々崩した制服の着方。大人っぽい顔つき。薄化粧をしているのだろうか、キツ目の顔をした美人。

女子の制服はセーラータイプなのだが、彼女は胸当てをはずし、夏服のスカートであるピンクチェックが入ったライトグレーの箱ひだスカートを、はるか膝上の長さで穿きこなしている。そこからスラリと伸びた脚が綺麗だ。

実際、その脚線美は彼女、 繭子の自慢でもある。

・・・この人。ポスターに載ってる。3年生だ。

美春は、そんな人が学^いに何の用なんだろう。と、ちよつとドキドキしたが、そんな美春を一瞥^{いちべつ}して繭子は教室の中へ入り込み学の前に立った。

「・・・話があるの」

「あなたとの話は、1ヶ月前に終わりましたよ。先輩」

優しい口調で、学は遠回しに断る。

「・・・聞いておいた方がいいと思うわよ」

そう言つて、横目でチラツと美春を見てみせる。意味ありげに笑つて再び学を見上げた。

美春の話なのか、と悟つた学は、繭子の背中を押して教室の外へ行くように促した。

「聞きましよう」

心配そうな顔をしている美春に、笑つて手を上げてみせる。

そして、二人で廊下を歩き出した。

第7話 教室・優しさと切なさ（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

ほっこりムード・・・ですが、美春ちゃんの気持ちは切ないです。学君が女の子に優しいのは当たり前。そう思ってしまったからです。

もう一人。信君の恋の行方も気になるのですが。（クスクス）

次回は何と、学君に貞操の危機！（？）

・・・学君に「貞操観念なんてあるの？」なんて訊かないで下さい。（笑）

って、訳で、次回は少々展開が大人っぽく色っぽいです。

（色っぽいだけですよ！）

では、次回！

第8話 保健室・誘惑の罠

「お話をするのに、ここじゃなければいけないのですか？」
学はそう言つて部屋の中を見回した。

「保健室。とは。また変わった場所をセレクトしましたね」

「話がある」美春を見ながら学が来ざるをえない雰囲気を作り、
繭子が学を連れてきたのは保健室だった。

ドアには「外出中」のプレートがかかっている。今日は昼前から
養護教諭の高柳が留守。繭子はそれを知っていた。

「大事な話なの」

先に学を部屋に入れ、後から入った繭子は後ろ手にドアの鍵を閉
めた。

「誰も居ない所のほうが良いと思つて」

広く静まり返つた保健室。

放課後という事もあり、生徒が部屋の前を通り過ぎる足音や声が
時々聞こえるものの、「外出中」のプレートがかかっているせい
か入つてこようとする者は居ない。繭子が鍵を閉めてしまつてい
るのに入ろうと思つても入れないだろう。

3台置かれた、安静用の簡易ベッド。誰か安静者が居ればカー
テンが引かれて、ひとつひとつ仕切られるのだが今は誰も居ないので
3台きれいに並んで見える。

そのうちの1台に、繭子は深く腰掛け、大きく脚を組んだ。

校則規定の膝丈から、はるかに上げられた制服の箱ひだスカート。
そこから必要以上に2本の脚がむき出しになる。

脚線美に自信があると言つ態度が、見え見えの行為。

組まれた脚は、下からなぞつてその形を確かめたくなるくらい形
良く艶なまめかしい。

こんな物を目の前にさらされて、目を引き付けられない男は恐らく居ないだろう。

もちろん学の視線も、明らかに繭子の脚に落ちている。見られているのが解って繭子がにやつとするとするが、その時学が考えていたのはまったく別の事だった。

美春の脚のほうが、きれいだな・・・。

少々繭子が気の毒だが、学はこういう男だ。しょうがない。

「美春の話ですか？」

なかなか繭子が切り出さないの、学のほうから切り出した。

繭子は太ももまで捲くれ上がったスカートから伸びた脚を、これ見よがしにブラブラ動かして、ベッドに両手を付き、学を見上げる。

「あの子に、コンテストを辞退させてくれないかしら」

「何故です？」

「私、2年連続『ミス西海』やってるから解ってるんだけど、ミス西海になるとね、いろいろと誘惑が多いのよ」

前屈み気味に体を倒し、学の手をとる。そのポーズをすると、外してある胸当ての部分から胸元が覗き見えるのだが、繭子は明らかにブラジャーを付けてはいなかった。

「学校内外、色んな男に声をかけられるわよ。それじゃなくても西海高校は美人が多いって巷ちやうで有名なんだから。そのミスコンで優勝した、なんていつたら当たり前前よね」

「それで・・・？」

「色んな男が寄ってくるわよ。　　いいの？あなた、あの子と仲が良いんですよ？」

手に取った学の手を、明らかにブラジャーを付けていない自分の胸に、制服の上から押し付ける。

「何か、優勝間違いないし、って言われてるみたいだから教えておいてあげようと思ったの。だって、そんな誘惑が多い環境になっちゃ

うのつて、あの子が可哀想じゃない？まだ1年生なんだし。

出場辞退させてあげたほうが、あの子の為よ。私もそうして欲しいのよね。もし、あなたが、あの子を辞退させてくれたら・・・」

胸へと押し付けた学の手を上から握り、意味ありげな微笑で学を見詰めた。

「私・・・何でも、してあげる・・・」

養護教諭、高柳玲子は、疲れた顔で学校へと戻ってきた。

結婚して保育園に通う子供がいるが、まだ歳は28歳。

今日の昼前、5歳の子供が保育園の遊具から落ちて頭を打つたとの連絡が入った。保育園側で連れて行ってくれた病院へ様子を見に行くため、保健室を留守にしていたのだ。

幸い、怪我という怪我でもなく、子供は元気だったので一安心だったのだが・・・。

ああ、びっくりした。心臓に悪いわ。本当に。

「先生」

校内を保健室に向かって歩いていると、2年生らしき女子生徒が3人、一人を真ん中に両方から肩を貸すような形で歩きながら、玲子呼び止めた。

バスケット部のユニフォームを着ていて、真ん中の生徒は足を引きずっている。どうやら捻挫でもしたようだ。

「良かった。先生出掛けてるって聞いたから、どうしようと思ってたんですけど・・・」

「どうしたの？捻挫？」

「転んじやって。足が動かないみたいなんです」

「それは大変ね。保健室までもう少しだから。頑張って」

あまり急がないように歩きながら、4人は保健室へと向かった。

「何でも。・・・ですか？」

「・・・何でも」

その気になったかもしれない。繭子がそう思った瞬間、学はクツと喉の奥で笑った。

「女の体、っていう物は、最高の武器ですね。・・・でも、その使用方法を間違うと、最高の屈辱を味わってしまう事をご存知ですか」「え？」

「よく『女に恥をかかせないで』と言う女性がいる。自分から誘って男がその気にならなかつたら出る言葉だ。・・・屈辱的で恥ずかしいから出る言葉。・・・自分に自身がある女性であればあるほど、その屈辱は大きい」

学は身を屈めて、繭子の顔を覗き込んだ。

「俺は、あなたの誘いに乗る気はないですよ」

一瞬にして、繭子の顔が赤くなる。

今まで誘ってなびかなかつた男など居ない。こんな屈辱は初めてだ。

「あなたか誘ってなびかなかつた男が居る。最高の屈辱でしょうね。他の人間には、恥ずかしくて絶対に知られたくない話じゃないですか？」

繭子は悔しそくに学を睨み付けた。学ならば美春のミスコン出場を止められると思っていたのに。その為に体を張ったというのに、学は何の関心も示さない。

自分に自身がある繭子のプライドは、二重三重にスタボロだ。おまけにこんな話、他人には絶対に知られたくはない。

「もう、こんな無駄な事はやめるんですね。あなたが傷付くだけでしよう。・・・やめるなら、今回の事は俺も決して口外はしない」
その時、鍵が掛かった保健室のドアが、ガチャガチャと音を立てた。

「あら？」

玲子は首を傾げる。

保健室の鍵。掛けて行っただけ？

しかし、後ろには怪我人が居る。そんな事を考えている場合ではない。

玲子は白衣のポケットから鍵を取り出すと、ドアの鍵を開けた。

カチャツ……。

鍵が開く音。その音に、養護教諭が戻ったのだらうとドアのほうを振り返った学の腕を、繭子は思い切り引っ張った！

「！」

不意をつかれ引き寄せられて、そのままベッドへ倒れこんだ繭子に、覆い被さる様に倒れ込んでしまう。

ドサツ！二人がベッドへ倒れこむ大きな音と、ドアが開く音が同時に響いた。

ベッドの仕切りカーテンは引かれていない。

ドアを開ければ、そのまま二人の姿は丸見えだ。

保健室のベッドの上で、折り重なった二人の男女。

彼女の白く綺麗な脚は、しっかりと彼の制服の脚に絡み付いている。

ヤベツ……！！あわてて学が身を起こす！

が、遅かった……。

「何やってるのあなた達！こんな所で！！」

玲子の、慌て驚いた声が響き渡った。

第8話 保健室・誘惑の罠（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

学君を利用しようとした繭子さん。

ただ彼は、そんな物に引っかかるような男ではないのです。

でも、誤解なんです、大変なところを見られてしまいました。
この場をどう切り抜ける？

次回も学君が美春ちゃんを守るために大活躍！

でもその後は、ちゃんと爽やかな甘々が待ってます。（クスクス）

それは、次回。

第9話 目の保養・きれいな美春

「1年の葉山君・・・」

玲子がベッドから下りた学を見る。

「それに、3年の朝比奈さんね」

そして、ベッドから上半身を起こした繭子に目を移した。

学の事を知らない教師はいない。繭子も「現・ミス西海」として名前と顔は知れている。養護教諭とはいえ、玲子ももちろん二人の事は知っているのだ。

「あなた達ねえ・・・」

頭痛がしそうな思いで、玲子は頭を押さえた。

保健室のベッドで重なり合っていた二人。

思春期の少年少女が通う高校だ。もしかして今までだって、そんな事が保健室の中であつたかもしれない。

しかし、目の前でそれを目の当たりにしてしまったのは初めてだ。

と、その時繭子が、胸当てのない胸元を押さえて悲壮な声を出した。

「すみません、先生。彼が・・・彼が、どうしてもここで、って・・・

言うから・・・私、保健室は駄目だ、って、言ったんですけど・・・

・・・

学が驚いて繭子を見る。

これでは、合意の上で本当に抱き合っていました、と言っているような物だ。

玲子はハーツと溜息をつく、学をキツと睨む。

「葉山君！」

両手を腰に当てて、教師として正しいのかどうか疑問な言葉を吐く。

「あなたねえ！お金持ちなんだから、こういう事がしたかったらホテルにでも行きなさいっ！！」

教職員から吐かれるその言葉のおかしさに、学が吹き出す。

「はい。すみません。高柳先生」

クスクス笑いながらも素直に謝る学を見て、驚いたのは繭子だ。てつきり「違う」と、学が言い訳をするものだと思っていた。

本当におかしそうにクスクス笑う学を見て、玲子は「自分が言ってしまった事は変だったのかもしれない」と思う。

しかし、彼女にとってこの保健室と言う場所は、生徒達の怪我と心を癒す「聖地」なのだ。

そんな大切な場所を、一時の快樂の場所に使われてたまるもんですかっ！！

そのくらいの思い入れがある……。

「どうして、言い訳しなかったの？」

保健室を、ほぼ「追い出される」形で出た後、繭子は廊下に佇んたたずだま学に訊いた。

「言えばよかつたじゃないの？『俺はそんなつもりはない。この女が勝手に言ってるんだ』って」

「言って欲しかったんですか？」

学は腰に手を当て、繭子を見下ろす。

「俺は、『遊び人』だとか『とつかえひつかえ君』だとか、陰で色々言われている男ですから、今更こんな噂の一つや二つ増えたって構いやしませんよ。……でも、あなたは困るのではないですか？
・あなたを悪者にするのは、とても簡単な事ですがね」

重なった時に解けてしまったのだらう。繭子の制服のリボンをくるくるつと丁寧なりボン結びにする。上品なピンクにグレーのチエックが入った手結びのスカーフ。

「女性としてのあなたが……傷付くでしょう？」

繭子は眉を寄せ、情けない顔で学を見た。

「・・・かばったの？・・・私を？」

リボンタイから手を離し、長めの前髪をすつと掻き上げる。

「あなたはちょっと、自分の美しさに溺れてしまっているだけの人ですから」

「バツ・・・バカじゃないの！私、あなたを利用しようとしたのよ・・・」

「ええ。そうですね」

「あまけに、自分可愛さに作り話までしたのよ」

「だから、言っているでしょう？自分に溺れている。って」

髪を掻き上げていた手をフツと止めて、学は一度目を閉じる。

「でも、もし・・・」

ゆっくりと目を開くが、その目を見た瞬間、繭子の全身の血は凍りついた。

「自分に溺れた勢いで、あいつを・・・美春を傷付ける様な事があれば、俺は、たとえ相手が女でも容赦はしない・・・」

冷たい視線。全身を切られるような鋭いその瞳に、繭子は動けなくなる。

「それだけは、覚えておいて下さい」

そう言い残して、学は廊下を歩き出した。

ちよつと、溜息をつく。

ああ、早く美春に会いたい・・・。

「すつごく美味しいよお。学」

嬉しそうにニコニコしながら、可愛い声で可愛い一言。

疲れもイライラも、全て吹っ飛んでいってしまいそうな笑顔だ。

午後8時過ぎ。もちろん今日は遊びになど行かず、夕食を済ませ

てから学校帰りに買ったミルフィーユを持って美春の部屋へ来た。
・ ・ ・ もちろん、ベランダから。

学は美春お手製のアイスコーヒーを飲みながら、幸せそうにミルフィーユを口に入れる美春を眺めた。

体の線が出てしまうような、ちよつと体にフィットする五分袖のカットソー。

美春にその気がなくても、普通に学はその体の線をジーツと目で追ってしまつ。

おまけに、柔らかかそうな生地の薄ピンクのスカートは、膝上の短さ。

ベッドに腰掛けているという事もあつて、床にそのまま腰を下ろしている学には、スカートから伸びる白い綺麗な脚がバツチリ目に入る。

もしこれが意識的にやっている物であるなら、彼としては今すぐにも押し倒してしまいたいところだ。 ・ ・ ・ が、美春にはそんな「意図」も「策」も何もない。ただの「普通」だ。

・ ・ ・ ああ ・ ・ ・ むちゃくちゃ目の保養 ・ ・ ・ と言つたか、目の毒、と言つたか ・ ・ ・ 。

そんな少々複雑な思いで、学は美春を眺めた。

あまりにもジーツと眺められていたせいだろうか。美春がその視線に気付いて学を見る。

「な、何？学」

ずつと見られていた事に気付いて赤くなる。何だろう。変な顔して食べてたのかなあ？

「別に。見てるだけ」

微笑みながらそう言われると、やっぱり照れる。赤くなってきたのが顔の熱さで解つた。 ・ ・ ・ やだ、またからかわれちゃうじゃない ・ ・ ・ 。

そう思つた美春は、学が何かを言い出す前に先手を打つた。

「ねえ、学。あの先輩、何の用だったの？」

「先輩？ああ。帰りに来た3年？」

美春は今日の帰りから、ずっと繭子の事が気になっていたのだ。

「ま、また、付き合つて、とか、言われたの？」

「まあな。いつもの事だよ」

「でも。あの先輩には、前に断つてるんでしょ？」

「あなたとの話は終わっています」学がそう言っていた事で、美春は、以前繭子が学に告白をしている事が解つた。

学はグラスを置いて立ち上がると、美春の前に立ち、身を屈めて彼女の顔を覗き込んだ。

「気になる？」

「べつ、別につつつ」

否定はするものの、動揺が顔と言葉に出てしまう。

学は美春の目の前で、にこつと極上の笑みを浮かべた。

「何回、誰に言われたつて、断るよ。当たり前だろ」

お前以外の女となんて

付き合う気なんかねーよ。

「ばつ、ばつかねえ……。あんな綺麗な人つ……。もつたいないつつ」

学が告白を断つて嬉しいのに、心にもない言葉が口から出る。

顔が熱い。あーん、もう駄目だあ……。顔が真っ赤なの、きつと学に気付かれてるよお。

「本当に、もつたいないなんて思つてんの？」

「だつ、だつてつつ、学、綺麗な女の人、好きでしょつ？」

「好きだよ」

「だから、あの人もつ……」

「美春みたいな、綺麗な女の子」

ぴたつ……。動揺を続ける言葉と動きが止まる。

もちろん、冗談で言われているのだらうと美春は思っているが、

「美春みたいだな」と言う言葉に、心臓は学に聞こえてしまうのではないかという位ドキドキしている。

学・・・言つてよ。

「なーんてな」って。

「本気にした？たーんじゅんっ」って。
いつもみたいなのに、からかってよ・・・。
じゃないと・・・。

ドキドキして、止まらないよ・・・。

「あ、そうだ。ちょっと確認したいんだけどさ」

今何かを思い出したらしい。学が拳をポンツと手のひらに打ちつけ、スツと美春の前に屈んだ。

「どうしたの？・・・つてえええっ?!」

美春がキョトンとしたのも束の間。学は美春のスカートを、太もものほるか上までグツと捲り上げたのだ！

「うん。やっぱり、美春の脚のほうが綺麗だ」

もう少しで脚の根元まで見えてしまいそうな所まで捲り上げられたスカート。そこから伸びる、白く綺麗な2本の脚。

その最高の目の保養を、じっくりと堪能する事もなく、予想通り平手打ちの大きな音は部屋中に響き渡った。

「バカッツ！スケベッツ!!」

バシャーンッツ!!!

本日の分。

これにて、終了。

第9話 目の保養・きれいな美春（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

学君は基本的にフェミニストなんですね。

女性には優しいんです。

悪さを仕掛けた繭子サンまでかばってしまうのですから。

でも、たとえ女性でも、美春ちゃんに手出しなんかしたら、彼は
容赦はしないでしょね。

まあ、今回の件で、彼は保健室の先生に「要注意人物」として3
年間扱われてしまいます。

（「完璧な愛」のほうでそんなくだりがあるんです。（笑））

さて、いよいよ、ミスコン結果発表です。

結果やいかに！（って、もう解ってる。って）

では、次回！

第10話 ミスコン・伝説の始まり

「今年度の、ミス西海学園高校コンテストは・・・」
もったいぶった口調で、生徒会長が野外ステージの上から観衆を見下ろす。

空は晴天。この3日間の一般来場者の入りも申し分ない。各種イベントも盛り上がり、今年の学園祭も大成功だった。彼は満ち満ちた思いでいっぱいだ。

人懐っこく、気さくな性格で人気の生徒会長。本條由貴人。彼は評判そのままの笑顔を、ステージ後ろに並ぶ9人の候補者に向け、向かって左端に立つ少女にその手を差し向けた。

「校内投票、一般来場者投票で、圧倒的多数を獲得しました！1年1組の光野美春さんに決定しました！」

割れんばかりの拍手と歓声が、青空の下に響き渡る。発表前から誰もが解っていた様な結果。

しかし、いざ発表となると、否が応でも盛り上がる。何となくは周囲から知らされていたものの、やっぱりいざ言われると恥ずかしい。美春は赤くなってしまった頬を両手で押さえた。

「光野さん。前へ出て」

「あ、はい」

由貴人に促されて、ステージ中央へと出される。

大観衆に見られているかと思うと緊張するが、ステージ下の一番前に立っている学の姿を見て、気持ちを落ち着かせた。

候補者は特に、当日何かをしなければならぬ訳ではない。

1日目にステージで自己紹介をする。その模様が投票場のモニターですと流され、投票が行われる。

そして3日目のこの発表の時に、もう一度ステージに上がる。それだけだ。

しかし学祭中、美春が一般来場者から声をかけられることを予想

して、学はずつと美春に付いて一緒に学祭を回っていた。

このステージに上がる前、「大勢に見られるけど、とりあえず俺が一番前にいるから、俺のいい顔だけ見てろよっ」と冷やかすように言った。冗談めかしたその口調に、美春の緊張はだいぶ解けた。

「おめでとう！圧倒的多数でした！」

由貴人が優勝者に渡される記念の盾を差し出す。美春はそれを受け取りながらにっこりと笑った。

「有難うございます」

無防備なその笑顔に、由貴人がドキツとする。彼の中で、恋にも似た気持ちが大きくなり始めた瞬間だった。

「こ、これから、いろいろな行事で活躍してもらっからね。宜しくね」

「はい、宜しくお願いします」

そう言っつて頭を下げてから、スタンドマイクに向かって、とても可愛らしい綺麗な声で一声を発する。

「ありがとうございます！」

その場の空気が揺らぐような歓声と拍手の中、美春は、一番前で拍手をしてきている学しか目に入っつてはいなかった。

「凄いわね、美春ちゃん。ミス西海だなんて」

学の母、葉山さくらは、ソファに座る美春の肩に後ろから優しく手を置いて、彼女の顔を覗き込みニコツと笑った。

「恥ずかしいです。私なんて・・・」

「何を言っているの。美春ちゃん、可愛いもの。当たり前よ。」

さくらがにっこり笑ったまま、美春の向かいのソファに腰を下ろした。

正直、さくらに言われると美春も本当に照れる。

さくらは16歳で学を産んでいる。おまけに童顔で、あの学の母親という事もあり、とても綺麗で可愛らしい女性だ。

そんな女性に容姿の事で褒められると、嬉しいが恥ずかしいというのが本音だろう。

「あーあ。美春ちゃんみたいな娘、欲しいわあ・・・」

そう言いながら、美春の横に座りコーヒーを飲んでいる息子をチラツと見ると、学が意味ありげな笑顔を作った。

学は一人つ子だ。男の子一人という事もあつて、さくらは昔からお隣さんで学とともに仲が良い美春を、本当に心から気に入って可愛がっている。

「おば様若いんだし、あと2、3人大丈夫ですよ。そしたらほら、学にも弟妹が出来るし」

悪気のない笑顔で言うが、さくらはちよつと寂しい。

・・・そういう意味じゃないわよ。美春ちゃん。

今日は美春が学の家へ遊びに来た。しかし、玄関を入ったところで、久々に早く帰ってきていた学の両親に捕まってしまったのだ。リビングに引つ張り込まれ、お茶の相手をさせられる事になってしまっていた。

「おつ、美春ちゃん、まだ居たかい？」

その時、今まで書齋に居た父のおは一が、広いリビングのドアを開けた。

185以上の長身。あの学の父親という事もあり、威厳ある物腰に端正な顔立ちの父親だ。

「はいっ」

美春が元気に返事をして、ニコツと笑う。その素直さと笑顔に満足するように頷きながら、一はさくらの横に座った。

一も美春を気に入っている。早い話が美春は学の両親の「お気に入り」なのだ。

「まだ来たばかりよ。そんなに早く帰すものですか。久し振りなのに」

「んー？でも、お茶の一杯くらいで開放してやらないと。学の部屋でゆっくりしたいだろう。・・・なあ、学」

さくらの台詞を学に戻す。父の気の利いた言葉きに学がニコツと笑った。

「いいえ。まだお付き合いますよ。二人つきりになる時間はまだまだありますから。どうせ明日は学祭のお疲れ休みだし」

「ちよつ、ちよつと、学つっ……」

駿の良い学は、両親に対しての言葉使いが非常に良い。

それはいいが、今の言い方はまるで恋人同士のような言い回しだ。美春は赤くなって、ちよつと慌てた。

「あのさ……学」

本当にお茶一杯で開放され、学の部屋へ行く途中の広い廊下で、美春は学の後ろから声をかけた。

「あの、ありがとうね」

先を歩いていた学が、振り返って美春の前に立つ。

「学祭前、色々励ましてもらったり、あの……当日も、ずっと一緒にいてくれて……」

美春は本当に嬉しかった。

不安で緊張する自分の傍に、何も言わずいつも一緒にいてくれた事が。

赤くなって嬉しそうに言う美春が、本当に可愛い。

出来ることなら、思いつ切り抱き締めてしまいたい。

学は、そうしたいのに出来ないもどかしさに、両手をグッと握り締める。

そして、口から出たのは、いつもの……。

「まあな。本当にお前が優勝するとは思わなかったけどよ。物珍しかったのか何なのか。……まあ、笑い者にならなくて良かったよな」

・・・カチンッ!

「なっ、何よう、物珍しい、つてえ! 私はパンダかつ!」

「パンダのほうが大人しくてまだ可愛いだろ。美春はコアラじゃねーの? コアラって、意外と気性が荒くておっかねーんだぜ。下手に抱こうとするとすっげー怒るのな」

「学なんて、サル山のサルと同じじゃないのおっ。年中発情期でえっつっ!」

「バカかつっ! 健全な10代男子が、年中発情期じゃなくてどうする! それに俺は、猿みたいに自慰行為にふけるほど不自由はしてねーぞ!」

「じっ・・・じっ・・・」

遠回しで丁寧な言い方ではあるが、それでも口に出すのは恥ずかしい。美春は真っ赤になってしまった。

「このっっ! スケベツ!」

1年生ながら、「ミス西海」に輝いた美春。

彼女はこの後、3年生までの3年間。「3年連続、ミス西海」に輝くという快拳を成し遂げ、私立西海学園高校に、ひとつの伝説を作ることになる・・・。

が、それはまた、別の話で・・・。

第10話 ミスコン・伝説の始まり（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

学君の陰からの助けもあり、見事にミス西海に輝いた美春ちゃん。ホツとしたのも束の間。この後、美春ちゃんを、そして学君を、今まで経験した事のない最大のピンチが襲います。

学君は美春ちゃんを守りきれるか！

そして、二人の関係に進展は・・・？

・・・つてところで、連日更新を続けてきましたが、ここでもちょっとお休みを下さい。

次の更新は、4月1日になります。

では、次回！

第11話 学祭後・美春を見る目

「来たぞ。今、校門入ってきた」

「やっぱ、かわいいな」

「当たり前だろ。『ミス西海』だぞ」

「声掛けてみようぜ。・・・せーのっ」

「美春ちゃんーん!!」

校舎3階。3年生の教室。開け放たれたその窓から、いきなり複数の男子生徒の声が大きく響き渡る。

その声に一瞬足を止めたのは、登校途中の生徒達だけではない。

もちろん、声をかけられた当人の美春も驚いて足を止め、声がした3年生の教室を見上げた。

複数人。5人くらいだろうか。笑顔で美春に手を振っている。

「美春ちゃん、おはよーん!!」

「今日も可愛いねー!!」

「今度デートしようっ!!」

そんな叫び声の中、登校途中の生徒までが、美春を見ては通り過ぎ、そして振り返る。

美春は恥ずかしくなって、声をかけてきた3年生に「おはようございます!」と頭を下げると、逃げるように生徒玄関へ向かって走り出した。

「はずかしがってんぜ!かわいい!!」

などと騒いでいた5人だったが、その後に後ろから来た学が、窓を見上げキツと睨み付けると、騒ぎはピタッと止まり、窓辺から5人の姿はこそこそと消えた。

学は前髪を掻き上げ、手を止めて、フーツと溜息をつく。

学祭が終わってから、こんなやつらが多くて困るぜ・・・。

学祭から1週間。美春が「ミス西海」に選ばれば、他校や一般の人間の中にも美春に目を付けるやからが出るかもしれない……という予想通り、毎日のように違う男が美春に近付いてくる。

しかし美春は、その事に気付いてはいない。
気付く手前で、全て学が、あの手この手で「排除はいじょ」しているからだ。

お陰で毎日忙しい。昨日の男は大学生だったが、夕チが悪くてとうとう喧嘩にまでなってしまった。

喧嘩になるのは初めてではない。今まで負け知らずの学にとって、はどうという事のない相手だったが……。

遊びに行く暇もありやしない。欲求不満になったら責任とってもらうぞ、美春！

少々不可能っぽい事を考えつつ、美春の後を追って生徒玄関へ入ると、入ってすぐの所で美春が黙って立ち竦すくんでいた。

「美春？どうした？」

何か困った顔をして、赤くなつたまま。

「ミスコンなんて……出なきゃよかった……」

「ん？」

「だって、毎日あんな風にかかわれて……。何か……見世物、みたい……」

泣きそうな声が混じる。

別に今の3年生だって、からかっていた訳ではない。「可愛いね」も「デートしよう」も本音なのだ。

しかし自分が、本当に可愛らしく、男性の気を引く魅力に溢れた女性である事を、あまりよく認識出来ていない美春は、自分ばかりかわれているのだと思えない。

「どうして……選ばれたんだろ……私、可愛くなんてないのに……」

今にも泣き出してしまいそうな美春の頭に、学は優しくポンツと手を置いた。

「言つたる。美春は、コアラなんだよ」

美春は、伏せ気味にしていた顔を上げて学を見る。

「コアラはコアラらしく、観衆のご期待に沿ってホヤツと可愛く普通にしてりゃいいんだ。もし、何か手を出してこようとする奴がいたら、お前の代わりに俺が噛み付いてやる」

「どうして・・・？」

「ん？」

「どうして、私の代わりに・・・？どうして、私の事、守ってくれるような事言つて・・・？」

お前が、好きだからだよ・・・。

言ってしまった気持ち、グツと押さえる。

言ってしまったら、どんなに楽になるだろう・・・。

「幼馴染だしな・・・」

学が苦笑する。

「お前はウチの親父と母さんのお気に入りだし・・・何かあったら俺が怒られちまう。傍にいて何をやってるんだ、って」

それを聞きながら、美春の目が悲しそうに細まった。

幼馴染だしな・・・。

胸に突き刺さった言葉・・・。

学が私にかまってくるのは、幼馴染だから。

異常なほど干渉してくるのも、幼馴染だから。

それ以上でも

それ以下でもない・・・。

美春の胸が、切ないくらいに締め付けられる。
私は・・・学にとつて、ただの幼馴染・・・。

こんなに、好きでたまらないのに。

「大体、コアラっていうのは『珍獣』だろ？同じだよ。物珍しくて可愛く見えるから、お前が選ばれたんだ。・・・あんまり気にすんなっ」

脳天気な口調で、美春の頭をポンポンツと撫でる。

「失礼ねっっ！！」

物珍しい、とはなによっっ！！

平手打ちがくるかと、顔の前に鞆を持ってきた学の予想に反して、美春は思い切り学の足を踏みつけた！

「っっっっ！！」

いくら革靴を履いていても、ローファーのかかたで思いっきり踏まれると、かなり痛い。

美春は学に向かって「べーっ」と舌を出すと、自分のクラスの靴箱が並ぶスペースへ走っていった。

学はそれを見送りつつ、今踏まれた足をブラブラさせる。

「・・・新技だな・・・。いてーえ・・・」

そう呟きつつも、その反応が可愛く思えて、つい笑みがこぼれてしまふ。すると、そんな学の肩に腕をかけ、今登校してきたらしい信が後ろから学を覗き込んだ。

「なーんか、仲良しだねえ。朝っぱらから」

「羨ましいか？」

「出来る事なら、俺もあの彼女と『仲良く』してーよ」

そう言いながら、クラスの靴箱に近い入り口から入ってきた涼香を親指でしゃくる。

学がフツと笑って「まあ、頑張れ」とでも言うように、肩をポン

ポソツと叩く。すると信が、ちよつと真面目な顔で話し出した。

「連日、少々忙しい思いをしてるだろうけど。ちよつと耳に入れておいた方がいいことがある」

「何だ？」

信が小声のまま、話し続ける。

「体育教師の三品みしななんだけど・・・」

「三品？ウチのクラスじゃ女子の受け持ちだろ？」

「三品が・・・よく光野さんの話を持ち出すらしいんだ」

「美春の？」

「他のクラスで授業をする時なんか、話の中に良く光野さんの話が出てくるらしい。『優勝したのは当たり前だ』とか、女子に『ああいう可愛い子は羨ましいだろ』って言ったり、男子に『嫌いな男は居ないよな』なんて言ったり・・・。一部の生徒の間で、三品は光野さんの事が好きなんじゃないか、って噂がたっているくらいだ」
学の肩から腕を外し、少々考え込む学に、信は最高の情報突きつける。

「三品は、ウチの学校に来る5年前。地方の私立高校で、『女子生徒に性的悪戯をしている』って噂が流れ、噂が大きくなって問題になったから、依願退職いがんさせられた男だ。うちの高校に来たのだから、偶然当時のPTA会長の親戚だったかららしい・・・。こんな事知っている者は、もう、ほとんど居ない。気をつけたほうがいいかもしれないぞ。葉山」

しかし学は、そんな信の言葉をもるともせず、不敵な顔でニヤリと笑った。

「教師か・・・面白いじゃん・・・」

第11話 学祭後・美春を見る目（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

切ない美春ちゃんの想いとは裏腹に、毎日忙しそうな学君。

しかし、その美春ちゃんに、ちよつとヤバイ危険が迫りそうです。

美春ちゃんのために（自分のために）、学君が排除してきたのは、同じ10代の少年や上でも大学生くらいまで。

でも今度は大人。それも教師です。

それも「訳あり教師」……。

さあ、学君。どうする？

では、次回。

第12話 体育教師・怪しい気配

「あ~~~~あ~~~~」
憂鬱そうな、軽い(?)溜息。

その日美春は、少々不機嫌だった。

「大丈夫？美春」

朝のH、R前。涼香が心配そうに声をかける。

「んー、だいじょうぶ。。。しょうがないことだし」
「薬、飲んできたの？」

「痛み止めはね。気分が悪いのはしょうがないよ。。。2日目はどうしてもね。。。」

よく言うところの、女の子の「あの日」だ。それも2日目。

今日はしょうがないよね。1日の辛抱だよ。。。。

3日目になれば気分も晴れる。美春は「はい、お見舞い」と涼香が差し出したミント系のガムを受け取ると、ポイツと口の中へ放り込んだ。

ミント系のスツとした味と清涼感が口の中に広がり、ちよつと頭がすつきりとする気分。

ありがとう、と口で言う代わりに、ニコツと涼香に笑いかけると、その笑顔を可愛く感じた涼香が、美春の頭を撫でた。

涼香は3姉妹の長女だ。自分がしてあげたことに対して素直に喜んでもらうと、姉の特性でとても嬉しく感じてしまう。

その時、廊下のほうで女の子の黄色い声が聞こえた。

「相変わらずねえ。。。」

涼香が「やれやれ」とでも言うように呟く。

学が登校してきたのだ。

しょうがない事だが、学が通ると黄色い歓声が起こる。学も学で、

話しかけられたりすれば笑顔で返すし、自分を見ている女の子には
笑顔を向ける。・・・歓声か起こるのも無理はない。

また彼は昔からそうなので、今更特別な事でもなく、サラッとや
つてのける。

「おはよう」

実に爽やかな笑顔で教室へと入ってくると、あちらこちらから挨拶
の音が飛ぶ。そんな中、美春は黙ってガムを噛みながら、ジーツ
と学を見ていた。

「おはよう美春。おはよう涼香さん。・・・美春、何食ってんの？」
ジーツと見られている視線に気付いて、二人にちゃんと挨拶をし
てから、美春の席に手を付き、彼女の顔を覗き込みつつ鼻をクンク
ンと鳴らした。

「ガム？ミント系だ。俺にもくれっ」

美春の前に差し出した手の上に、涼香がミント系の粒ガムを2個
落とす。

「はい。どうぞっ」

「あっ、涼香さんだったんだ。サンキューね」

ニコニコしながら2個いっぺんに口に中へ入れる。

「あー、スツとする。ミント系のガム食った後ってさ、キスすると
口ん中が気持ちいいよな」

「ふーん・・・」

あまり反応が来ない美春に、学はスツと顔を近づけた。

「してみる？美春」

いつもならばここで平手打ちが来るところだが、美春の反応は冷
たい。

「やだっ」

冷たい口調に、いつもと違う美春を感じた学は、ちょっと首を傾
げた。

「どうした？美春。今日、何か変だぞ」

「べつにー」

学は腕を組んで、右手を顎の辺りに当て、考え込む。そして、ハッと気付いた。

「あっ！そうか！お前そろそろ『あの日』だったな！！」
バシーーーーーンッ！！！！

本日の1発目。・・・お見事。

何であんたが、そんな事わかってんのよお！！！！

美春の事なら、学は何でも知っているのだ・・・。

「あー、4時間目に体育って、地獄だよなあ・・・」

空は気持ちが良いくらいに青空だというのに、その青空の下のグラウンドで、信はダルそうに伸びをした。

「ダルいわ。腹は減るは・・・。最悪の時間だぜ」

ハーツと溜息をつく。本日の4時間目は体育。男女共にグラウンドでハードル競技だ。

すると学は、信の顔を両手で持ち、首の骨でも折れそうな勢いで横を向かせた。

「いてー！っ！！葉山っ！！いてえって！！」

「あほっ。ダラダラしてねーで手伝って来いっ」

改めて顔を向けさせられた方を見ると、グラウンド隅の屋外競技用倉庫から、今日の当番らしい涼香が女子用の低いハードルを運び出している最中だった。

「こつ云う所でポイント稼げ！いけっ！ほれっ！！」

信の足をガンツと蹴ると、信が文句を言いつつも笑いながら涼香のほうへ走り出す。

「りょーかさーんっ！！オレ手伝うよー！！」

涼香の事が好きだというのが、見え見えの態度。

学も、そんな信を見ているとついつい笑いが漏れてしまう。・・・意外と、菱崎さんも気付いてるんじゃないのか？

学はクスクス笑いながら、女子が並んで集合している場所に目を向けた。

今日の美春は「あの日」なので、体育は見学だろう。てつきりグランド隅のベンチにでも座っているのだろうと思っていたのだが、広いグランドのどこにも美春の姿はない。

もしかして、ダルクで保健室か？

「涼香さん」

学は、ハードル運びを手伝ってくれたお礼を、信の気持ちを知らずか、彼が泣き出してしまいそうなくらい感謝一杯の明るい笑顔で言っている涼香のそばへと歩み寄った。

「美春は？保健室？」

「美春？ううん。2時間目が終わった後ね、先生に今日の体育は見学させて下さいって言いに行ったら、見学でいいから、ハードルの皆のタイム記録を頼まれたんだって。今、用紙とか取りに行ってるんじゃない？」

「どこに？」

「体育教官室でしょ？資料関係は全部あそこだし」

学は少々、嫌な予感に眉をひそめた。

「悪いなー。タイム係なんて頼んで」

明るい口調で、体育教師の三品隆弘たかひろは、体育教官室の机の上でタイム記録用の用紙を5枚ほどそろえ、目の前に立つ美春に渡した。

「いいえ。このくらいなら出来ますから」

それを受け取って、美春がにっこりと笑う。

あまりにも無防備で無邪気な笑顔。美春に用紙を渡したまま、三品の動きは一瞬止まった。

目の前でタイム用紙の確認をする美春の顔を、三品は凝視する。

・ ・ ・ 白い肌。潤んだような大きな目。長いまつげ。形の良い、ピンク色の唇・ ・ ・。

三品は、知らずのうちに口に中に溜まってしまった生唾を、ごくりと喉を鳴らして飲み込んだ。

・ ・ ・ 29年間生きてきて、こんな綺麗な子は、初めて見た。

「先生。バインダーどこでしたっけ？」

不意に美春が顔を上げる。三品は慌てて部屋の隅の長机を指差した。

「バインダーと鉛筆類は、全部あそこにあるから」

部屋の中は、教師用の机が5台。そして、資料棚、用品ケース。

壁側には記入作業用の長机。横に長椅子。大きくとられた窓からは、駐車場とグラウンドの端っこが見える。教官室は1階だ。

早く行かないと、皆集合しちゃうな。窓からチラッと外を見るが、位置が悪く、クラスメイト達の姿は見えない。

窓とは反対側におかれた長机の上からバインダーを1枚取り、用紙を挟む。記入用の鉛筆を取ろうとして、ペン立てに立ててある鉛筆の芯が全て折れている事に気付いた。

ん、もう！削っついてよお！心の中で少々文句を言いながら、立ててある鉛筆10本を取り出して、目の前の手動鉛筆削り器で削りだす。

そんな事をしていて、自分の後ろに三品が近付いて来た事に、美春は気付かなかった。

「光野は、『ミス西海』に選ばれたんだよな・ ・ ・」

背後で三品の声がした。美春は鉛筆を削りながら照れ笑いをする。

「一応。でも、お恥ずかしいです。1年生が出たから、物珍しかったんでしょね。きつと」

「・ ・ ・ そんな事ないぞ・ ・ ・」

美春の後ろから、2本の腕が伸びる・ ・ ・。

「先生も、光野は、可愛いと思うぞ・ ・ ・」

凄くかわいいと・・・思っぞ・・・。

第12話 体育教師・怪しい気配（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

憂鬱な気分のとときに、ちよつと大変なことが起こりそう？

三品先生、美春ちゃんを可愛いと思うのは当たり前だけど、これはマズイですよ・・・。

今回は美春ちゃんに、貞操の危機?!!

では、次回!

第13話 教室・美春に迫る危険

「恥ずかしいですよー。先生とかにそんな事言われると」
美春は照れ笑いをしながら、鉛筆を削り続けた。

「・・・？」

ふと、髪の毛に違和感を覚える。

後ろ髪を、誰かに触られているような・・・。

美春は後ろを振り返り、ちよつとビクツとした。いつの間にか、三品が自分の真後ろに居て、静かに髪を撫でている。

「・・・先生・・・？」

「光野の髪は、綺麗だな・・・。茶色っぽいけど、染めている訳じゃないんだな。・・・栗色っていうのか？生まれつきなのか？」

「・・・はっ・・・はい・・・、あの、私、お母さんのほうのお爺ちゃんがフランス人なので・・・少し、その遺伝子ももらっているみたいで・・・」

答える声が何となく震える。三品の手つきに、今まで感じたことのない物を感じるのだ。

「へーえ・・・じゃあ、クォーターなんだ・・・。ハーフとかクォーターの子って綺麗な子が多いもんね。それで光野も綺麗なんだな・・・」

「べっ、別に、綺麗なんかじゃないですっつ」

美春は前を向いて、削っていた途中の鉛筆をペン立てに戻した。まだ3本ほど削ってはいいないが、もういい。美春は早くこの場を離れたかったのだ。何故か早く離れなければ、という思いが大きくなっていく。

記入用の鉛筆を一本、バインダーに挟んだ時、両肩に三品の手がゆっくりとかかった。

「・・・光野は・・・綺麗だよ・・・」

ビクツツ！！美春の体が、飛び上がらんばかりに大きく震えた！

「入学してきた時から、すごく綺麗で・・・目立ってた」

真後ろにぴつたりとくつつく様に、三品の気配を感じる。

肩に置かれた手が、肩にかかる髪を後ろへ流すように撫でる。

その手つきに、美春は体中の血の気が引き、体中が冷たくなった。

「・・・せん・・・せい・・・？・・・あの・・・」

これは、先生のスキンシップなんだろうか？だとしたら、私がこんなに怖がることはないんだ・・・かえって失礼なもの・・・。

「性格はいいし、可愛いし・・・最高の生徒だよ」

ほら、先生だって『最高の生徒』って言ってくれているじゃない。

先生は、生徒としての私を、可愛い、って言ってくれているだけよ。

「なあ・・・光野・・・」

肩に置いた三品の両手が、肩口から滑るように前へ回り、その片手が、綺麗にリボン結びをされていたリボンタイをスルツと解いた^{ほど}。

「せつ・・・!」

びくんっ！再び体が震え、驚きの声上がる。

何?!何の冗談?!先生まで私をからかっているの?!!

パチン・・・。ボタンホックが外れる音。

もう片方の手が、制服の胸当てを引っ張る。ボタンホックはその時に外れた。

「せんせつ・・・!!あのっ!」

美春は、胸当てを引っ張る三品の手を掴んだ。

心臓が恐ろしいほどドキドキしている。

しかしそのドキドキは、学などに優しくされた時に感じるドキドキではない。

その原因は、ただひとつ・・・。

怖い・・・。

冗談が過ぎる。こんな冗談・・・いや・・・。

三品の手を掴んだ美春の手の上に、リボンタイをつまんでいたもう片方の手がかかった。

この形は、まるで後ろから抱き付いているような形……。
美春は体が小刻みに震えてくるのが解った。

……こわい……。

こんな経験はしたことがない。こんな思いはしたことがない。
誰かに、体に触れられる、というのは……こんなにも怖い事だったのだろうか。

もしかしたら今迄だって、こういう目に遭ってしまつような機会があつたのかもしれない。しかし、それは全て学によって阻止されてきた。

美春が気付かないうちに……。

「震えてるのか？」

真横に三品の顔が近づく。美春は正面を見詰めたまま、顔どころか目も動かせない。

「本当に……かわいいな……光野……」

声が真横で聞こえる。耳元に息がかかる近さで聞こえてくる。

美春は涙が浮かんできた。

……や……だ……。やだ……よ……。

どうして、こんな……？私に、こんな事……。解んない……。

もし、何か手を出して来ようとするような奴がいたら、お前の代わりにオレが噛み付いてやる……。

以前、学が言ってくれた言葉。

学……。

学・・・、たすけて・・・。
やだよお・・・。こんなの私、イヤだよ・・・。
図々しいかもしれないけど。

ただの幼馴染のクセにこんな事言っちゃいけないのかもしれないけど・・・。

助けて。・・・まなぶ・・・。

「光野・・・」

胸当ての所で美春の手を握っている三品の手に、力がこもった。自分の手が冷たいせいか、その手が妙に生温かく感じる。涙が滲んだ目を、美春はグッと閉じた！

学っ！！

ガシャーーンツツ！！！！

その時、体育教官室の窓が、けたたましい音を立てて割れた！！音には気付いたが振り向く間もなく、三品の後頭部に、勢い良く飛び込んできたサッカーボールが激突する！

もちろん三品は倒れそうなくらいにヨロケ、そのはずみで美春から腕が離れた。

美春はその隙に、転がるように三品から離れる。離れたとたん体の力が抜け、横の長椅子に手を付き床に座り込んでしまった。

窓から飛び込んできたサッカーボールが、テンテンツと跳ねて美春の傍へ転がってくるのを黙って見詰める。・・・そのボールを誰が蹴ったのか、美春には解ったような気がしたのだ・・・。

相当頭がクラクラしたのだろう。三品はしばらく両手で頭を押さえていたが、ボールが飛び込んできた窓を睨み付けながら振り返っ

た！

「すいませーん。センサー」

割れた窓。そこから聞こえてきたのは、妙にのんびりとした声。

「当たると思わなかったー」

声の主は、クスクス笑いながら割れた窓をさらに拳こぶしで割り、鍵を開けて窓を開くと、まるで鉄棒のように窓の淵にひよいっと上がった。

「あれー？美春　？やっぱりここにいたんだー？」

いささかわざとらしい口調。

声の主は、三品を睨み付けるように不敵な顔でニヤツと笑う。

その少年を見て、美春は、体中の血の気が戻ってくるのを感じた。

第13話 教室・美春に迫る危険（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

初めての経験に、動揺しまくりで何も出来なかった美春ちゃん。

その美春ちゃんを救った、サッカーボールの少年は……。

はい。彼に決まっていますね。（笑）

美春ちゃんを助け出すために、この後彼がとる行動は……？

次回、ちよつと甘々ですよ……。

では、次回

第14話 救出劇・学が許せないもの

「お前、タイム記録係すんだろー？いつまで油売ってんだよ」
学はそう言いながら、運動靴のまま窓から体育教官室の中へ下り立った。

「まな……ぶ……」

長椅子に手を付き、腰が抜けたように床に座り込む美春を見て、学は眉をひそめる。

リボんタイは解^{ほど}け、胸当てもホックが取れて外れたまま。

おまけに美春は、青白い顔をして、かすかに冷や汗を浮かべている。

間一髪ではあったようだが、美春に怖い思いをさせてしまったらしい。そう悟った学は、自分の行動が少し遅かったことを悔やんだ。学は美春の傍へ歩み寄ると、腕をとって立たせる。ゆっくりと立ち上がる間、美春はずっと学を見詰めていた。

「まなぶ……」

泣きそうな小声。どれだけ怖い思いをしたのだろう……。それを考えると、学の中で三品への怒りが込み上げてくる。

「先生……」

学が無感情な声で三品を呼ぶ。

ボールを蹴り、ガラスを割り、おまけに邪魔をした人間を睨み付けていたはずの三品の顔が、学の目を見た瞬間、眉が下がり恐怖の表情を作った。

年に似合わぬ威圧感と存在感を持ったその瞳は、冷たく、そして鋭く、三品を射抜き見据える。

えも知れぬ恐怖感を感じさせる目。

「殺される！」睨み付けられた者がそう思ってしまうほどに、猫

奇的な目。

そんな目をする学の脳裏には、美春の泣きそうな顔と声が、いつまでも焼きついて離れない。

美春に、怖い思いをさせた。

美春を、傷つけようとした。

その思いが、三品への憎悪を大きくさせる。

もちろん、そんな学の様子に、美春が気付かない訳がない。

「学……駄目だよ……」

もしかして、三品を殴りつけるのではないか。そう思った美春が、自分の腕を掴む学の手の上にそっと手を置いて、力強く自分を支える手を優しくキュツと握った。

「駄目だよ……学……」

殴ってやるつもりだった。

半殺しにしても構わない。多分学は、その時そう思っていた。しかし……

駄目だよ。学。

美春の声で、彼は理性を取り戻す。

「先生」

学は静かな声で、相変わらず三品を睨みつけたまま話しかけた。

「ガラスを割ってしまい、申し訳ありません。すぐに父に連絡して業者を入れてもらいますので……理事長にも、僕のほうから報告します。ご安心下さい」

高校1年とは思えない口調と物腰。彼より13歳も年上であるはずなのに、三品は言葉が出なかった。

「・・・先生、今年度より変わった、この高校のPTA会長をご存知ですか？」

三品は首を傾げる。昨年度までは自分の親戚がPTA会長を務めていた。

確かそれが、今年度から代わったのは知っている。入学式の挨拶で顔を出していた。有力者の妻で今年度からこの高校に入学した生徒の母親・・・。

「・・・！」

三品がハツとする。その顔を見て、学がニヤツとした。

「今のPTA会長は、美春の事をえらくお気に入りだね」

自分を心配そうに見る美春を見て、そして再び三品へ目を移す。

「会長は葉山さくら。僕の母親です」

三品の顔色が変わる。昔の不祥事をもみ消して、自分が今までこの高校に居られたのは、親戚がPTA会長だったお陰もあるのだ。

私立学校のPTAの力は大きい。そのPTAに有力者や寄付額が多い資産家が居れば尚更だ。

そして今年度この高校のPTAは、会長である「葉山」の力で今までにないくらい大きな物になっている。もしも学が、美春から何かを聞いてそれを母親にでも言えば・・・。

三品は、あり得る事実に身動きできなくなった。

学はフツと笑うと、美春の手を引いて、今入ってきた窓からひらりと外へ飛び出した。そして美春に手を伸ばす。

「ほら。来いよ」

「駄目だよ。私、外靴持ってきてないし。こんなところから出られないよ」

すると学は、腕を伸ばして両手で美春の体をひょいっと持ち上げると、そのまま窓から美春を引きずり出し「お姫様抱っこ」で抱き上げた。

「このまま玄関まで連れて行ってやる。それならいいだろ？」

「えっ・・・でっ、でもっっ」

美春の顔が赤くなった。

「っつ、このままつてえ！！抱っこしたまま学校の中・・・外だけで、歩くのお？！！」

学はよく、ふざけて・・・というよりも本当は美春に触りたいだけなのだが・・・「お姫様抱っこ」をしたりする。別に初めての事ではない。

しかしこのまま校内を歩けば、目ざとくそれを見つけた女子生徒などが、またパニックになる。

また私、学を好きな子達に睨まれるじゃないっつ！！

「では先生。失礼します」

美春が余計なことを考えている間に、学は三品に一言そう言っ歩き出した。

美春はしがみ付くように学の体操着の胸をぎゅっと握る・・・三品が、引き止めてくるのではないかと思っただ。

しかし、そんな美春の上から、学の優しい声が降ってきた。

「大丈夫だ・・・美春」

言い聞かせるように優しく。

その声は響く。

「俺が、いるから」

体の奥底から溢れ出す安心感。

美春はそれを感じながら、学の胸に額ひたいを付けた。

美春を不安にさせるもの。

美春に悲しい思いをさせるもの。

美春を、泣かすもの。

その全てが、学は許せない。

「・・・このままで、すむと思うな・・・」

学は小さく呟いて、美春を抱きかかえる腕に力をこめた。

第14話 救出劇・学が許せないもの（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

やっぱ、「お姫様抱っこ」は外せませんね！。

三品先生の手から美春ちゃんを救い出した学君ですが、まだこのままでは終わりませんよ。

今回は、甘い上にじれったさ最高潮です！（笑）

では、次回！

第15話 エスケープ・お礼のキス

「あーあ、腹減ったなあ」

玄関で下ろされて、美春が靴を履き替えていると、両手を頭の上で組んで学がぼやいた。

「このままフケてよあ、何か食いにいかねーか？どうせもうすぐ昼だし」

確かに今は4時間目。空腹も感じる時間だが、しかし一応授業中だ。チャイムはとづくに鳴っている。男女とも体育の授業は始まっているだろう。

「駄目だよ。私は見学って言うてあるけど、学は何も言うてないでしょ？サボリだと思われるよ」

「しょうがないじゃん。本当にサボるんだから」

美春は出る言葉もない。アツサリしているというか・・・何と云うか。

学は、美春のおでこを人差し指でちょんつと突いた。

「俺は、自慢じゃないけどバカみたいに成績いいから、このくらい平気だよ」

確かに学は、昔から馬鹿みたいに頭が良いので成績も良い。しかし、それとこれが関係あるのだろうか・・・？

納得いかない美春を無視して、学は校内履きに履き替える。

「さっさと着替えてくるから。待つてろっ」

こちらの返事も聞かないで、ささつと更衣室のほうへ走っていく学の後姿を見ながら、美春はクスツと笑った。

小さく息を吐きながら、後ろ手に靴箱へよしかかる。

静かな玄関。授業中なので生徒の姿は見えない。どこかの教室から漏れてくるざわめきや音楽などが、かすかに聞こえてくるのみだ。

一人佇んでいると、さっきの事を思い出す。

先生は、どうして私にあんな事をしたんだろう……。

「光野は、きれいだよ……」

びくんっ……。思い出しただけで体が震えた……。

私……。綺麗なんじゃないのに。

もしかして、私みたいな1年生の女の子だったら、ちょっと悪戯しても大丈夫、とか思っただらうか。そんなに軽くて騙されやすい感じに見られてたんだらうか……。

美春は三品に引つ張られた胸当てが外れたままな事に気付き、パチンツとボタンホックを留めた。

さつき玄関に下ろしてくれた時、学が綺麗に結んでくれたリボンタイに手を当てる。

「俺が居るから」その言葉を思い出して、美春の頬がぼつと赤く染まった。

まるで美春が危険な目に遭いそうなことを悟ったかのように、ポールを蹴りガラスを割って、助けに飛び込んできた学。

……。かつこよかつたなあ……。その後、先生を見る目がちょっと怖かったけど……。

助けてもらったお礼を言っていなかった事に、ハッと気付く。学が戻ったら、お礼言わなきゃ！

そんな事を考えていると、学が走って戻ってきた。

「お待たせ！さっ、行こうぜ！何食いに行く？何か食いたい物あるか？」

本当に急いで走ってきたのだらう。夏用シャツのボタンも中途半端。ネクタイも首からぶら下がったままだ。

美春はクスツと笑って、学のネクタイを綺麗に結んであげた。外れていたシャツのボタンを留め、襟元を直す。

「はい、出来た」

やってから、よく母親が父親にやってあげている事と同じ事をしている自分に気付いて「こっ、これじゃあ、夫婦みたいじゃないのっ」と心の中で自分にツッコミを入れ赤くなってしまった。

それでも、赤い顔のままにっこりと笑い、両手で学の胸をポンポンツと叩く。

恥じらいがちに微笑む笑顔のあまりの可愛らしさに、学は自分が不覚にも赤くなってしまいそうなくらいドキツとした。

「ねえ、学」

美春は一度学から目を外して、そして再び恥ずかしそうに学を見る。

「・・・有難うね。なんか・・・助けてもらって」

申し訳なさそうにお礼の言葉を言う、元気のない口調。

無理も無い事だ。教師に悪戯されそうになったなど、かなりシヨツクな体験だっただろう。

学はちよつとからかうように笑うと、自分を見上げる美春の唇に、人差し指をあてた。

「じゃあ、お礼にキスさせてもらおうっかなー」

いつもみたいに元気になってもらおう。そのくらいの気持ちだった。「何言つてんのよ！バカッ！！」そう怒鳴ってくるだろう。学はそう思っていたのだ。

しかし美春は、ポツと頬をピンク色に染めると、一瞬戸惑うように目をキョロキョロさせて、そして、学を見上げたまま目を閉じた。

えっ???!!!

それに驚いたのは、仕掛けた本人の学だ。

まさか美春が、こんなにも素直に受け入れてくれようとするとは、思ってもいかなかったのだ。

目を閉じて。ちよつと怯えながら無防備に唇をさらす姿は、普段は絶対に見ることが出来ない表情。それは学にとって、あまりにも刺激的過ぎる表情だった。

やっべー・・・この顔だけで、俺「準備O.K」になりそ・・・

思春期真っ盛り、16歳少年の体に起こる素直な反応を恨みつつ、学は美春の両頬に手を触れると、ちよつと震える美春の額ひたいに唇を付けた。

しばらくそのままできて、静かに唇を離すと美春も目を開く。

「・・・学・・・？」

てつきり唇にされるものだど、少々覚悟していた。

危ないところを助けてもらったお礼だと思えば、そのくらいさせても良いと思っただのだ。

ファーストキスだから、学になら、と思っただころもあつただろう。

学はニコツと笑って、自分の頬をつんつんと突っつき、美春の前に出す。

「今度は美春の番な。ほらここ、ここ」

どうやら頬にキスしてくれという意味らしい。美春は赤くなつたままちよつと長めに学の頬に唇を付けた。

ふわふわつと柔らかく、温かい唇・・・。

・・・うわぁー！！たまんねー！！え！！！！

素直にこの唇にキスしておけばよかつたあ！！と、後悔するが、すでに遅い。

美春の唇は頬を離れ、恥ずかしそうな瞳が学を見詰めた。

学はその唇に、もう一度指を付けてニコツと笑う。

今度はからかうような顔ではなく、優しい笑顔で。

そのうち・・・美春のファーストキス、絶対俺がもらうからな・・・

「さっ、行くぞ！何食いたい？！何でもおごつてやるぞ！！」

学は美春の手を取ると、玄関の外へ駆け出した。

数日後、玄関前や校内の生徒用掲示板に、一人の教師が退職する
とのお知らせが張られた。

体育教諭・三品隆弘 懲戒免職処分ちゅうかいめんしょくについて。

内容は、数年前に不祥事を犯し、それを隠蔽いんぺいしていたことが発覚。我伝統ある西海学園では、このような教師を受け入れておくことは出来ない。 という内容。

処分はPTAの判断。そして決定者は、PTA会長になっていた。

「三品もよー、夏休み前のこの時期にクビって、変だよなー」

「何かやったんじゃねーの？前の学校でもやってたんだろ？」

「あんま女子には評判良くなかったよな。よく、体に触る、ってお
れの女も文句言ってたしよ」

「自業自得ってやつじゃん」

そんな話をする友達ともだちの輪の中で、学は一人、不敵な笑みを湛えて
笑っていた。

まるで全てを、知っているかのように……。

そして、そんな学を、美春は見ていた。

「このままで、済むと思うな」学があの時呟つぶやいていた言葉を思い
出しながら。

……学？もしかして……私のために？

しかし、そんな事を、学は美春には言わない。

だから美春も、訊きかなかった。

学……ありがとう……。

ただ、心の中で、お礼の言葉を呟くだけ・・・。

第15話 エスケープ・お礼のキス（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

あー！キスさせちゃえば良いのにつっ！！

って声が聞こえそうですが・・・。

・・・そもいかないんですよー。

美春ちゃんのファーストキスは、まだ先なのです・・・うー。

さてさて、ちょっとした「先生事件」も片付きました。

が、この後、夏休み前の大事件が起こります。

また学君が大活躍しますが・・・さすがの彼も今度は・・・。

でも、その話に入る前に、少々お休みを頂きますね。

次の更新は4月13日です。

次の更新まで、ちょっと長くてごめんなさい。4月に入ってから予想以上に忙しく、玉紀自身、思うように執筆時間が取れないと言うのが実状だったりします。

本当にごめんなさい。

でも、更新日には、また読みに来てくださいね！

では、次回！！

第16話 夏休み・楽しい計画

「夏やすみかぁ・・・」

普通、夏休みといえば、学校生活の中で楽しみな期間のひとつだろう。

しかし、そうばやいた彼の口調は、どこか悲しそうで寂しそうだ。「何だ？田島？夏休みがイヤなのか？」

机に顎を乗せてクタクツとする田島の額に、学は今買ってきたばかりのミネラルウォーターの冷たいペットボトルをペトツとくつつける。

「だってよぉ・・・」

信は首を傾けて、楽しそうに美春とお喋りをしている「彼女」を見詰めた。

「夏休みに入ったら・・・ずーっと涼香さんに会えないんだぜ・・・」

学と美春を介して話をする機会は確かに多い。しかし、付き合っている訳ではない。

長い夏休み、何気なく会える要素はどこにもないのだ。

「葉山はいいよなー。どうせ夏休み中、いやって言うほど光野さんと一緒なんだろ？」

「当たり前だ。宿題なんてチャチャツと済ませて、図書館だろーとプールだろーとカラオケだろーと買い物だろーと、もうっ、イキまくりの遊びまくりだねっ」

本当は違う意味でも美春とイキまくりたいけど・・・。

などと、16歳、思春期の少年は思ったりもするが、不可能なのでそれは口に出せない。

「はーーーーーあぁー・・・」

声に出して大きな溜息をつく友人を見ながら、学はちよっと考え込む。

「・・・キャンプでも、行くか？」

「キャンプ？」

美春は、かくつと、可愛らしく首を傾げる。

それを見ながら、学はニコニコしまくっていた。

理由はひとつ。

こんな可愛い美春と、夏休み中ほとんど一緒に居られるのだ。彼はこの上なく嬉しい。

「仲の良い友達集めて・・・まあ、集めすぎも大変だから、男女5人ずつくらいで夏休みに行こうぜ」

美春は、席に座っている涼香と一度目を合わせてから、横に立つ学を見上げる。

「で？私は、その数に入ってるの？」

「当たり前だ。美春は絶対に行く」

「誰が決めたのよ」

「俺」

誤魔化しも何も無く、返ってくる返事。

昔から学は、美春の事を何でもヒョイヒョイ決めてしまうつところがある。

また、学本人もそれが当たり前と思っているところがあり、美春が反抗しても利^きかない。

美春も「お坊ちゃんのワガママ」と諦めてはいるが、自分の事をあれこれ気にかけて干渉してくるのが、実はちよつと嬉しかったりもしている。

「大きいテントやらターフやらも俺んちにあるし、コンロやらバーナーやら道具一式あるし。女子はテントが嫌ならキャンビン借りてもいいし」

「葉山君、お坊ちゃんなのに、テントなんて立てられるの？」

「涼香が疑わしい目で学を見上げると、本人ではなく美春が何気な

く答えた。

「学。テント立ててるの凄く上手だよ。大きいテントとかでも一人であつという間に立てちゃうもん」

「他に『体のテント』立てるのもウマイけどな」

「ゴンツツ!!余計な事を言ってしまい、横の美春に無言のまま怒突かれる。」

「何?美春は葉山君とキャンプに行ったことあるの?」

「うん。あるよ。うちは親同士が仲が良いからね。小さい頃から旅行とかキャンプとか、一緒によく行ったもん」

「二人つきりで、は?」

「あつ、あるわけないでしょっつ!!」

必要以上に赤くなりムキになる。

涼香はニヤニヤして美春を見た後、学を見上げた。

「んで?私も誘ってくれてるわけ?」

「是非」

学がにっこりと笑う。「学に興味が無い」という珍しい人種の涼香でなければ、一発でやられてしまうところだ。

涼香はチラツと横目で、学の横で涼香の答えを固唾かたずを飲んで見守っている信を見る。

「・・・田島君も、行くの?」

「え?ああ・・・行く、けど・・・」

「ふーん。じゃあ、行かない・・・」

信が固まる。そつ、それってえ、オレが行くから行かない、ってことかあ?!オ、オレツ、そんなに嫌われてんのかあ!!?

まさに地獄へ落とされた気分。しかし、

「・・・っていう馬鹿は居ないわよね。田島君が行くなら楽しそうだし。美春も居るし。でも私、正直言ってキャンプなんて初めてなのよ。色々教えてね。田島君」

地獄から天国。それも自分に色々教えてくれとのご指名つき。

自分でも抑えきれないくらい満面の笑みを作って、信は嬉しさの

あまり学の背をバンバンと叩いた。

「今年出来た、湖畔のキャンプ場にしようぜ。あそこの管理人やつてんのが、元ウチの会社の重役だから。俺顔利くし。安心だろ？泳げるし、カヌー体験とか出来るし、釣りも出来る・・・ってえ！いつまで浮かれてんだあ！おまえはあ！！」

いつまでも興奮して学の背を叩き続ける信の頭をバンツと怒突くも、彼は今、幸せ過ぎて多分その痛みも解らない。

「だ・・・大丈夫？田島君」

けっこういい音がした。気を遣ってくれる涼香が、信はまた嬉しい。

「大丈夫っ。ぜんっぜんっ、痛くないっっ」

何となく可愛い笑顔で頭を押さえながら、そう言う信を見て、涼香はクスツと笑った。

美春は口元に指をあてて考えているうちに、だんだんと笑顔になつてくる。

「いろいろ出来るなら楽しいよね。1日2日じゃ、たりないかも・・・」

父親同士が幼馴染で仲が良い。そのせいで、家族ぐるみでの旅行のみならず、日帰りレジャーなどにもよく行く。しかし、学と二人つきりで・・・というか、近場に二人で遊びに行く意外は、親抜きで遠出などという経験は一度も無い。

美春は考えると、だんだんとドキドキしてきた。

「いいじゃん。1週間くらい居て、満喫してこようぜ」

「いつ、1週間??」

「嫌か？」

嫌なわけが無い。

友達是一緒だが、1週間ずっと朝から晩まで学と一緒になのだ。

しかし、口から出たのは・・・

「嫌じゃないけどー。1週間ずっとワガママ坊ちゃんのお世話しなきゃならなのかと思うとねー」

「そつだなー。1週間もお子ちゃまの相手で遊びにも出られないから、下半身の世話もしてもらおうかなー」

「バシーーーーンッッ!!」

本日。・・・何発目かは解らないが、いつもながら感心してしま
うくらいに綺麗に決まる平手打ち。

二人とも嬉しいのだから、いい加減素直になればいいもの・・・

「今年の『ミス西海』って、むちゃくちゃ可愛いんだって？」

軽く組まれた繭子の脚を、ゆっくりと撫で上げながら少年は探る
ように訊いた。

「・・・可愛いわよ・・・」

気の進まない口調で繭子が答えると、少年が喉の奥でクククつと
笑う。

「そつだよなー。お前が全然相手にならなかつたくらいだもんなー」
薄暗いバーの店内。カウンター席と、ボックス席がふたつくらい
の小さな店。

カウンターの中には20代半ばくらいの女性が二人。カウンター
席には、どう見ても真つ当なサラリーマンではない風貌の男が4人。
ボックス席のうちのひとつに、少年は繭子と並んで座っている。

少年は18歳。高校には行っていないが、繭子と同じ歳だ。

繭子の肩を抱き髪を撫でながら、その自慢の脚線を撫で上げ堪能
している。どう見ても普通の関係ではない。

「一回、見てみたいなあ・・・」

「犯りたいなあ。の間違いじゃないの？」

繭子が嫌味半分に言つと、少年はまた喉の奥でクククと笑い出す。
と、カウンター席に座っていた男が4人、そろって少年を振り返つ

た。

「言ってくれりゃあ、すぐにでもそのネーチャン連れて来ますぜ。若」

その言葉に、少年は満足そうに笑い、そしてテーブルの上のビールを瓶ごとあおった。

第16話 夏休み・楽しい計画（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

夏休みの予定を立てるのって、楽しいですよ。

高校1年生の夏休み。

皆でキャンプに行こうと計画が立ちます。それも、1週間近くも！
学君も美春ちゃんも、ついでに信君も、うかれまくり・・・です
が・・・。

でも、その前に、何か変なことになりそう・・・？

次の更新は4月16日です。

では、次回！

第17話 情報・やつかいな影

「せいりゅうかい
星龍会？」

「ご存知ですか？坊ちゃん」

その名前を聞いて少々眉をひそめた学に、その男はブレザーのポケットから銀色のシガレットケースを取り出し、ふたを開いて中を勧めた。

どう見ても市販のものではない紙巻が、10本ほど入っている。

学はそれを見て苦笑いしながら、片手を軽く振った。

「せっかくだけど、断るよ。ドラッグはやらない」

「遊び歩いているわりに、相変わらず真面目ですね。坊ちゃん」

男は感心するようにシガレットケースを閉じると、昔を懐かしむような目をして笑う。

「・・・一様と、同じだ・・・」

男は学の父の一と、同じくらいの歳だろうか。

今でこそ裏の世界で情報屋の元締めのような地位にいる男だが、

元々は昔、葉山家の使用人だった。

昔、まだ若かった頃、警察沙汰になる事件を起こし、一生刑務所から出られない身になりそうになったところを、まだ大学生だった一に救われた。

一生の恩を一に受けた男は、それ以来、情報屋として陰ながら葉山家の力になってきた。

今は、一の息子である学のために動くことが多い。

学としては、「表」の情報は信に、「裏」関係の情報はこの男、茂田に、と使い分けが出来て重宝している。

「俗に言う、暴力団、ってやつだろ？あんまりお友達にはなりたくないな」

学は、寄りかかっていた建物の壁に、コンツと頭をぶつけた。

たまに一緒になる3年生数人と、クラブに遊びに来ていたところ、

学を捜していたらしい茂田に捉^{つか}まったのだ。ちょうど声をかけてきた女の子が気に入りにかけていたところだったので、後にしてもらおうと思っただが、「彼女」に関係した話ですよ、と言われ、いちにも無く席を外した。

「彼女」と言われれば美春のことだ。学にとっては何よりも優先順位に入る。

「元々は、星野組っていうケチな小さい事務所だったんですけどね。最近、違法ドラッグの売買で資金作りが順調で、少しずつ勢力を伸ばしてきた……。まあ、セコイ暴力団ですがね」

「違法ドラッグ」と聞いて、学が鼻でふんつと笑う。真つ当な製薬会社の息子で、幼い頃から独学で薬学などを学んでいる彼は、その存在を毛嫌いしている。

「その会長に、18になるバカ息子がいるんですがね、そのガキが『ミス西海』に興味を持っているって噂があるんですよ」

一瞬にして学の表情が険しくなった。

「いつも下の者を数人はべらせている割には、自分じゃ何も出来ないようなバカ息子ですがね。それでも、周りについている者達が血の気の多い奴らばかりでやっかいだ。……おまけに、今年の『ミス西海』といやあ、坊ちゃんの『彼女』でしょう?」

「ああ……。美春だ……」

学は腕を組んで右手を顎の辺りに当て、ちよつと考え込んだ。

「お耳に、入れておいたほうが良いと、思いましてね……」

「ああ。有難う。茂さん」

学は礼を言つて、ニヤツと笑う。

暴力団のバカ息子か。

また、厄介な奴に目を付けられたもんだ。

俺の、美春は……。

「今日は遊びに行つてたんじゃなかったの？」

窓のカーテンを引き直しながら、美春は相変わらずベランダから入ってきた学を振り返った。

「んー。美春の顔、見たくてさ」

学に得意の「いい顔」で微笑まれ、慣れているとはいえ、条件反射で赤くなつてしまった。

学から顔を逸らして、カーテンを直す振りしながら動揺を隠す。「きよ、今日はケンカしてきた風でもないし。えっ、偉いじゃないのっ。どうしたの？お気に入りの子は見つからなかったの？」

「んー。『おっ』と思つたのは居たんだけだね。・・・美春のほづが可愛いな、と思つたら、お前の顔見たくなくてさ。早々に引き上げたんだ」

「・・・」

美春はカーテンをグツと握り締めた。落ち着こうと思つて学から顔を逸らしていたのに、その顔はだんだんと赤くなつていつてしまふ。

そんな美春の心情を知つてか知らずか、学は持っていたコンビニのビニール袋をガラステーブルの上に置く。

「新発売のコンビにスイーツが出てたから買つて来たぞ。食おーぜっ」

「ね・・・寝る前に、あんまり甘いもの食べたなら太っちゃうじゃない。少しは女の子のこと考えなさいよっ。無神経ねっ」

嬉しいが、ついつい憎まれ口が出てしまふ。実際美春はもう寝ようと思つていた。時刻は11時。すっかり薄いライムグリーンのパジャマに着替えてしまつている。

すると学は、後ろを向いたままの美春を、ひょいっと「お姫様抱っこ」した。

「やつっ！！ちよっっ！！まなぶっっ！！！！」

美春が慌てる。先日も制服姿の時に同じ様な事をされたが、制服と違ってパジャマは薄い。まるで裸で抱き上げられているような錯

覚を起こし、美春はさつきよりも真っ赤になってしまった。

「ほらー。全然太ってねーよ。もう少しポチャツとしてもいいんじゃないの？・・・まあ、実際・・・」

抱き上げた美春の胸元に視線を落とす。

「胸は必要以上に形良くぽっちゃりしてるけど」

眠る時はブラジャーを着けない。抱き上げられた瞬間、モロにその形が出てしまっていたらしい。

美春は片腕で胸を押さえると、もう片方の手で学の頬を引っ張るようにつねった。

「どこを見てんのよおおお~~~~~」

「いたい、いたい・・・。いたいってえ・・・みはるう・・・」

美春が手を離すと、やっと学が美春を床の大きなビーズクッションの上に下ろす。

「じゃあ、食わねーの？」

つねられた頬をさすりながら訊く。

美春は袋の中を覗き込み、そこに大好きなフルーツが沢山乗ったスイーツを見つけ、にっこお・・・と笑った。

「食っつ」

・・・やべえ・・・。サイコーに可愛いつつ。

学はつねられた頬のついでに、鼻の上まで押さえてしまった。

可愛くて、鼻血が出そうだ・・・。

おまけに、薄いパジャマを通したその下はすぐ素肌。

無意識のうちに、ブラジャー無しでも形良くその存在が解る胸の辺りに目が行ってしまう。

・・・俺、いつまで我慢できるのかな・・・。

たまに学は後悔する。

美春をちゃんと守れる男になるまで、美春にこの気持ちは伝えない。

美春に手は出さない。

それまで、美春の全ては自分が守る。
と、自分に誓ってしまっている事を。

スイーツと一緒に、ドリンクが2本入っていた。コーヒーと紅茶。学はコーヒーなのだろうと、美春は缶の口を開けて学に差し出す。

「はい。学」

魅きこまれてしまいそうな笑顔でニコツと笑い、自分にコーヒーを渡す美春の腕を、学はグツと掴んで引き寄せた。

そのはずみで美春は前のめりになり、ちよつと学と顔が近付いてしまいドキツとする。

「な・・・なに？まなぶ・・・」

「・・・美春・・・さあ・・・」

このまま・・・押し倒してしまおうか・・・。

もしこのまま抱き締めてしまったら・・・。
きつともう止まらない。

「じらっ！」

そんな学の気持ちも知らず、美春はいきなりコーヒーを持った反対の手で、今度は学のスラリとした鼻をつまむ。

「いきなり引つ張ったらコーヒーこぼれるでしょ！床に敷いてる白いラグ、お気に入りなんだからねっ。しみになったらどうすんのっ
っっ」

コーヒーを学の手押し付け、彼から離れ、今度は紅茶の缶の口を開ける。

実は、何となくただならぬ学の様子に、美春はずつとドキドキしていたのだ。

何か、今日の学。・・・変だよ・・・

学はつねられた鼻を押さえてクスツと笑う。

「しみになつたら、新しいの買ってやるよ。もっといいヤツ」
すると美春が、べえつと赤い舌を出した。

「やーよあー。いいの買ってやるからヤラせろ、とか言うんでしょつ。このスケベ男っ」

「あたりー！。さすがっ！わかつてんじゃんっつ！」

「しょうがないなあ」とでもいうように笑いながらスイーツを取り出す美春を眺めながら、学は何気なく提案する。

「そつだ、美春。明日から夏休みまで、学校の行き帰り、一緒しよつぜ」

「朝も帰りも？毎日？」

「ああ。バイクの後ろに乗っけてってやるからよ。朝、少し寝坊できるぞ。・・・夏休みキャンプを控えてるんだから、お前に何かあったら行けなくなつちまう。心配だから、送り迎えしてやるよ」

「相変わらず保護者気取りね」

嫌味半分の口調で言うものの、実はちよつと嬉しい。

「じゃあ、少しの間、乗っけてってもらって楽しようかなー」

「楽させてあげたら、何かイイコトしてくれる？」

「・・・平手打ち3発くらいでどう？」

「けっこつです」

しばらくの間、美春から目を離してはいけない。

学は嫌な予感を抑えきれないまま、そう考えていた。

第17話 情報・やっかいな影（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

美春ちゃんの身に迫る危機を知った学君。

遠回しに、彼女を守る策に出ます。

彼は、美春ちゃんを守りきれるでしょうか？

しかし・・・思春期真っ盛りの男の子は・・・しょうがないなあ

あ・・・。（笑）

煩惱まっしぐらですっ。

まあ、セーブしている分、学君は偉いと思うんです！（かわいいそ
ーだけど）

今回はちょっと、美春ちゃんに怪しい手が迫ります。

次の更新は、4月20日！

では、次回！

第18話 登下校・いつも一緒に

「やだーあ！今日もー？」

「なんでーえ！葉山くーんっつっ」

女子生徒の悲痛な叫び声が聞こえる朝。

徐々にスピードを落としながら、一台の小型バイクが校門の中へ入ってくる。

ホンダ NSR250R。ホワイトとブルーの洗練された車体。

西海学園高校は、自転車の他にスクーターでの通学も許可制でOKだ。しかし、「スクーターも小型バイクも、16歳からなのは同じです」と、良いような悪いような屁理屈(?)をこねてバイク登校をしてくるのは、言わずと知れた……。

「葉山ーっっ！」

その本人、学が、校門を入れてすぐの所にある駐輪場の前にバイクを止めると、それを待っていたかのように、生徒指導部主任の瀬古田教諭と生徒会顧問の宮川教諭が二人そろって走ってきた。

「お、お前っ！バイクに二人乗りはまずいだろっ！」

「それに、ヘルメット、被ってないじゃないかっ！」

前が宮川。後が瀬古田。1年生にそのくらいの注意、先生一人で良いだろう。という考えもあるのだが……。

「大丈夫ですよ。何かあっても、ご迷惑はかけません」

丁寧だが、どこか「上から口調」で学がにつこりと笑う。

この余裕。ハッキリ言って、教師一人でかかったのでは太刀打ちできないのだ。

バイクの乗り方に一言言われるのも無理は無く、学はといえば、ヘルメットも被っていないければ、制服姿に革靴のまま。本格的なバイク乗りが見たら怒り出しそうないでたち。それでも彼は、自転車

にでも乗ってくるように軽々と乗りこなしてくる。

4月はじめが誕生日で、すぐに免許を取った。乗り始めて3ヶ月強だが、随分と慣れていて上手い。・・・実は中学の時から、年上の遊び仲間のバイクを借りたりしていた。美春に言うと怒られるので言っではないが・・・。

「ご迷惑はかけません、って言っただけでな、こんな事、PTAにでも知れたら・・・」

「そうだぞっ、それじゃなくても250バイクで通学なんて前代未聞なのにつ。PTAが知ったら・・・」

しつこいようだが、前が宮川。後が瀬古田。私立の学校はPTAの力が大きい。気にするのも無理は無いが、二人はそこまで言っただけでハッと気付く。

・・・今のPTA会長つて、葉山の母親じゃなかったか・・・？二人がその事に気付いたのを察して、学がにやつと笑う。するとその学の後ろから、今まで隠れるように背中に捕まっていた美春が、ひょこつと顔を出した。

「すみません。宮川先生、瀬古田先生。学、私を送るために二人乗りさせてくれているんです」

ここ3日間ほど、美春を後ろに乗せての登下校。

女の子たちの悲痛な声が響き渡るのも無理は無いが、もちろん教師側としてもハラハラしどうした。

美春はバイクの後ろからびゅんっとなげ降ると、申し訳ななさそうな顔でぺこりと頭を下げた。

実に感じよく、可愛らしい。

宮川には、5歳になる娘がいる。将来、ウチの娘もこんな子になってくれるといいな。・・・などと、見果てぬ夢を見てしまっ。

そして、瀬古田には、ちょうど反抗期の14歳になる娘がいる。

もう少ししたら、ウチの娘もこんな風に素直で可愛い女の子になってくれるんだろうか。・・・などと、不可能に近い願望を持

っ。

そんな夢見る父親たちの羨望のまなざしを受け、美春は顔を上げるとニコツと笑った。

「あまり目に余るようでしたら、私が学のお母様に告げ口して注意してもらいますから」

いたずらっぽい口調も、実に可愛らしい。

自分の娘の将来を夢に見ながら、教師二人は何も言えなくなった。

「しかし、今日の宮川と瀬古田は傑作だったよな」

その日の放課後、帰りに書店に寄りたい、と美春に言われ、大型書店の駐車場にバイクを止めながら学が思い出し笑いをした。

「すっかり美春に言いくるめられちまって。何も言えなくなっちゃまってやんの」

含み笑いをする学の鼻先に指を突きつけて、美春が叱るような顔をする。

「学ってば、注意されている時に、あーゆー」上から目線』は駄目だっけ言ってるでしょっ」

「上から目線、なんて、してねーよ」

「してるっ。歳相応じゃないその話し方が、すでに『上から目線』なのっっ」

良く言えば「落ち着きがあり、堂々としている」と言えるのだが、悪く言えば「生意気」。生まれ付いての性格なので、しょうがないと言えばしょうがないのだが・・・。

「はいはい。すいませんねー」

学はふざけて美春に顔を近づけると、バイクの鍵をズボンのポケットに突っ込んで、自分の鞆と美春の鞆を小脇に抱えた。

「あっ、いいよ学。自分で持つよ」

「本選ぶんなら、両手があいていたほうが良いだろ？で？何買うんだっけ？」

「うん。今日発売の雑誌。それと文庫本、ちよつと見たくて」

「工口本？」

「アホツツ。私が買うかつつ。あんたじゃあるまいしっつ」

俺だつてそんなに買わねーよ。だいたい、先輩連中から回ってくるし……。と、言おうと思つたが、殴られそうなのでやめた。

入り口を入つてすぐの所に、色々な種類の写真集コーナーがある。学はそつちを指差して美春に言つた。

「俺、写真集でも見てるから、ゆつくり選んで来いよ」

「エツチなヤツみるんでしょお~~~~~?」

ゴンツ。美春の頭をゲンゴツで小突く。

「そーゆーもんはビニールが掛かつてて見れねーの。いっつも俺がそんな物ばかり見てると思うなっ」

ちよつと強めに小突かれた頭を押さえ、「へへっ」と笑つて、美春は手を振りながら雑誌コーナーへ歩いていった。

それを見送つてから写真集コーナーへ入り、風景写真集が並ぶ棚を眺める。

空の景色を集めた写真集が目に入り、手に取つてパラパラとめくつた。

雲、風、水、光、氷。などの章ごとにつづられた。「空の名前」。

美春、こういう本、好きだよな。買つてやるうかな……。

などと考えながらパラパラめくっていると、書店のドアが開き、男が二人入つてきたのが視界の端に引つかかった。

気になつてちよつと目を向ける。二人とも20代始めくらい。どう見ても「まともな職業」の風貌ではない。

一人は坊主頭で、片腕に刺青の痕が見える。もう一人は金髪ふわふわ頭に、耳にはこれでもかとはかりに大き目のピアスが何個も刺さっている。

あんなに下げているなら、外の音が聞こえにくいだらう。そう思いつつ横目で二人を追う。二人はキョロキョロと中を見回すと、こそこそと話し出した。

「ここに入ったよな」

「ああ。背の高い男と一緒にだったぞ」

「綺麗なねーちゃんだから、すぐに解るとは思っけどよ」

「とりあえず雑誌のほう、行ってみるか」

まさか……。こいつら……。学は本を持ったまま、二人組みの後ろを歩き出した。

レジの並びにある「本日発売」のコーナーに美春の姿は無い。するともう文庫本のコーナーにいるのだろう。

そう考え、男達から離れると、急いで文庫本コーナーへと走った。さすが、と言うか、何と言うか、すぐに美春を見つけた学は、急いで彼女の傍へ駆け寄ると急かすように言う。

「美春っ。さっさと出て何か食いに行かねー？俺、ハラ減った」

「え……。？いいけど……」

正直、来たばかり。もう少し見ていたかったが、学は言い出したら聞かない。それを知っているので一応承諾する。と、学は美春が抱えている雑誌と、今手にしている文庫本を取って、美春の手を引き急いでレジのほうへ歩き出した。

「え？ま、学……。？？」

妙に急ぐ様子に驚く。何？そんなにお腹すいたの？？

学は本3冊と一万円札をレジにポンツと置くと、

「はい、3冊ね。お釣りはいらさないから」

そう言っつて、店員が本を袋に入れる間も与えず、本を美春の手に持たせ、背中を押して出入り口へと向かう。

「ま、まなぶ？？」

美春には、何故学がそんなに急いでいるのかが解らない。

おっ、お金、払ってもらっちゃった……。けど。良いのお？

店を出る瞬間、「おい、いたぞ！」という大きな声が聞こえ、学は更に急いでバイクの方へと向かった。

「しっかり持ってる」

本と鞆を持たせ、ひょいっと持ち上げて後ろへ座らせる。エンジ

ンをかけ、ひとふかしさせた瞬間、さっきの二人が店から出てきた。
「いたぞ！」

しかしその声と共に、バイクは急発進する！

「きゃっつっ！！！！」

美春は驚いて学に掴っていた腕に力を入れ、更に強く、彼の背に
抱きついた！

ど・・・どうしたの？学。

本気で、何とかしないとまずいのかもな。

学は舌打ちをしながら、とりあえず急かされて不満気味の美春の
機嫌を取るために、甘いものでも食べさせようと、馴染みの喫茶店
へと向かった。

第18話 登下校・いつも一緒に（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

連れ去られそうな危機を、何とか回避した学君。

しかし、放っておいたら本当にまずい事になりそうです。

自分がそんな方々に目を付けられているとは知らない美春ちゃん。もうすぐ楽しい夏休み。楽しみにしているキャンプの前に、何とかしたいところです。

そんなに詳しくは書きませんでした。書店のシーンで学君が見ていた写真集。

「空の名前」は、本当にある写真集なんですよ。

玉紀も持っていて、自分の本棚の「お気に入りコーナー」に入っています。

もし書店で見ることがあったら、ちょっと覗いてみてください。

次回の更新は、4月23日。

では、次回!!

第19話 キャンプ前・彼の幸せ

「まゆー！呼ばれてるよっっっ」

昼休み、教室で友達と話をしていた繭子のところへ、やけに興奮したクラスメイトが駆けつけてきた。

「何？」

「あれっ！あれっ！あの人っっ！！」

興奮冷めやらぬクラスメイトが指差す方を見ると、教室前の出入り口で、クラスのみより素行がよろしくない部類の男子達と、仲良さげに話している少年が一人。

少年は繭子が自分のほうを見ている事に気付き、笑顔で手を上げた。

「あさひなさーんっ」

学だった。

「何の用なの？」

話があるという学が繭子連れしてきたのは、学校の屋上。

2ヶ月ほど前、繭子はここで学にフラれている。あまり来たい場所ではない。

「朝比奈さんは、星龍会の息子と交遊があるらしいですが？」

繭子はドキツとする。先日その息子が、美春の事を口に出していたのを思い出す。

繭子は以前、「美春には手を出すな」と学に威嚇いかくされて怖い思いをした事があるのだ。

「別に・・・たいしたモンじゃないわ。1ヶ月くらいよ・・・」

「結構深い付き合いなのでしょう？1ヶ月間ずっと、その息子のたまり場に入り浸りだそうじゃないですか」

信にもらった情報だ。間違いはない。

学は、気まずそうに自分から目を逸らしている繭子の顔を、グツと覗き込んだ。学の顔が間近に来て、繭子がドキッとす。

「その息子が、美春に目を付けているらしい。・・・そんな話を聞いたことがありますか？」

「いったいこの人は、どこからそんな情報をもらうのかしら。そう思いつつ、歯切れ悪く話し出す。「知っているわ。・・・今年の『ミス西海』は可愛い、って。『会ってみたい』って言っていたわ。・・・フンツ、『犯ってみたい』の間違いだね・・・」

繭子が鼻で笑う。モロ不快そうに、学の眉が寄った。

「翔太しやうたっていうのよ。取り巻きが何かをしてくれないと何も出来ないような男。自分じゃ何もしないの。フンツ、そのくせ威張りくさっちゃってさ。バカみたい」

「そこまで言う男と、どうして付き合っているのです？」

「取り巻きにナンパされて、連れて行かれたバーに翔太がいたのよ。1回ヤツたら気に入られちゃってさ。・・・別に、好きで付き合っている訳じゃないわ。・・・行かないと何をされるか解んないし。怖いから・・・」

「だんだんと声が小さくなっていく。学にも由貴人にも軽くあしらわれて、やけ気味になっていた時だった。」

繭子としては、あんな物騒な所に行きたくはない。しかし、本当に、行かなかつたら何をされるか解らない。違法ドラッグで勢力を伸ばしているような暴力団の息子だ。薬漬けにされて何処かに捨てられる可能性だってある。

「あなたを、そんな誘いに乗らせてしまった原因は、もしかして俺にもあるのかな？」

学は繭子の顎に手をかけると、目を逸らす彼女の顔を自分のほうへ向けた。

「だとしたら、よけいに放っておけないな・・・」

繭子は心臓が爆発しそうだった。

どうしてこの人、こんなドキドキする様な事、平気で言えるのか

しら！

それが学だ。しょうがない。

「とにかく。情報を有難う。繭子さん」

繭子がもう一度自分の気持ちに迷ってしまいそうな笑顔で、学はにっこりと微笑んだ。

学が教室に戻ると、それはそれは幸せそうな空間が出来上がっていた。

「私、虫イヤだ」

「大丈夫だよ。女子はキャビンだから、テントほど虫とかこないよ」「絶対？全然？」

「まあ、少しは来るか。．．．蛾とか、蟻とか．．．。たまに」

「えー！ー！」

「大丈夫っ！そんなモンも入らないように、オレ、夜通し虫除け焚いておいてあげるからっつ！ー！」

お前はキャンプの間中、寝ないつもりか？

そうツツコンでしまいたくなるような事を、真剣な顔で意中の彼女と話しているのは信だった。

「．．．．蜂とか、いない．．．．？」

「昼間は．．．、出たりすると思う。自然の中だし．．．。」

「えー！ー！．．．．やっぱり私、行くのやめようかな．．．。」

「大丈夫だよっつ！ー！代わりに刺されてあげるからっつ！ー！」

アホ．．．．。

信の気持ちを知ってか知らずか、必死になる彼を振り回しているのは、言わずと知れた彼の「意中の彼女」涼香だ。

キャンプ場のパンフレットを前にして、涼香が座る席に、明らかに自分の席の物ではない椅子を引っ張って行って座り込み、くつついて話し込んでいる。

「そっだ、田島君。今日の帰り、ヒマ？」

「え？」

何だろっ、と目をぱちくりさせる信に、涼香は彼が可哀想になっ
てしまうくらい可愛らしい微笑みを向ける。

「美春に聞いたんだけど、キャンプの時って、パジャマとか浴衣と
かじゃなくて、Ｔシャツ短パンみたいな楽な格好で寝るんでしょ？
私、正直、そういう楽な服とか持ってないのよ。買いに行きたいん
だけど、ついて来てくれる？」

「え？オレ、で、いいの？」

呆然として、自分の席で本を見ている美春を指差す。そういう買
い物、って・・・女同士で行くんじゃないの？

しかし涼香は、カクンツと小首を傾げてトドメの一発を放つ。

「ダメ？」

ダメな訳がないっっっ！！！！

「終わったら、ハンバーガーおごるからさっ」

再び、にこっ・・・。

もう堪らん、とばかりに、信は椅子から立ち上がった！

「いつ、いいよおっっ！ハンバーガーくらい、オレ、おごるしっ、

！もうっ、服だろーが下着だろーが、何の買い物でも付き合っよっ
っっ！！」

・・・ちよつと、願望が入った。

信の勢いに一瞬目を丸くした涼香は、すぐにクスクス笑って上目
使いに信を見る。

「シエイクもいい？」

「何でもいいっっ！何個でもいいよっっ！！」

健気けんげすぎて、涙が出そうだ・・・。学は信を見ながらハーツと息
を吐き、前髪を掻き上げると、席に座って先日学があげた写真集を
見ている美春の傍へ近寄った。

「美春、その本、気に入ったか？」

美春が学を見上げ、にっこお・・・と笑う。

「良かったっ」

かつ・・・かわいいいいつつつ!!!

学は思わずニヤケそうになる。彼も、信の事は言えないのではないだろうか？

「ところでさ、美春はキャンプに向けて買い物とかは無いのか？」

「買い物？だって、道具は全部、学のことか男子達のトコで揃うし、食料は現地調達だから持って行く物ないし」

「服とかは？涼香さんは田島お供で買いに行くらしいぜ。美春はなの？付き合うぜ」

まだ二人でくつついて話し込んでいる、信と涼香を親指でしゃく

る。美春は本を口元にあてて、うーんっと考え込んだ。

「別に、高級リゾートに行く訳じゃないし、外でゴロゴロできるよーな服なら持つてるし、・・・別に無いなあ」

と、学が、キスでもしてしまいそうな勢いで美春の両肩を掴み、グイッと顔を近付けた！

「なんでー！せっかく親抜きで俺と夜を過ごせるっていうのに！ブラジャーでも新調しようぜ！ー！」

バシーーーーンツツ！！

「関係あるかあっつ！アホツツ！！！」

ひっぱたかれるのが解っているのだから、言わなきゃいいのに・・・。

学はひっぱたかれた頬を押さえながら、真っ赤になって学から目を逸らす美春を眺めた。

本気で、何とかするか・・・。

第19話 キャンプ前・彼の幸せ（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

「本気で何とかするか」の「何とかする」のさわりまで行きたかったのですが、ちょっといけませんでした・・・。

その理由は、信君があまりにもハシャイデいたせいです。（笑）彼は幸せですよ。意中の彼女はキャンプが初めてで、思いつきり自分を頼ってくれてますから。

涼香ちゃん、君、信君の気持ち知っててやってるだろう？（大笑）

次回はやっとなんか動きます。

だって、相手が出るのを待ってなんかいたら、「ばか息子」に何をされるか・・・。

そんなの彼が黙っている訳無いじゃないですか！

次回は4月27日更新。

では、次回！

第20話 限界・動き出した学

「雨、降りそうだねー」

開け放たれたままの教室の窓。そこに腕を乗せて、美春はポツンツと呟いた。

空は曇り空。どんよりと重い。

「降るんじゃない？夜くらいに」

そう言いながら美春の横に立ち、窓枠の上に手を掛けて空を見上げたのは、信だ。

放課後の教室。少し前までクラスメイトがパラパラと出入りしていたが、今は二人つきりだ。

この二人が教室で、「二人つきり」。・・・というのは、あまりにも学が怒り出しそうなシチュエーションではないか？と思うが、それには理由がある。

あと3日で夏休み。あさっては修了式だ。

7月中にはほぼ宿題等を片付けて、8月に入ったらすぐ男女10人ほどでキャンプに行く計画を立て、生徒達だけと言うことなので校則に従って学校に届出をしておいた。

「責任者」が学だという事で許可はすぐ下りたが、この時期になり、ある参加者の親が「本当に子供たちだけで大丈夫なのか」と生徒指導部の瀬古田に相談してきたのだ。

そこで責任者の学が呼び出され、今、生徒指導室に行っている。

夏休みまで「絶対」に登下校を一緒にする、という約束をさせられている美春は、教室で学が戻ってくるのを待っているという訳だ。

「俺がいない間、心配だから美春を見てる」と言われて、信が傍にくっついている。

教室で二人つきりなのはそういう訳だ。

「あのさ・・・光野さん・・・」

信がちよっと言いづらそうに切り出す。美春は「ん？」っと小首

を傾げた。

「・・・菱崎さんってさ・・・付き合ってるヤツ、いないよね？」

「涼香？いないと思うよ。そんな話聞いたことないし」

「いないだろう・・・とは思いつつも不安だった信は、友人の美春の言葉で確信を持つ。」

「よしっ！」と、心の中で決意の握りこぶし！

実はこのキャンプ中に「好きだ」という心の内を告白してしまうおう、と、決めているのだ。

「でもなんで？あ、もしかして、涼香を好きな男子にでも『彼氏がいるか聞いてくれ』って頼まれたの？大変だねー」

悪気もなくニコニコとしながら、信の背中をポンポンと叩く。

あれだけ涼香にくつついて、かまいまくる姿を間近で見ているのだから、信の気持ちなどとくに気付いていても良いようなものが・・・。美春は気付いていない。

それが美春だ。しょうがない。

と、その時、教室のドアが開く音が、静かな教室内に響いた。

学が戻ってきたのかと思ひ振り返った二人が見たのは、どこか不安げな元気がない涼香だった。

「あ・・・田島君。いた・・・」

信の顔を見て、ホツとしたように笑う。

「涼香どうしたの？さっき帰ったんじゃない？」

しばらく話し込んでいたが、涼香は20分くらい前に「帰るね」と言っ、教室を出たはずだった。

涼香は二人の前に寄って来ると、ちよつと恥ずかしそうに信を見上げた。

「田島君・・・一緒に、帰ってくれない？」

「・・・え？」

いきなりの申し出に、信は心臓が飛び出してしまいそうなほど驚く。・・・が、もちろん、嬉しい。

「田島君のお家、私の家と逆方向だから、途中まで、っていうか、

校門を出て少し行った所まででもいいの。・・・一緒に帰ろっ」

意中の彼女から「一緒に帰ろっ」とのお誘いだ。彼としては、家が逆であろうと何であろうと、しっかりと家まで送ってあげようという気分。

今すぐにも「はい！喜んで！」と、居酒屋の店員のような返事をして飛び出して行きたいところだ。・・・しかし、「美春を見ていてくれ」と学に頼まれている。

信は、はやる気持ちを抑えて、冷静を装いつつ涼香に訊いた。

「いいけど。どうしたの？急に」

「・・・校門前にね、変な人達がいるのよ・・・」

「変な人？」

信が不可解そうに訊き返したとき、教室のドアが再び開き、今度こそ入ってきたのは学だった。

「美春、お待たせー。帰ろっぜえ。田島、サンキューな。・・・あれ？菱崎さん、帰ってなかったの？」

にこにこしながら近寄ってきた学に、涼香は両手を合わせて「ごめんね」のポーズをとる。

「ごめんね、葉山君。ウチの親が面倒なこと言ってきた」

不安を訴えてきた親、というのは、実は涼香の両親だ。

涼香の家は、日本舞踊「菱崎流」の家元。いうなれば涼香は家元のお嬢様だ。そう思えば、涼香がキャンプに行ったことがないというのも、キャンプにでも着られるような気軽な服を持っていないというのも、納得できる。

両親も一度は涼香に説得されて承諾したが、やっぱり不安で、許可を出した学校に相談に来たという訳だ。

「大丈夫だよ。菱崎さんのご両親には、うちの会社のパーティーなんかでも会った事があるから、俺が責任者だって言ったら、すぐに納得してくれたよ」

涼香が「良かった」というように胸をなでおろす。

「涼香、キャンプ楽しみにしてたもんね。良かったね」

美春が窓を背にニコツと笑うと、涼香も嬉しそうにニコツと笑い、そして、こっそりチラツと信を横目で見る。・・・ちよつと、赤くなつて。

しかし、その仕草に気付いたのは学だけだった。

学は肘で信をつつくと、小声で言った。

「箱入り娘だからな・・・。親は手ごわいぞ」

「は？」

いささか学の言葉の意味が解らなかつたが、信は自分の席から鞆を取ってきて、涼香の横に並んだ。

「じゃあ、帰ろうか？菱崎さんっ」

「何だー？一緒に帰る約束してたのか？」

だったら美春のお守りを任せて悪かつたな。と学が思った時、美春が口を出した。

「あのね、校門前に変な人方がいるんだって」

「変な人？」

すると涼香が、嫌そうな声で話し出す。

「校門の前でね、黒い車の前に立って、出てくる生徒をずっと見てるの。・・・走って通り過ぎる人もいたけど、怖いから女子はほとんどが、わざわざ裏口まで回って学校から出ているみたい。何か、ヤクザみたいな人達でね、坊主頭で刺青が入ってて、もう一人は金髪でいっぱいピアスしてて・・・」

この間の奴らか？！学の表情が変わる。

・・・学校にまできやつたか。

「よし、美春。俺達も急いで帰ろうぜ。雨が降りそうだしな」

学が急ぐのは雨が降りそうだからだろう。そうとしか思わない美春は、ニコリ笑って「うん」と頷いた。

「学？どこにいくの？！」

「裏口から出るー！」

バイクの後ろに美春を乗せた学は、そのまま駐輪場から校舎前を通り裏庭へ向かってバイクを走らせた。

校門前には涼香が言った通り、黒い車と先日の男二人が、出てくる生徒達をひとりも見逃すまい、とジロジロと見ている。

先日書店から美春を逃がす時にバイクを見られているので、校門から出る訳にはいかなかったのだ。

もうすぐ夏休み。へたをすれば家を調べられて、家の前で待ち伏せされる可能性だってある。学校に居る時ならともかく、夏休み中、四六時中美春の傍にいることは出来ない。

いや、彼としては、傍にいたいところだが……。

「限界だな……」

学は呟いて、小さく舌打ちした。

「つままないな」

いつものバーのボックス席に反り返るように座って、翔太は本当につまらなそうな声を出す。

「ミス西海の子には会えないしさーあ」

チラツと横目で、隣に座る繭子を見る。

「お前にも、飽きたしい」

繭子はフンツと鼻で笑って翔太から顔を逸らした。

「それなら消えてあげる。もう来ないわ」

これで、ここから解放される。繭子は内心ホツとするが、そう言っただけで立ち上がった繭子の手を、翔太は素早く掴んでニツと笑った。

「待てよ……。最後に、面白いこと、しようぜ……」

繭子は不快そうに眉を寄せる。何よ、最後に1回……って事？それならそれでいいわよ。もうここに来なくていいなら。

しかし、そう思う繭子の思惑とは裏腹に、翔太はカウンターに座る4人の男達に声をかける。

「おい。お前ら……」

男達が振り向き、翔太を見ると、翔太はニヤリ・・・と笑って、繭子を顎でしゃくった。

「・・・この女、犯っちゃえよ」

「なっ！」

繭子が驚いて翔太から離れようとするが、手を掴まれているのでそれ以上離れられない。

「たいくつだからさあ、最後にいいモン見せてくれよ・・・」

楽しそうに喉の奥で笑う。繭子は慌ててその手を振りほどこうとするが、がっしり掴まれていて離れない。

「冗談やめてよ！ふざけないで！」

カウンターから立ち上がった男達が、繭子のほうへ寄ってくる。

どうやら、ふざけている訳でも冗談でもないようだ。カウンターに中にある店の女性二人が、ちよつと嫌そうに目を逸らした。

「ちよつと・・・」

繭子の声が震える。一番背が高い体格の良い男が、繭子に手を伸ばそうとしたその時、

「悪趣味だな」

外は小雨。そのせいで店内は少々湿っぽかった。その為に関けっ放しにしていた店の出入り口から、その声は聞こえた。

繭子が、取り巻きの男達が、そして最後に翔太が、声のした方を向く。

「輪姦まわしなんて、最低の人間がすることだ・・・」

繭子が目を見張った。

どうして、彼が・・・。

そこに、学が不敵な笑みを湛えて、立っていた・・・。

第20話 限界・動き出した学（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

もう我慢できない。いや、しちやいけない、とばかりに、学君が動き出しました。

ただ今回は、相手の夕チが悪い。

学君はこの夕チの悪い方々を、何とか出来るんでしょうか？
彼がケンカに強いのは解ってますが、相手が多すぎるのでは？

今回は、前書きに注意文を入れさせて頂くつもりではいますが、少々「暴力シーン」が入ります。

そういった喧嘩の描写が苦手な方はご注意下さいね！

今回は、4月30日更新！

では、次回！

第21話 危険な男達・決戦の始まり（前書き）

* 注意 *

今回は本文中に、喧嘩等の暴力シーンの表現が含まれて居ます。そういった表現が苦手な方、嫌いな方はご注意ください。

第21話 危険な男達・決戦の始まり

「最低の商売しか出来ない人間は、女の扱いも最低だな」

あざ笑うような口調で、学はゆっくりと店内へ足を踏み入れた。

「なんだあ？ テメエ・・・」

繭子に手を掛けようとしていた大柄な男が、グツと学を睨み付ける。

普通の大人では疎んでしまいそうな目であるにも係わらず、反対に学はその男を睨み返した！

その時、学の顔を見て何かを考えていた、坊主頭に刺青の男が、ハツと思いついたように学を指差す。

「あつ！ お前！ あの時、本屋に居た、バイクのガキ！！」

その横に居たピアスの男も気が付いたようだ。翔太に向かって「こいつですよ！ こいつ！！」と、しきりに指を指す。

美春を連れてくるのに2度も失敗しているのだ。嫌味を言われたにしろ殴られたにしろ、ただでは済まされなかつただろう。

「ふうーん・・・お前が邪魔したのか・・・」

翔太が学を睨み付けるが、学はその顔を一瞥して、フンツと鼻で笑った。

「どっかの何も出来ない『バカ息子』が、いたいけな可愛い女の子に手を付けたくてウズウズしている、つて聞いたんでね」

「どっかのバカ息子」その言葉に腹が立ったのだろう。翔太がソファから立ち上がる！

「テメエ！ 生意気なこと言ってんじゃねえよ！！」

しかし、そう叫びながら殴りかかってきたのは、翔太ではなく、刺青の男だった。

学は殴りかかってきたその拳こぶしを片手で受け止めると、そのまま腕を引っ張り、男が前屈みになったところへ、みぞおちを膝で蹴り上げた！

「……ぐっひっ……っっ！」

喉から出たのか体から出たのか、微妙な声を上げ、男がその場に転がるように倒れる！

腹を押さえてヒクヒクしていた体は、10秒もしないうちに動かなくなつた。

「このガキ……！」

下っ端からかかってくる決まりにでもなっているのか。ピアスの男が、相棒（？）がやられた怒りに真っ赤になりながら、学に掴みかかってきた。

店内は狭い。そう大きな立ち回りは出来ない。学はカウンターに沿うようにスツと体をよけ男をかわすと、耳に何個も付いている大きなピアスの飾りを掴んで、グイッと引っ張りあげた！

「ぎあぁっっ……！」

ただ耳に挿しているだけなら痛くは無いだろう。しかし、それを掴んで引っ張られたとあつては話は別だ。男は自然と体ごと学の傍へ寄る。学はニヤツと笑うと、その耳もとに一言言った。

「親にもらつた大事な体に、大の男が穴なんか開けてちゃいけないよ……」

子供に言うような口調。そしていきなりピアスを掴んだその手を思い切り振り上げ、男をカウンターに叩きつける！

「に……ぎゃあぁっっ……！」

まるで猫の悲鳴のような声を上げ、バーンツという音と共に、カウンターに体を打ち付けられる男。学が手を離れた耳を両手で押さえ、カウンターの上を転げ回る。

押さえた手の間とカウンターの上には、真っ赤な血が流れ飛び散っていた。

いづなれば、耳に引っ掛けたものごと持ち上げられたのだ。……耳が裂けたか……ちぎれたか……

「あきやあぁあ……っ」

情けないほど苦痛の声を上げ、男がカウンター内に転がり落ちた

！カウンター内で身を縮め、耳を押さえ、体を震わせたまま動けない。

カウンター内で身を寄せ合って、事の成り行きを見ていた女性二人は、突然の騒ぎに怖くて動けない。それに気付いた学は、ニコツと二人に優しく微笑みかけた。

「失礼。怖い思いをさせてしまつて申し訳ありません。今日はもう、閉店にしたほうがよろしいかと思えますよ」

学に微笑みかけられて、こんな場合だと言うのに、女性二人はポーツと赤くなった。

学は改めて、驚いた顔をしている翔太のほうへ向き直ると、繭子に手を伸ばす。

「朝比奈さん。こつちにおいで」

繭子は立ちすくんでいた足をもつれさせながら、残りの二人と翔太をチラチラ見つつ、学のほうへ走り寄つた。

「は・葉山・く・ん・く・ん・く・ん・く・ん・く・ん」

男たちの手がかかりそうになつた事へのショックか、それとも今の二人のやられザマを見た恐怖か、繭子の声が震える。

そんな繭子に、学はニコツと笑つた。

「大丈夫です。あなたはもう行つてください。もうここに来る必要もないのでしょう？」

「は、はやま・く・ん・く・ん・く・ん」

「もう、こんな部類の人間と係わつてはいけませんよ。女性は『自分』というものを大切にしてください」

繭子はこんな言葉を掛けてもらえるのが、信じられない。

もともとは自分だつて、美春をおとし貶めようとした人間だ。なのに・

。。
「早く。行つて下さい。雨が降りますよ」

繭子を後ろに庇うように、腕で出入り口のほうへ押す。

「は、葉山君は・く・ん・く・ん・く・ん・く・ん」

「オレは大丈夫。こつという手合には慣れていきます」

ちよつと繭子を振り返つてニコツと笑い、そして再び翔太達のほうを睨み付けた。

「素人に手出しするのはやめて欲しいな。ミス西海も、諦めな。・
・あいつには、指一本、触れさせない」

「お前の女？」

翔太が嫌そうに眉をひそめる。学は躊躇することなく答えた。

「そっだ」

すると翔太は、唇の端でフツと笑う。

「・・・お前みたいな生意気な男の女なら・・・、よけいに欲しいな・・・。でも、お前を何とかしないと、手に入らないんなら・・・」

翔太が無言で顎をしゃくる。大柄な男の横に居たアロハシャツの男が、ふらつと一歩、前へ出る。

どこか虚ろな目。何かおかしな気配に、学の顔が険しくなった。

・・・こいつ・・・ドラックでイッチまつてる・・・。

こういった人間は、何をするか分からない。学はちよつと身構えた。

「はやまくん・・・」

開け放たれた出入り口に掴まって、繭子は足がすくんで動けない。

葉山君・・・。

ダメよ。

あなた、喧嘩は強いのかもしれない。

でも、この人達は普通じゃないのよ・・・。

あなた・・・。

殺されるわよ！！

「雨、ちよつと強くなったのかな？」

屋根にぶつかる雨音。それがちよつと大きくなった気がして、美春は机から顔を上げた。

椅子から立ち上がり、窓辺に寄る。カーテンを少し開けて外を見ると、さつきまでわずかな小雨だったのに、少し大粒になった雨が窓にぶつかり流れ落ちてくる。

美春は窓の鍵を開けた。

・・・学、今日来るって、言ってたけど・・・。

今日、家の前でバイクを降りる時、「多分、夜行くから、待ってるよ」と学が言ったのだ。

「何？多分、って？今日はどこかにお出かけ？」嫌味っぽく言ってみた美春に、学はちよつと苦笑いした。「まあな・・・。」と。

・・・誰と一緒に居るんだろう・・・。

窓の外の雨を眺めて、美春はちよつと切なくなる。

今日は、誰と、どこの女の子と、この雨音を聞いているの・・・？

学・・・どこに居るの・・・？

第21話 危険な男達・決戦の始まり（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

ついに始まった大一番。

二人は上手く片付きますが、次は・・・？

美春ちゃんの身を守るために、彼は自分をかえりみず、自分自身を懸けます。

がんばれ！学君！

そして、雨を見ながら学君を想う美春ちゃん。

学君が危険な状況にある中で、次回は、美春ちゃんの学君に対する切ない想いが語られます。

いつものペースで行くなら、次回の更新は、次週月曜日、なのですが、ゴールデンウィーク中はちよつとなかなか執筆が出来ない状況にあるものですから、（毎日更新の連載だけは何とか・・・と思っています）次回更新は、5月8日になります。

架橋に入ってきているというのに、1週間もお休みですみません。

では、次回。

第22話 雨粒の調べ・美春の想い（前書き）

* 注意 *

今回は本文中に、喧嘩等の暴力シーンの表現が含まれて居ます。そういった表現が苦手な方、嫌いな方はご注意ください。

第22話 雨粒の調べ・美春の想い

「学・・・本当に来るのかな？」

ちよつと大きくなつた、雨粒の音。

屋根や窓に当たるその音が、美春の耳に大きく響き始める。

ポツン・・・ポツン・・・。

「待つてるよ」そう言われて、素直に学が来るのを待つてしまう自分が、何となく好きで、でも何となく嫌い。

どこかに出かけて、その後に美春のところに来ることが多い。

実際、今日もそうらしい。

喧嘩をして、ちよつと怪我をしてくることもある。遊びに行つて、顔出し程度で来る時もあるれば、おそらく・・・どこかの女の子を抱いてから来ることもある・・・。

今日はどこへ行っているんだろう？

女の子と、一緒にいるんだろうか・・・？

目の前の窓ガラスに雨粒が当たり、輪を作り流れていく。

「・・・学・・・」

どこにいるの？

誰といるの？

「お前。頭いい？」

翔太の問い掛けに、学は身構えたまま鼻で笑う。

「まあな」

「だろーなー。『かしこいですよー』って顔してるよ」
そう言っつて、喉の奥で笑う。

「オレが大っ嫌いな人間の顔だ！」

ドラッグで、どこか精神状態がおかしくなっているアロハシャツの男。その男の肩に手を掛け、意味ありげに学を見た。

「じゃあ、解るよな？・・・こういう精神状態がおかしくなってる人間っつてさ、人を傷付けても、罪になんないんだよな？」

学の眉が、ピクツと動く。

「『責任能力のない状態』って、いうんだろ？」

犯した罪の度合いにもよるがな・・・。教えてやるうかと思っつたが、癪しゃくに障るのでやめた。

この場で信にでも説明させれば、父の仕事と育つた環境柄、彼は1時間くらい掛けてじっくりと講義をしてくれるだろう。

翔太が、アロハシャツの男が穿いているジーンズの後ろポケットに手を入れる。そこから何かを取り出し、シュツと振った。

パチン・・・。弾けるような音がして、その手に中に小さな飛び出しナイフが現れる。

翔太はそれを男の手に握らせ、耳元で言った。

「お前の『敵』が、目の前にいるぞ」

男がナイフを握つて、ピクリと震える。

「人を刺し殺したって『しんしんそうしつ状態』とかっていうんだろ？」

「心神喪失」って書くんだぞ。と教えてやるうとした口を、ちょっと馬鹿にするように上げて、学は口元で笑った。

こんなイカレタ奴に刺されたら、たまったモンじゃないな。

「うあああああつっ！！」

男が奇声を上げ、足をもつれさせながら、狂ったように学のほうへ突っ込んできた！

学は素早く身を避け、男の腕を叩いてナイフを弾き飛ばす！そのまま男のシャツを掴み、店の隅へと投げ飛ばした！

パンツッ！と、男の体が入り口近くの壁に打ち付けられる！
ドアに掴まって足が竦み身動きできないでいる繭子が、ビクツと
体を震わせた。

「朝比奈さん！早く行くんだ！」

早くこの場から立ち去るように言うが、足が震え竦んでしまっ
ている繭子は、一歩も動けない。

早く片付けて、彼女も一緒に……。

学が繭子に気をとられた、その瞬間……！

ガンツッ！！

「！」

いきなり後頭部に感じる痛み。

「調子に乗るなよ……」

最後に残った体格のいい男が、薄い色つきのサングラスの奥にあ
る小さな目を吊り上げ、組み合わせた両手を学の後頭部に後ろから
振り下ろしたのだ！

その痛みとショックに、一瞬意識がフツと薄れる。

が、それに耐え、倒れそうになる体を足で踏みとどめた。しかし
その時！

「この！ガキがあ……！」

ボックス席の椅子を振り上げ、その椅子で学を背中から思い切り
殴りつけた！

「……っ……っ……！」

さすがにこれは効いた。

踏みとどまることも出来ず、その痛み思わず両膝をつく。

「ぐっ……」

胸から込み上げる声。それと共に口に中が血の味でいっぱいにな
る。胸部に、胸を突くような痛みが走った！

やばい……。肋骨が……。

「まだくたばんねえか！このクソガキ……！」

もう一度椅子を振り上げる！

二度も同じ手にかかる学ではない。膝をついた低い体勢から男に足元に飛び込み、両腕で抱きつくように男の足をすくう！

「うあっ！！！」

手に持っていた椅子を投げ出し、男は堪らず仰向けに倒れた！

店内は狭い。男が倒れると同時に、ボックス席のテーブルは倒れ、その振動でカウンターの上のグラスやボトルが音を立てて床に飛び散った！

胸の痛みを抑えながら、学が男に馬乗りになる。

息をするたびに胸が痛む。本当に肋骨にいつてしまっているのかもしれない……。しかし……。

「てめえらみたい奴らに……」

学の目が吊り上る。

その目はどこか冷たく猟奇的で、今まで威勢が良かった男でさえビクツと震え、その小さな目を見開いてしまっただけ……。

「あいつに！指一本たりとも触れさせねえ！！！」

美春に……。

近付くことも許さない！！

学は男の顔面に、真上から拳を振り下ろした！

「学……」

いつからだっただらう……。

学の周りに、女の子の噂が立ち始めたのは……。

中1の夏……？秋くらい……？

顔はいいし、家柄も性格もいい。女の子には優しいし。小さな頃から、年上年下関係なくモテる奴だった。

でもそんな「モテる」って意味じゃなく、「遊んでる」って意味

で、女の子の噂が立つようになった。

最初、凄くショックだった……。

私は、今でもそうだけど、異性経験なんてないから、「そういう事」を色々な人と出来るっていう事が、信じられなかった。

心も体も、いつまでも「子供」じゃないんだ……。

「子供」のままではいられないんだ……。

そんな事実を、思い知らされた……。

特定の女の子と付き合う訳じゃなくて、その日その日の女の子と遊ぶようになった学。

幼い頃とは違う。一人で「大人」になっていく幼馴染……。

でも、私に対する態度はそのまま変わらなかった。

相変わらず、馬鹿なことやって、馬鹿なこと言っ
て、相変わらず、優しくて……。

何も変わらない。ずっと、そのままの学。

だから、私も、嫌いになれない……。

小さな頃からのまま。
学を好きなまま。

どんなに他の女の子と遊んでいようと。

誰かを抱いたその体で、私の所に来ようと……。

「美春」……私を呼ぶその声が、幼い頃のまま、優しいままで

ある限り。

私は、あなたを好きなまま……。

本当は嫌。本当は聞きたくない。

他の女の子の噂なんて。

学が、どんな女の子を抱いたかなんて。

「このスケベッ」って平気な顔をしていても、心の中は違つ気持ちでいっぱいになるから。

それでも……。

それでも、私……。

雨音が美春の耳に響く。

優しく。切なく。

「学……」

あなたが好き。

幼い頃から、あなただけが好き。

一生、この想いは通じないのかもしれないけど……。

「早く……来て……」

それでも私は、あなたが好き。

「私の所に……」

きっと、一生。

学が、好き……。

第22話 雨粒の調べ・美春の想い（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

長いことお休みを頂きました。すみません。

緊迫シーンから再開です。

喧嘩、負け知らずの学君。

刃物やら椅子やら、色々使われてピンチです。

最後の一撃で片付いた？さあ？どうでしょう？

雨を見詰めながら、切ない思いに心を迷わす美春ちゃん。

彼女の、切なく悲しいくらいの恋心は、幼い頃からずっとずっと
続いてきました。

今も。そして、これからもしばらく……。

自分の体を痛めつけられようと、美春ちゃんの為に決して引かな
い学君。

それを知らずに、彼を待ち続ける美春ちゃん。

次回は更に、絶体絶命の事態が……。

次回の更新は5月12日。

では、次回！

第23話 絶体絶命！・学の想い（前書き）

* 注意 *

今回は本文中に、喧嘩等の暴力シーンの表現が含まれて居ます。そういった表現が苦手な方、嫌いな方はご注意ください。

第23話 絶体絶命！・学の想い

「アイスコーヒー、冷えたかなーあ」

眩きながら、部屋の小型冷蔵庫を開ける。

学校から帰ってから手作りして、コーヒーポットに入れておいた。冷えていない訳もない。

「美春が作ってくれるアイスコーヒーは美味しいよな」学がそう言ってくるのが嬉しくて、「来る」と分かっている日は、つつい作っておいてしまう。

「待つてるよ」そうは言われたものの・・・。

「本当に、来るのかな」

学は、美春との約束を必ず守る男だ。しかし・・・。

美春は、カーテンを開いたままの窓に目をやった。

「学・・・」

強くなり始めた雨音が、彼女の心を何故か不安にさせる。

「ううぎゃあああっつー!!」

まるで獣の首を絞めたような声を上げ、サングラスの男は自分の顔を両手で押さえた！

両手の指の間から、赤い血がだらだらと流れ出している。

彼のトレードマークだったサングラスは、顔の上で粉々に砕け散っていた。

その破片が、目の周りを中心に顔中に突き刺さっている。

馬乗りになっていた学が男の上から離れると、男は顔を押さえたまま狭い店内の床を転げまわった。

真上から拳を振り下ろした学の手だって、無事ではない。大量ではないが、右手の関節がサングラスの破片で切れて血がにじんでいた。

「てめえらみたいな、薄汚ねえ奴らが・・・」
胸の痛みを堪え、ゆらりと立ち上がった学が、猟奇的な目を湛えたまま、立ち竦んで青白い顔をした翔太を睨み付ける。
「触って良い女じゃねえんだよ！あいつは！！」

美春は！

誰にも触れさせない！！

小さな頃から、俺が守ってきた！

そして、これからもずっと！

俺が守っていく！！

「二度とチヨロチヨロすんじゃねえ！！」

学は足がガタガタと震えて動けない翔太の胸倉を掴み上げ、真正面から殴りつけた！

翔太の体はそのまま吹き飛び、壁に打ち付けられたかと思うと、人形のようにズルズルと崩れる。

・・・これで、片付いたか・・・。

学が眉をしかめ、ハアツと息を吐いた瞬間！

「葉山君！危ない！！」

いきなり繭子の叫び声が聞こえた！

ドンツ！と何者かが学に体当たりをし、背中によしかかるような格好で止まっている。

背中に感じる、その人物の重さ・・・。

そして・・・。

わき腹をかする、

熱い、激痛。

「！」
危険を感じ取った学は、脚を後ろへと伸ばし、背中にもたれかかっていた人物を思い切り蹴り飛ばした！

その人物が床を転がり、カウンターに激突する！

それは、サングラスの男の前に片付いたと思っていた、アロハシヤツの男だった。ドラッグでやられてしまっている分、感覚にも異常が生じているのだろう。男は一度落とした飛び出しナイフを手に、何も考えずに、ただ体だけで学に飛びかかってきたのだ。

しかし……。

その、手にしていたナイフは。

深くはないものの、しっかりと学のわき腹に突き刺さった。

飛び散るように流れ始めた赤い血が、学の白いTシャツを真っ赤に染め始める。

わき腹の焼けるような痛みと、胸の痛み。

口の中に溜まってくる血をペツと吐き出すが、その動作だけでも息が詰まり、胸が痛む。

まいったな……。これじゃあ、夏休みにキャンプいけねーじゃん。

こんな時に考える事ではないが、まったく違う事でも考えていなければ、この痛みにはかり神経がいつてしまいそうだ。

「君つ……。！いつ、今！救急車呼ぶからねっ！！」

カウンターの中に居た女性の一人が、慌てて電話に手を伸ばすが、学は腕を伸ばしてそれを制した。

「ありがとう……。でも、呼ぶのは、警察だ……。こいつらが仲間割れして、喧嘩を始めた、って、言ってくれ……。」

喋るだけでも胸が痛み、力の入る腹筋を通してわき腹から血が流れ出しているのが分かる。

学は一步一步、床を踏みしめるように歩き出し、まだドアにしが

みついている繭子に笑いかけた。

「……早く……帰れ。……警察が、くるぞ……」

「……は……、はやま、くん、だいじょうぶ……?」

あまりのショックなシーンの連続に、繭子は言葉が出なくなってきた。

「ああ。生きてるよ……。俺も、さつさと、帰るさ……」

「救急車、呼んでもらおうよ……。刺されたんでしょ?」

「行かなきゃならないところが、あるからさ……」

そう言って笑い、少し強くなり始めた雨の中を、学は倒れないように一歩一歩、歩き出した。

店の前に停めてあったバイクに、手を付いて寄りかかる。

バイク……。乗れそうもねえな……。

恐らくかなりの振動が、肋骨に響くだろう。

学は諦めて、そのまま歩き出した。

救急車なんて、乗る訳にはいかねーんだよ。

行かなきゃならないんだ……。

「待ってるよ」って、言っちゃまったからな。

学。

学の脳裏に、美春の可愛らしい声と笑顔が浮かび上がる。

美春の笑顔を思い出して、学の口元がちょっとほころんだ。

美春……。

待ってるよ……。

今すぐ、お前のところに行くから。

一歩一歩、倒れないように歩く。

早く美春に会いたい。

そんな気持ちで足を早めるが、そんなに早足にはなっていないかったかもしれない。

ちよつとわき腹に手をやる。まだ熱いものが滲んでくる気配がある。

しかし、そのにじみ出てくる血は、強く降り続ける雨が洗い流していつてしまう。

もう！いつつも喧嘩ばかりしてえ！！

また、怒られちまうな……。

怒っているのに、それでも、とても心配そうな顔をしてくれる美春。

「大丈夫だ」って言ったら、安心するように笑ってくれる。

あつ、今日は、アイスコーヒー用意してくれてるかな……？

美春が淹れてくれるアイスコーヒーが、一番美味いんだよね……。

「美春……」

口から漏れる、愛おしい者の名前。

「……美春……」

愛してるよ……。

初めて会った、2歳の時から。ずっと……。

夜の暗闇の中、学のわき腹から流れ出る赤い血を、次々と雨が洗い流していく。

恐らく、肋骨はヒビが入ったか、折れてしまっているかしているのだろう。体に小さな振動があるたびに、胸に激痛が走る。

「み……はる……」

息が荒くなる。

脳裏から消えない、美春の笑顔だけが、学の足を進ませる。

ずっと俺が、守ってやるからな。

お前の心も体も、決して外から傷付けられないように・・・。
俺が、一生、お前を守ってやる・・・。

一生お前を守る、って、俺はお前と出会った時に決めたんだ。

愛してるよ。

こんな気持ちになれるのは、一生のうちで、お前だけだから。

「み・・・はる・・・」

たとえば、俺の体が、壊れようと・・・。

「今・・・会いに、行くから・・・」

待ってる・・・。

お前のところに、すぐ行くから。

第23話 絶体絶命！・学の想い（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

刺されるわ骨折られるわ、ポロポロです。

でも彼は、そんな体を引きずりながらも、美春ちゃんに会いに行きます。

彼は本当に、猟奇的なくらい、彼女が好きなんです。

彼女に自分の思いを伝える日まで、陰から彼女を守る、彼の戦いは続きます。

（伝えた後も・・・ですけどね。（笑））

ポロポロの体で、美春ちゃんに会いに向かう学君。

学君を待つ、美春ちゃん。

彼は無事、彼女の元へたどり着けるでしょうか？

次回はちょっと、辛くて甘い（？）二人をお届けします。

次回は5月17日更新。

では、次回！

第24話 会いに来て・会いに来たよ

「やっぱり来ないかー」

美春は諦めたように呟いて、見ていた雑誌をパタンと閉じた。

時刻は夜の11時。ベッドの上に座って壁に寄りかかり、来るのか来ないのか解らない学を待ち続けている。

何も言わないで突然来る時ならともかく、「待ってるよ」と言っただけは大体9時くらいまでには来る。こんな時間では、もう来ないだろう。

さつきから、何度そう思ったか解らない。

「今日は来ないよ。寝ちゃおう」何度自分にそう言い聞かせたか解らない。

「・・・もう少し、待ってよ・・・」

その度に、「学に会いたい美春」が、学を待とうと頑張る。

・・・「来る」って、いったもん・・・。

学、私のトコに来る、って。「待ってるよ」「って、いつもの命令口調で・・・。

学は、一度言った事は絶対に守ってくれる。何があっても守ってくれる。だから、きつと来るよ。

そう思い直し、再び雑誌を開く。

屋根に当たる雨音が、とても大きな音を立てていた。

目は雑誌を見ながら。しかし耳は、そんな雨音と、学が来る時に聞こえるであろうバイクのエンジン音を聞き逃さないように、ジッと外へ向けられていた。

カタン・・・。

不意に小さく聞こえた音に、美春は異常なまでに反応し、顔を上げた。

カタ・・・カタ・・・。

とても歯切れの悪い音。しかし、この、塀を登ってくるリズムと音は・・・。

カタン・・・。

学が、ベランダを登る音。

いつもと違って、随分とゆっくりしている音だ。しかも塀の横にバイクが停まる音がなかった。

もしかして、一回家に帰って、それから来たのかな？

しかし、どっちにしる体は濡れてしまっているだろう。そう思いベッドから飛び降りると、クローゼットの扉を開けて、下のケースから大判タオルを一枚引つ張り出した。

その手つきが妙に甲斐甲斐しく嬉しげに思えて、美春はちょっと赤くなった。

来ないだろう。と諦めようとしても、やっぱり学に会いたくて来る事を信じてしまう。

そして学は、どんな事が有っても、たとえ遊びに行つて盛り上がっていたとしても、美春との約束は守る。

それが・・・凄く嬉しい。

タオルを口元に当てて、ちよつと微笑む。嬉しさで自分自身の表情がほころんでしまっているのが分かった。

入ってきたらすぐにタオルをかけて上げられるように、窓のところで待っていてよう。

そう思い、振り返った時だった！

ガシャンッ！！

まるでガラス窓が割れてしまうのではないかというくらいの音。そんな乱暴な音を立てて窓が開く。そして・・・。

いきなりその窓から、身を投げ出すように中へ倒れこんできた人物を見て、一瞬にして美春の顔は青ざめ、息を呑み、手にしていたタオルを落とした。

「学?!」

「……み……はる……」

無我夢中で美春が学の傍へ駆け寄った時、かすかに呟く学の声が聞こえた。

「どうしたの!学!びしょぬれじゃない!!」

学に触れようとして、美春はハッと手を止めた。

うつ伏せに倒れこんできた学。全身はまるで川にでも落ちたかのようにびしょ濡れだ。外の塀とベランダを越えてくるのだから、少しは濡れて来るだろうとは思っていたが、これはどう見ても長い事、雨の中に居た証拠だ。

「……まつ……!」

学のびしょ濡れの全身を見ていた美春は、体をビクツと震わせながら「ある部分」に目を留めた。

学のわき腹の辺りに赤い物が滲んでいる。雨のせいで少しずつ流されていたソレは、雨が当たらなくなった事もあり、少しずつ赤い染みを大きく広げていった。

「血……?学?!喧嘩したの?!」

「……ちよつと、ドジった……。刺されたらしい……」

らしい?……らしい、って……。何言ってるの、ばかっ!

思わず前から上半身を起こそうと手を掛けるが、その瞬間、学の体が跳ねるように震え、驚いて手を離れた。

しかし、少し持ち上がっていた上半身と頭が、美春の膝の上に乗る、学はちよつと安心したように笑う。

「おどろかせて……ごめんな……。多分、肋骨にイッてんだ……。それにしても、美春の膝、きもちいいな……」

「ばつ、ばかつ！何言ってるの！・・・喧嘩ばかりしてえつつ。何でこんな事になっちゃったのつつ。刺された、だの、折られた、だのつつ。いくら喧嘩に強い、って言ったって限度があるでしょう！分かんないのつつ?!！」

すると学は、感覚がなくなりそうな震える腕を伸ばし、美春の腰をキュツと抱いた。こんな場合だというのに、美春の胸がドキッと鳴る。

「・・・いいんだ・・・」

守れたから・・・。

「あいつを・・・大事な、女、守れたから・・・」
お前を、守れたから。

「俺は、いいんだ・・・」

俺は、それでいい・・・。

「学？」

・・・あいつ、って、誰

大事な・・・女、って・・・。

美春の心の中に、不安のような疑問が湧き上がる。しかし、学が苦しそうに呻いて身を縮めたのを見て、その思いは吹き飛んだ。

「学?!大丈夫?!学っ!・・・待ってて、今、救急車を呼んでもらうから!」

美春が立ち上がるうとして、学の体を床に下ろそうとするが、学はそんな美春の腕を掴んだ。

「いい・・・。呼ぶな・・・」

「何言ってるのよ!こんな・・・こんな体で・・・!」

私の所になんか来て・・・。

学が「待ってる」って言うから、待っていた。

学に、凄く会いたかった。

そして、学は来た。嬉しはずなのに、美春の瞳からは涙がぼろぼろと流れ始める。

「……こんな体になっても、私の所に来てくれた……。」

「もう、少し……。このままで、いさせてくれ……。」

学が、美春の膝の上で、安心するように目を閉じる。

「もう少し……。お前の傍に……。」

美春の優しい香りが学を包む。

それだけで学は、今にも気を失ってしまいそうなこの体の痛みなど、忘れてしまえるような気がした。

「……お前が居れば……。」

俺は、何だつてできる……。」

何にだつて、耐えられる……。」

美春。

「……みはるの、ひざ……。すげー、きもちいい……。」

だから俺は、お前を守るよ。

たとえ、俺の体が、壊れても……。」

「学……。？ダメだよ……。死んじゃ……。ダメだよ」

こんな弱った学は、初めて見る。

美春は「もしかしたら」の不安に、涙をこぼしながら声を震わせた。

美春が泣いている。それを感じ取った学は、体中の力を振り絞り少し体を上げて、涙が流れ落ちる美春の頬に手を当てた。

「……。ば……。か……。泣くな……。そんな顔、したら……。おそつちまうぞ……。」

「やれるモンならやってみなさいよ……。そんな体力、残って無いくせに……。」

学がフツと笑う。

「よし……かくご、しとけ……よ……」

学の手が、美春の頬から落ちる。それと同時に、頑張つて上げていた体も再び美春の膝の上に落ちた。

「……学？……学！……」

学の様子がおかしい。美春は少し大きな声で呼びかけた。

しかし、学は応えない。

「学？……」

学の体は動かない。美春の膝にもたれたまま、彼の体はピクリともしなかった。

「学！しっかりして……学……」

いや……。

いや！学！

死なないで……！

「学……」

雨の音が、大きく屋根を打ち付ける。

開けっ放しの窓から雨が入り込み、部屋の中を濡らす。

「お気に入りなんだからね！」と学を叱った白いラグも、雨と学の血で、その白い色を失っていった。

「まなぶうつつ……」

そして美春は、自分自身を見失いそうなほど動揺し始めていた。

第24話 会いに来て・会いに来たよ（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

学君、会いに来ました。美春ちゃん、待っていました。

でも学君は、美春ちゃんの膝の上で意識を失います。

自分を懸けて、美春ちゃんの身を守りぬいた学君。

彼の怪我は大丈夫？

今回は、病室で彼を見守り続ける健気な美春ちゃんをお届けします。

ただ、学君がここまでやられてしまったこの状況。

・・・黙っていられない人が、居るみたいですよ・・・。

今回は5月21日更新。

では、次回！

第25話 病室・学が目を覚ますまで

「美春ちゃん」

病室へ入ってきたさくらは、学が眠るベッドの傍らの椅子に座ったままジツとして動かない美春に声を掛けた。

どんな状況であろうと、名前を呼ばれば「はい」と返事を返してくれる礼儀正しい少女。

しかし、今の美春にそんな心の余裕はない。

首をうなだれて、ジツと座り込んだまま、点滴の為に布団の上に出された学の右手を両手で軽く握り締めている。

栗色の髪が顔の横にかかり、その表情を隠してしまっているが、肩を落としてうなだれた様子から、かなり憔悴しているのが解かる。

「もう、お家のほうへお帰りなさい。眠っていないでしょ？休まなければ駄目よ。すぐに車を回させるから」

美春の頭を撫でながら顔を覗き込もうとするが、美春は首を強く左右に振った。

「・・・ここに、居ます。・・・学が、目を覚ますまで・・・」

このままでは駄目だ！

そう思った美春は、動かなくなった学の頭を膝から下ろし、部屋のドアを開いて、1階に居る父と母に向かって叫んだ！

「父さん！母さん！助けてえー！」

尋常ではない娘の叫び声に、両親が驚かない訳がない。

リビングでくつろいでいた美春の両親は、何事かと、血相を変えて飛び出してきた！

「たすけてえー！！学が死んじゃうっ！！」

半狂乱で叫ぶ美春。その凄まじい剣幕に、眠りかけていた弟までもが起き出してしまったほどだ。

美春の部屋で倒れる学を見て驚いた美春の父、大介は、救急車を呼び、すぐに学の家へ連絡を入れた。

葉山家と光野家は、お隣さんであると同時に、父親同士が幼馴染で、おまけに大介は葉山製薬本社の研究室室長だ。そんな大介からの連絡に、学の父の一はすぐに葉山家かかり付けの病院に連絡を入れ、医師の体勢を整えさせた。

そして救急車が来た時、美春もそのまま乗り込んだのだ。

刺し傷は思ったより深くはなかったが、長い事そのまま動いていたので出血が多く、少々輸血に時間がかかった。

肋骨は、やはり1本折れていたようだが、肺などの内臓に刺さるような事もなく、その場でとどまってくれているような状態だった。手術も万事上手くいき、病室へ入った時すでに外は白々とした夜明けを迎えていた。

「学は、多分まだ目を覚まさないわ。お昼頃・・・ううん、もしかしたら今日一日眠りっぱなしかも知れないわ。美春ちゃんが疲れちゃう。一度家へ帰っておやすみなさいな」

さくらが気遣うように声を掛けるが、美春は恐る恐るさくらを見上げ、泣き続けて真っ赤になった目と泣き声で頼み込んだ。

「学が・・・目を覚ますまで・・・いる・・・いさせて。おばさま・・・」

お気に入りの女の子に、こんな顔でこんな切ない声を出されては、さくらも堪ったものではない。

思わず美春の頭をキュツと抱き締めて、まるで子犬の頭を撫でるように、思いつきり撫でた。

「じゃあ、何か飲み物でも持ってきてあげて。ここでもいいから少し一息つきましよう？ねっ？」

「……はい……」

美春の返事を確認して、さくらが病室を出る。

「……困ったものね……」

病室を出てから、ドアの前でさくらは息を吐きながら呟いた。

……学つてばっつ！！美春ちゃんにあんな顔させてえっつ！！

わがままを通す美春より、それをさせている学に怒っている。

本来ならば、怪我をした息子を気遣ってやらなければならぬところだと思っただが……。さくらの「美春好き」にも、少々困ったものだ。

「さくら」

そんなさくらの傍に、今まで医者と話をしていた一が歩み寄ってきた。

「美春ちゃんは？帰らせるか？家から車を回させるか？」

「それが……学の傍に居る。って……。泣きそうな顔で言われちゃって……」

「そうか……」

一は腕を組んで、右手を顎の辺りにあて、何かを考える仕草をする。

「お医者様は、何ておっしゃっているの？」

「ん？ああ、まあ、学の体力次第ではあるが、入院で夏休みが潰れるのは間違いないな」

「そう……。可哀想だけど、学は嬉しいかもね」

「何故？」

「だって、絶対美春ちゃんが毎日来るでしょ？」

一は「なるほど」というように頷き、それから何気なくさくらに訊く。

「さくら。今日は午前中、何か大きな予定はあったかな？」

さくらは妻であるが、一の秘書も務めている。訊かれた瞬間、頭

の中を今日のスケジュールが駆け抜けた。

「午前中は、開発部から上がってきている書類に目を通してもらいたいくらいかしら。アポが入っているのは午後だし」

「そうか。じゃあ、午前中の早いうちなのだが、ちよっと用事が出来たので行つて来る」

「あら？プライベートのご用？」

ちよっと冷やかすように首を傾げて、さくらがーを見上げると、彼はニヤツと笑つてさくらの額をツンツと突つついた。

「大事な一人息子をここまでされて、黙っている親は居ないからな」

。どれだけ涙が出たのだろう・・・。

本当に、目が重い・・・。

手術はうまくいったし、別に学が死んでしまった訳でもない。

あとは目を覚ますのを待つだけ。別にもう泣く必要もないのに・・・。

なのに、学の顔を見ていると、涙が浮かんでくる。

「学・・・」

早く目を覚まして・・・。「大丈夫だ。心配するな」って言つて。じゃないと私、安心できないよお。

「美春の膝、すげー気持ちいい・・・」って言つてたでしょ？膝枕くらい、ナンボでもしてあげるよ。目を開けて「大丈夫」って言うてくれたら、もう、一日中だつてしてあげるよお。

もう少し・・・お前の傍に・・・。

いくらでも居てあげる。

学が「来るな」って言つたつて、毎日来るよ。

だつて学、あんな体になりながら、私のところに来てくれたじゃない。

「待つてるよ」って言った約束、守ってくれたじゃない。だから、早く目を開けて。

いっつもみたいに「美春」って呼んでよ。

「あれして」「これして」って、ワガママ言いなさいよお。そうしたら、「病人がワガママ言うんじゃない！」って言って、ひっぱたいてやるからあ……。

だいたい、学がこんな怪我しちゃったら、皆で楽しみにしていたキャンプ、行けないじゃないの。学が「責任者」だから、学校の許可だって下りたようなモンなのに。

私……、「キャンプに向けての買い物なんてない！」って言ったけど、実は楽しみで楽しみで、学がよく「美春はピンクが似合う」とか、「脚が綺麗」とか「胸の形いいよな」とか言ってくれるの真に受けて、ピンクのショートパンツとか、ちよつと体の線が出そうなTシャツとか、キャンプ用に買ったんだからね！

学が言った通り、ブラジャーまで新調しちゃったのに……。どうしてくれるのよお……。

……別に、何か期待して、じゃないからねっつ！！

美春は心の中で、お願いをしたり文句を言ったり自分につっ込んだりしながら、ちよつと赤くなつてしまった。

キャンプなんて、行けなくてもいい……。

わがまま言つても、ひっぱたかないからあ……。

「目を開けて……学……」

そう呟いて学の顔を見ると、また涙が出てきた。

泣いてばかりいたら、さくらに心配をかけてしまう。そう思い、浮かんだ涙をキュツと拭つた時だった。

「……あんまり泣いたら……、でっかい目、溶けるぞ……」

小さな声。

しかしそれは、間違いなく美春が待ち望んだ声。

点滴を打つ学の右手を握る美春の手が、反対にキュッと包むように握られる。

「・・・あ・・・」

握られた手の優しさに、再び涙が出そうになりながら、美春は顔を上げた。

朝日が入り始めた病室内。

その光に照らされる中で、薄く目を開き、口元を上げ、優しくに微笑む人。

「みはる・・・」

美春が待ち望んだ声が、待ち望んだ言葉を放った。

「・・・学っ！」

第25話 病室・学が目を覚ますまで（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

美春ちゃんは、健気ですねえ・・・。

これだもの、さくらさんが可愛がる気持ちわかります。

その気持ちに伝えるように、学君が目を覚めます。

彼は美春ちゃんの気持ちに伝えるためなら、たとえ瀕死の状態であろうと復活しますよ！（何モンだ・・・）

さて、「親として黙っている訳にはいかない」という一さんですが？

何をするつもりなのでしょう？

次回は、少々、玉紀の趣味が入った展開になります。（笑）

「完璧な愛」のほうでも、噂にはなるものの、あまり表に出てこない一さんをお届け。

次回は5月27日更新。

では、次回！！

第26話 親として・一の強攻

「なんだあ、てめえはあ！」

せつかく訪ねて来たというのに、この出迎えは無いだろう？

来客者へのマナーがなつとらんな。この事務所は。

一は心の中で溜息をついた。

午前9時ジャスト。本当はもつと早く来たかったのだが、会社のほうへ至急の仕事が入っていないか確認してから、一度家へ戻り、プライベート用の自家用車に乗って来たので少々時間がかかってしまった。

目的の事務所には、最近作っただばかりのような真新しい看板。

「星龍会」という、黒字に金の筆文字。

・・・趣味が悪い……。一は少々眉をひそめる。

黒いBMWから降りて事務所の入り口へ向かう。その時、外で煙草を吸っていた数人の男たちが寄ってきて、その中の一人がその台詞を吐いたのだ。

「会長は来ているか？社長と言った方が良いのか？」

「なんだとお？」

どこか体に異常があるのではないだろうか。そう思ってしまうくらい、体を揺らしながら、上から下まで一を眺める男。一は185以上の長身だ。その全身を眺めるとあれば、おかしいくらいに首の動きも大きい。

言葉が通じないのか？話にならん。一は肩で息をついて、男を相手にせずそのまま事務所のドアを押した。

「てっ、てめえ！待ちやがれ！」

自分が答えなかったから相手にされなかっただけなのだが、このテの人間は、目を付けた相手が何をやっても腹を立てる。

入り口で溜まっていた男たちは、そのまま一を追うように事務所の中へ飛び込んでいった。

「駄目だねえ。返事はきちんとしないと」

その男は、一が降りたBMWの助手席に座ったままクスクスと笑った。

プライバシーガラスのせいでも、外から男が乗っているのは確認できなかつただろう。

「返事が遅い。って言うのは、一坊ちゃんが嫌っている行為のひとつだしねえ……」

かけている眼鏡の下に、右手の親指を当てクイツと上げる。

「ご指定された15分間、動きませんが……。下手な事をして私の仕事を増やさないで下さいよ……」

一人楽しそうに呟く男のスーツの襟元には、小さな弁護士バッジが輝いていた。

「バカ……。本当にばかあ……」

今日、何回目だろう。この言葉を言われるのは。

ベッドのリクライニングを少し上げて、楽な体勢になりながら、学は自分にそんな言葉を吐き続ける美春を見て苦笑いをする。

朝日と美春の泣き顔に誘われるように目を覚ましてから数時間。処置や検査など色々あったが、9時を過ぎてやっと落ち着いた。

本当ならば今日はまだ学校がある。明日は1学期の修了式。

しかし美春は、家へ帰ろうとも学校へ行こうともしない。ずっと学の傍で「ばかあ」「ばかあ」と言い続けていた。

「美春。バカ、って言うほうがバカだって言葉知ってるか？」

「何、小学生みたいな事言ってるのよお。バカだからバカだって言ってるのっ」

「どこがバカなんだよ」

「どこの世界にそんな大怪我して、雨の中フラフラ歩いてる人がい

るのよ」

「ここに居る」

学がニコツとして自分を指差す。もう一度「バカッ！」と言ってやるうかと思っただが、その「ニコツ」が自分の好きな笑顔だったので、美春は言うのをやめた。

「だいたいつ、この怪我のせいで夏休み中ずっと入院だつて言うじやないのっ。これじゃあキャンプも中止よっ。学のせいだからね」

「そうだよなあー。俺、すっげー、田島に恨み言いわれそっ」

そう言うわりに、学の口調に申し訳なさはない。

「皆そうだけど、涼香なんて何でもない振りして凄く楽しみにしてたみたいなんだから。アウトドア的なことするの初めてだ、って言うて」

いや、多分彼女が楽しみだった理由はそれじゃない。

それに気付いている学は、信を思い出しニヤツとした。

「まっ、個室だし、部屋も広いし、お坊ちゃんに不自由はないでしょうけどね」

美春は小さく溜息をつきながら、部屋の中を見回した。

一見ホテルの部屋のような、特別室。あまり病室という感じはしない。

「まっ、皆でお見舞いには来るわよ」

「美春は毎日来るだろ？」

「まっ・・・毎日っっ？」

「何？来ないの？」

まるで「来るに決まっている」という口調。美春は驚く振りをするものの、自分自身毎日来るつもりだったので、特に言い返さないが・・・。

「しょうがないなあ。来てあげるよっ。毎日」

悔しいので、ちよっと怒ったように言い返した。

「でも、私が出るんだから、病室に女の子連れ込んだりしないでよねっ」

「こんな体で何が出来る。腰一振りした瞬間に傷口が開くぞ」
・・・リアルな言い方やめてよ・・・。ちょっと赤くなってムツと
している美春に、学は優しく微笑みかける。

「美春が来てくれるんだ。お前の顔見てりゃ充分だよ」

美春はドキツとした。ついでに更に顔が赤くなってしまふ。

「お前の顔だけで、充分いいオカズになるし」

ガタンツツ！！椅子から勢い良く立ち上がり、サツと手を振り上げひっぱたく体勢を取った美春を、今回はさすがに学も慌てて止めた。

「までっ！美春っ！今ひっぱたかれたら、確実に骨に響くっつ！！」

それもそうか・・・。美春はムツとして赤くなったまま、椅子にストンツと座った。

「なあに？楽しそうね」

クスクス笑いながら、病室へ入ってきたのはさくらだ。手にちよつと大きめの白い紙袋を持っている。それを美春の膝に置いて、ニコツと笑う。

「はい、美春ちゃん。サンドイッチと紅茶。ウチのシェフに作らせたから美味しいわよ」

「わーっ、有難うございますっ」

美春は素直に喜ぶ。そう言われると、ホツとしたせいか、お腹がすいている事に気付いた。

「母さん、会社はいいんですか？俺なら、もう大丈夫ですから。美春もいてくれるし」

9時を過ぎている。本来ならとくに会社にいる時間だ。

「あら？美春ちゃんと二人つきりになりたいからって、おじゃまにしないでちょうだいっ」

「そういう意味じゃないですよ」

そう言いつつも、少し、そんな気持ちも入ったかもしれない。と思う。

さくらは美春の横に椅子を引いてきて座ると、腕時計に目を走ら

せる。

「あと30分くらいかしらね。お父様がね、ちよつと私用でお出かけなのよ。終わったら迎えに来てくれる予定なの」

「珍しいですね。平日の朝に」

さくらは「何気ないこと」を話すように、ニコツと笑った。

「親として。話をしなければならぬ事があるのですつて」

とてつもなく険悪な雰囲気、その部屋の中に流れていた。

星龍会の事務所の中。入ってすぐのスペースは、ここへ出入りする者達のたむろするスペースなのだろう。入ってすぐ、テーブルや椅子、ソファなどに、どう見ても真つ当なサラリーマンではない男達がちらほらと見える。

その奥に一段上がった和室があり、そこに置かれた、これまた一言に言わせると「趣味が悪い」大理石で出来たデスクに、一人の男が腰掛けていた。

「・・・葉山製薬の?・・・社長サンかい・・・」

一が無言でデスクの上を滑らせた名刺を見て、星龍会の会長である星野が、少々嫌そうに呟いた。

「で?その『社長様』が何の用だ。あんたんところの『よい薬』に紛れて、ウチの『悪い薬』も売ってくれとでもいうのかい?」

ちよつとからかう口調。周りを固める「同種類」の男達が馬鹿にするように笑い出す。

「昨夜。お宅の息子と仲間が、ウチの息子とやりあったらしくてね」
からかいも嘲笑も気に留めず一がそう言つと、星野が答える代わりに、一の後ろに立っている男の一人がヤジを飛ばした。

「なんだ?若サンの取り巻きに殺^やられてもしたのか?!おもしれえなあ!それで『パパ』が文句言いにきてんのか・・・よ・・・、
っひいつっ!!」

男の台詞は最後まででは続かなかった。

台詞の途中で素早く振り返った一は、ヤジを飛ばす男の隣に立つ男が手に持っていた短刀を、本人も気付かない速さで引き抜くと、何のためらいもなくヤジを飛ばす男の足の甲へ一気に突き刺したのだ！

場の空気が、固まるように張り詰めた。

「・・・ひ・・・つつ・・・」

男は怯えた声を上げながら、ぺたんと座り込む。

男の足に突き刺された短刀。

足の甲に突き刺されたかと思われたソレは、見事なまでに足の指と指の間を通り、男が履くサンダルと下の畳を貫いていた。

たった一瞬で標的を定めた鋭さに、冷やかしのつもりで後ろを固めていた男達が一気に引く。

「私は、会長と話をしている・・・外野が口を出す権限は無い」

短刀から手を離し、スツと立ち上がって、一は今にも噛み付きそうな鋭い目で周囲を一瞥した。

第26話 親として・一の強攻（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

やっぱり彼は、学君のパパですので……。基本的に「こういう面」も似ていたりします。（笑）

ただ、「完璧な愛」のほうで、彼はここまで荒い事はしません。

あつちでは「仕事に情熱を注ぎ、家族を大切にす、理想の父親」と「何があつても妻に惜しみない愛情を注ぎ続ける理想の夫」をやつて頂いていますので。（むちゃくちや玉紀の趣味丸出し（笑））最初の方に出てきた、BMWと一緒に乗ってきていた人。ちよつとチエックです。

次回、ちゃんと出てきますが……。

話をつけに来た一さん。

「父親として」彼は、学君のために行動します。

それだけじゃ何なので、メインの二人にも病室で「プチらぶらぶ」してもらいますけどね。（笑）

架橋に入っていますのでラストも近いです。

ラストまで、出来るだけ早いペースで更新したいなー。と想っているのですが……。

とりあえず、「更新情報」チェックして下さい。

サクサク行こうと思っていますので。

では、次回！

第27話 弁護士・もう一人の強面

「ま、まあ・・・ちよつと待ってくれよ。葉山さん」

星野は少々引きつった笑顔を浮かべながら、胸の前で両手を振った。

ただの「坊ちゃん社長」と馬鹿にしていた一の、いきなりの強攻。その堂々とした態度と眼光の鋭さに、もうヤジを飛ばす者もない。

「あつ・・・あんたんとこの息子も怪我をしたのかもしいないが、ウチのモンだつて、ただじゃ済んでなかったんだ。一人は耳がちぎれ、一人は薬が切れても正気に戻れない。一人は顔中ガラスの破片で包帯だらけ。ウチの息子にいたつては、鼻の骨が折れていた有様だ。それを、あんたのトコの息子が一人でやったとは・・・」

やったとは思えない。そう言おうとした星野は、一の顔を見て考え直した。

まともに目が見られない。目を見たら、その威圧感に押し潰されてしまいそうだ。

息子の翔太が言っていた。「相手は一人だった」と。

たった一人で、5人を片付けた高校生。信じられない話だが、「この男」の子供なら。

星野は昔、まだ若かった頃を思い出した。

昔噂になった・・・ある事件。

あの時、その事件を一人でもみ消したのが確か・・・「葉山」。

「お宅のところの子息や、その取り巻き達がどうなったかなど、私には何の興味もないですよ」

話し方は、あくまで丁寧。しかし口調は、話しかけられているほうが震え上がってしまうほどの冷たさを放つ。

「私は、私の息子に関する事だけで、あなたに忠告に来た」

「忠告？」

「今後、金輪際、何があるかと、うちの息子や葉山の関係者に手出しはしない、と、約束してもらいたい」

デスクに両手を付き、ちよつと身を屈め星野を覗き込む。

一を見ないようにはしていたのだが、顔を覗き込まれて嫌でも目が合ってしまった、その無感情な瞳の冷たさに身震いした。

「それを約束できるなら。・・・あなたの仕事やあなた自身にも、私は何の手出しもしない・・・。今回の事も、公にはしません」

場の空気は、よりいっそう緊張し、張り詰めた。

周りで見ている者達は誰も動けない。口出しなどもつてのほか。

たかが一企業の「坊ちゃん社長」。そう誰もが思っていたのに。

この場の逆らい難い、身を切られそうな雰囲気を作り出しているのは、その「坊ちゃん社長」なのだ。

星野の額を冷や汗が流れ、喉の奥が張り付いてしまうほどに、体中の神経が興奮する。

しかし、その緊張をすべて壊してしまうかのような穏やかな声が、出入り口から聞こえてきた。

「話はずきましたか？社長」

その場にいた男達が、一斉に振り返る。

振り返らないのは、それが誰だか知っている一のみ。

「15分。お待ちしました。よろしかったですか？」

ニコニコした表情で入ってきたのは、細身で背の高い、きつちりとした印象の男性。

年のころ、40代半ばくらいだろうか？

ふち無し眼鏡の奥の瞳が一見優しそうな印象を与えるが、その瞳に騙されると偉い目に遭いそうだ。

少々重そうなビジネスバックを提げた男性のスーツの襟元には、小さな弁護士バッヂが輝いている。

男性は、事務所の人間が固まっている一角で、まだ腰が抜けたように座り込んでいる男を見つけ、「やれやれ、やっぱりやったか」と苦笑いをした。

「よろしいですか？社長？」

男性はもう一度問いかけ、一の横に立つ。

一は男性の顔を見ると、満足そうに笑い、デスクから手を離して背筋を伸ばした。

「ああ。充分だ。遅いくらいだよ。先生」

「おや？キツチリ15分でしたよ」

「それは失礼。では私は車で待つていよう。何分かかる？」

一の問い掛けに、男性は何一つ考える事は無い。

「5分で。終わります」

その返事の早さに、これ以上は無く満足そうな表情を残し、一は踵きびすを返した。

出入り口へ向かう一を避けるように、男達が道を開ける。

「さて・・・」

一が出て行ったのを確認して、男性は名刺入れから一枚名刺を引き出し、星野の前に滑らせた。

星野が名刺を手に取り、顔色を変える。

田島法律事務所 所長 田島信悟

「葉山関係の顧問弁護士を務めております。葉山様のご子息の件で、ここからは私がお話を進めさせていただきますが、よろしいですね？」
優しく笑い続ける瞳。しかしそれは、決して本当に「優しさ」から出されている笑みではなかった。

「おいしーい」

言葉の最後にハートマークが付きそうな笑顔。

葉山家シエフお手製のサンドイッチをつまみながら、笑顔を見せる美春に見惚れているのは学だけではない。

「本当に美春ちゃんは可愛い顔で食べるわねえ」

さつきから美春の頭をクリクリ撫で続けているのは、言わずと知れたさくらだ。

彼女はもう、美春が可愛くて可愛くてしょうがない。

「だって、本当に美味しいですよ。いいなー、学つ。こんな美味しい物毎日食べられて」

病室にあるソファに座りながら、目の前に置いてある紅茶ポットから注いだばかりの、湯気が立つ紅茶が入ったプラカップを手に取り、口を付ける。

「あら。じゃあ、ウチに住めば？毎日一緒に食事できるわよ」

さくらは「ある意味」を込めて言うが、もちろん美春は気付かない。

「食事目当てにお隣で居候。って訳にはいかないですよ。父さんと母さんに『なにやってんの』って怒られちゃう」

ちっとも「その意味」に気付いてくれない美春を寂しそうに見て、さくらはキツと我息子を睨むように見た。

学つっ！！あなた！しっかり美春ちゃん捉まえとくのよっっ！！
！・・・あつ、じゃあ、私、ここに居ないほうがいいかしら・・・
などと、二人のお邪魔にならないようにとは思うものの、美春の可愛らしさに、ついつい長居をしてしまうさくらだった。

「学。寝なくて大丈夫？」

一から電話が入ったらしく、さくらが病室の外に出てしまったの

で、とりあえず病室で二人つきり。

軽く食事を終え、再び学の傍らに椅子を持ってきて座った美春は、少々気遣うように声を掛けた。

「せっかくお前が居るのに。寝たaramottたいねーよ」

美春はドキツとする。

「・・・もう、体が弱ってても「これ」だもんね。「ここまでくると、天性」よね。この「たらし」っぷりは。

「美春こそ、眠いんじゃないの？どうせ寝ないで付いていてくれたんだろ？」

再びドキツ。何で解かるのお・・・。

「散々泣いたし。腹いっぱいにもなったるうし」
優しい目で、ジツと美春を見詰める。

美春は胸がドキドキしているついでに、顔まで赤くなってきた。

「一睡もしないで・・・。有難うな。美春」
もう・・・。

やめてよお・・・。

そんな目で見ないでよ。

ドキドキするよ。恥ずかしいよ。

学の優しい雰囲気にながホンワリして、本当に体も目もトロントツとしてくる。

・・・しかし、その後が悪かった。

学は自分の横の布団をめくると、片手を広げる。

「ほらっ。美春。ベッドに入れよ。一緒に寝よっ。抱っこしてあげるから」

パシーーンッ！！

「いてーっっっ！！！！」

あら？何か「悪さ」でもしたのかしら？

病室の外のフロアで、愛しの夫と携帯電話で話をしていたさくらは、病室内からかすかに聞こえた息子の叫び声に、思わず吹き出しそうになった。

第27話 弁護士・もう一人の強面（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

2日連続更新、でちよつと頑張りました。（笑）

今回出てきた弁護士さん。もうお分かりですよ。

涼香ちゃんに一生懸命な、あの信君の、お父さんです。

信君は「あんな感じ」ですが、お父さんは「やり手さん」ですよ。

次回も、学君パパ、信君パパ、出ずっぱりです。（趣味かっつ？）
（笑）

それにしても、学君と美春ちゃんの「プチらぶらぶ」は書いてて楽しいですっつ。

・・・じれったいですけどね。う~~~~。キスのひとつもさせれやしないいい・・・。

もちろん次回も「プチらぶらぶ」してもらいます。

では、次回！！

第28話 二大勢力・逆らえない男達

「傷害と殺人未遂……。ってところですか」

田島信悟は、少々楽しそうな口調で言いながら、右手の親指でふち無し眼鏡の下をクイツと上げた。

「息子さんは未成年のようですが、ご希望なら数年、この空の下に出てこれられないような場所にお入れすることも可能ですし、他の方々も調べれば知られたくない事がボロボロとこぼれ出て来るような体でしょう。……そうですね、皆さん20代のようなので、私と同じくらいの歳になるまで太陽の下に出られないようにする事も出来ますよ」

好き勝手な事を楽しそうに言う弁護士に、星野はムツとする。

「ウチのモン達や息子だつて、むこうにやられてんだ！こつちばつかり、そんな事出来る訳がねえだろう！！」

「出来ますよ」

田島は間髪入れず言い返した。

「私が、『してさしあげる』と言っているんです」

星野の言葉は止まった。

田島の目は笑っている。しかし、表情は笑っていない。

田島法律事務所の田島信悟。

企業絡みや通常の事件なども扱うが、星野達のような世界でもちよつとした有名人だ。その名は知れ渡っている。

ヤツに睨まれたら、やった事以上の罪状を突きつけられる・
。。。。と。

「不戦敗の男」。彼は、弁護士になってから「敗訴」した事が無い。

星野はむしゃくしゃする気持ちをぶつけるように、ガンツ！とデスクを叩く！周囲にいた者は驚くが、田島は微動だにしない。

デスクは大理石。ハッキリ言っただけは手は痛い。その手を更にデスクに押し付けて、星野は大きく溜息をついた。

「そういう事にならない為の条件は、社長も言っていましたか・・・」

星野の様子など一切気にしない。田島は淡々と「仕事」を続ける。

「この先、葉山の間人、関係者。一切手出しをしない。それだけです」

「・・・」

「簡単でしょう？」

田島は、デスクに乗せられた自分の手だけをジッと見詰める星野を見下ろした。そのまま黙って答えを待つ。

「もし・・・出したら？」

「約束を破る。という行為は、私の依頼主が最高に嫌う行為ですからね。・・・あなたは太陽の下に立てなくなる。そうお考え下さって結構です」

デスクの上の手が、熱を持って汗ばんでくる。その手を星野はグッと握り、彼らしくない消えそうな声で答えた。

「・・・分かった・・・」

その答えに事務所中がザワ付く。まさか会長自ら、こんなにアッサリと条件を飲むとは思っていなかったのだろう。

「今後一切、葉山とその関係者にや、手出しはさせねえ・・・」

田島は口元で笑うと、軽く頭を下げる。

「・・・あなたは・・・頭が良い。利口な選択ですよ」

そう言っただけを返し、出入口口へと歩き出した。

誓約書などは作らない。

そんなものは必要ないほどに、星野の体にこの「約束」が刻み込まれた事を、田島は確信した。

「5分10秒」

助手席に乗り込んできた田島を横目で見ながら、一は今まで「最愛の妻」と話中だった携帯を切り、そう言った。

「10秒過ぎましたよ。先生」

「10秒は、事務所からここまで歩いてくる時間だと思って下さいよ。一坊ちゃん」

田島は笑いながら助手席へ座った。今の彼は「本当に」笑っている。それにつられるように、一も笑った。

「『坊ちゃん』は、いい加減にやめて下さいよ。先生」

「私は小さな頃から父親の横に立って、あなたを見てきたんです。私にとっては一生『坊ちゃん』ですよ」

一は「やれやれ」と苦笑いをして車のエンジンを掛けた。

田島は「5分」で笑顔のまま戻ってきた。それだけで「仕事」は上手くいったのだろうと察しがつく。

黒いBMWが、滑るように事務所の前から走り出した。

「ウチの息子、学君が入院したと聞いたらガツカリしますよ。何か夏休みに行くって言うっていたキャンプを物凄く楽しみにしていませんか。・・・学君があれば、多分中止でしょうから」

「ああ。キャンプですか？学も結構楽しみにしていたみたいですよ」「何か特別な事でもあるのですかね？亡くなった妻の仏壇の前で、毎日ぶつぶつ呟いているんですよ。・・・『うまくいきますように』とか何とか・・・」

「まっ、ウチの学と同じで、好きな女の子でも一緒に行く予定だったのではないでしょうかね？」

一が軽く声を立てて笑う。

行動表や予定表など、一応学校に提出するために、異常に張り切

って作っていたのを一は知っている。

「あのくらの年頃は、『下心』の塊ですしね。無理もないですよ」「へー……。一坊ちゃんもそうでしたか？」

田島に「意外」というような口調で訊かれ、一は運転中だということに視線を上に向けてちよっと考え込んだ。

「私が『下心』を自分で感じるようになったのは、妻と知り合ってからなので……。16くらいの時にはあまり覚えがありませんねえ……」

そんな事を真面目に答える一に、「そうだ、この人はこういう人だった」と田島は苦笑いをした。

「何であんな弁護士言うこと、きくんですか?! 会長!!」

田島が出て行った後の事務所で、険しい顔で考え込む星野に数人が詰め寄った。

「……お前ら。情報屋の茂田を知っているだろう……」

「……あ、はい」

翔太に美春が狙われている。そう学に情報を持ってきた茂田。この世界で知らない者はいない。

「あの男が昔、チンピラ3人を殺^やつちまった事がある。一生刑務所^{ムシヨ}から出てこれねえ体になるはずだった……。それを、全て揉み消し、あいつを助けたのが……。あの『坊ちゃん社長』だ……。当時、まだ二十歳くらいの若造だったはずだ……」

一には4つ下の妹がいる。

その妹が高校1年の時、チンピラ3人に絡まれ襲われそうになった。

妹の学校の送り迎えをしていた茂田は、殴るくらいで止めておけば良かったものの、その妹にちよっと好意を持っていた事もあり、怒りに任せて3人を殴り殺してしまった。

ここまでしてしまつと、正当防衛、などという言葉も通用しない。しかし、「妹の為にやったこと」と、当時まだ二十歳だった一が、この一件を社会的に揉み消した。

茂田が一に、一生の恩、を感じているのはこれがあるからだ。

「二十歳の若造に、出来ることじゃねえ……」

星野は当時、その噂を聞いた時の興奮を思い出すかのように眉を寄せる。

「そんな『葉山』と、あの『田島』……誰が、逆らおうなんて思う……」

星野はデスクから立ち上がると、ちよつと悔しそつに声を張り上げた。

「いいか！葉山にや絶対、手出しはするな！！」

そして、冷や汗を拭いながら呟く。

「……生きていたかつたらな……」

「おやおや」

「あらあら」

先が一。後がさくら。

呆気にとられる二人を見ながら、学は人差し指を立て「シーツ」のポーズを作る。

ハッキリ言つて、特別室だけあつてベッドは広い。

そのベッドの中。学の横に、美春が寝ているのだ。

まるで猫のように丸くなって。

「やだ……かわいいい……」

本当に小動物でも見るかのように、さくらが嬉しそつな声を上げる。

スー、スー、という小さな寝息。

ハツキリ言つて寝顔までもが可愛い。

「なんだ学。ついに連れ込んだのか？こんな所で」

服も着たままなのに「連れ込んだ」も何も無いものだが、一の冷やかに、学は実に残念そうな顔をした。

「そうしたかつたのですが……。残念ながら椅子に座つたままベツドに頭を乗せて寝てしまつたんですよ。そのままじゃ寝づらいだろうと思つて、ここに寄せたんです」

「お前が寄せたのか？」

「はい」

「……。傷口は大丈夫か？」

「ちよつと痛みましたが、美春は意外に軽い。こつ抱き上げた時の幸せ感で、痛みは薄れましたね」

「一は親ながら妙に感心してしまつた。……「下心」の成せる業だな……」

「私たちは会社へ行くが、『下手なこと』はするなよ。そんな体なのだし」

「一応注意を促す父に、学は大真面目な顔で答えた。
「寝ている女に手は出しませんっつ」

「美春」なら、出したいけどっつっ!!

彼は「本音」を心の中で絶叫した。

美春の優しい可愛らしい寝息が、シーンとした病室内に響く。

学はその寝顔を見詰めながら、彼女の顔にかかる栗色の髪を指でよけ、それから髪を撫でた。

「美春……」

愛しそつに彼女の名を呼び、その白い頬を撫でる。

嬉しかったよ……。

お前が、俺の為に泣いてくれていた時……。

そつと身を屈め、学は美春の、その白く柔らかい頬に唇を付けた。

「ゆっくり……寝ろよ……」

そして学も、美春の寝息に誘われるように、目を閉じる。

第28話 二大勢力・逆らえない男達（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

パパ達のシーンが多かったです。趣味です。（笑）

信君のパパに関しては、まだ「完璧な愛」の方でも出てきたことが無く、こちらの「未満！」を読んでくださっている方への「サービス人物」になってしまいました。（笑）

信君が将来、このくらいの弁護士さんになって欲しい、という、玉紀の贅沢な願望が込められております！！！！

「プチらぶらぶ」は前回からの流れですね。

寝ちゃった美春ちゃんを、ベッドへ連れ込んでしまいました。

気付かれないうちにほっぺにチューまでしちゃったりして……

（「下心」万歳っ！）

さて、この作品の中で書きたかった、大きな事件も片付きました。最終話に向かってラストスパート！！

……ですが、さすがに、明日更新は無理です……。

（もう1本の更新日なので……。すみません……）

今回は、この二人に負けず、微妙にもしかして「両思いか?!」の、信君と涼香ちゃんも「プチらぶらぶ」してくれます。

では、次回！！

第29話 信と涼香・夏休みの約束

「はやまあ・・・」

聞いているほうが可哀想になる。

「なんでお前。よりによつて夏休み前のこの時期にい・・・」

本当に泣き出してしまいそうな顔で、信はベッドの上で上半身を起こす学の傍らに屈み込み詰め寄った。

学が怪我をして入院した事は、朝すぐにさくらから学校のほうへ連絡され、夏休みキャンプに行く予定の残り8人が生徒指導部の瀬古田に呼び出された。

もちろん責任者の学がそんな状態だ。キャンプは中止。学校として許可は出せない。と。

誰がどこで聞きつけたのか、「葉山学が入院した」という噂は朝のうちに学校中が知るところとなり、午後から次々と生徒がお見舞いに訪れている。

しかし体に負担が掛かってはいけないという病院側の配慮で、学は「面会謝絶」という事になっており、病室まで入って来られる者はいない。

家に電話を入れようと美春が一階のロビーにおりている時、信と涼香が一緒に正面入り口から入ってくるのを見つけた。

他の面会は断っているがこの二人なら良いだろう。と思い、美春が病室まで連れてきたのだ。

「すまないな。田島」

学は本当に申し訳なさそうに、自分に詰め寄る信に苦笑いをしてみせる。それからその横に立っている涼香にも笑いかけた。

「菱崎さんも、ごめんね。キャンプ、楽しみにしててくれたのに」
涼香は軽く首を振って、諦めるように笑う。

「しょうがないわよ。諦めるわ」

しかし、諦めきれないのは信だ。彼がどんなに楽しみにしていたか……。

ジーツと恨みがましそうに学を見る信の目の前に、上からコーラの缶が下りてきた。

「どうぞ。田島君。落ち着いてね」

美春だった。ニコツと笑いながら、涼香にもファンタオレンジの缶を渡す。

「学もちよつと痛い目にあつて、可哀想だったのよ。許してあげて珍しく庇う。美春に「お願い」されて、何となく許したくなってしまうのは、何だかんだで信も男だからだろう。」

しかし、庇ってもらつて物凄く気分がいいのは学だ。

「田島。お前、メロン好きだろ？その辺にあるの持つてけよ」

部屋の奥の棚を指差す。

まだ入院して半日だというのに、奥の棚は、花やら果物やらでいっぱいになっていた。

「言われなくても、持つて行くっつー!!」

信はやけ気味に、コーラをグツとあおつた。

「は〜あぁ〜」

病院一階ロビーの椅子に座つて、信は両腕を膝に掛けガクツとなだれた。

結局、病室には2時間近く居て話し込んでしまった。

恨み言を含めてもう少し学と話がしたかったのだが、入院したばかりなんだから帰ろう。と涼香に言われ、病室を出た。

これから帰るので帰宅時間が少々遅くなる。家がうるさい涼香は、「友達のお見舞いに来ていたから遅くなった。今から帰る」という事を伝えるため、今、電話を掛けに行っている。

「・・・夏休み・・・地獄だな」
ぼそつと呟いてから、髪の毛をぐしゃぐしゃと掻き回した。

キャンプで、涼香に告白するつもりでいた・・・。
一週間じっくり攻めて、最後の最後、最終日に、ドカンと一発。
告白でシメようと思っていたのだ。

どうなるかなんて、解からない。
だけど、自分の気持ちを、しっかりと伝えようと・・・。決めて
たんだ・・・。

「これはないよなあ・・・」
夏休み中ずっと・・・。涼香さんに会えないんだ。

その時、うなだれた信の頬に、氷のような冷たい感触が走った。
「うわっ！」

思わず声を上げて顔を上げると、いつの間にか戻ってきていた涼
香が、目の前でクスクス笑っている。

「びつくりした？」
そして、今、信の頬にくっつけたらしいスティックアイスの袋を
差し出す。

「今ね。ついでに売店で買ってきたの。外に出たら熱いし。体冷や
してから出よう」
一本を信に渡し、自分の分の袋を開けながら信の横に腰を下ろし
た。真横に座った瞬間、涼香の髪から良い香りがして信はドキッと
する。

涼香が横にいただけで、熱くなってくる顔と体。信はそれを冷ま
すように「いただきます」と言っ、アイスの袋を開ける。

「キャンプ・・・行けなくなっちゃったね・・・」
寂しそくに呟く涼香の声が、胸に響く。

「そうだね・・・」

シャリツ・・・。ソーダ味のアイスをはひとかじりする。冷たいはずなのに、彼女が横に居るといっただけで体中が熱くて堪らない。

「田島君に、色々教えてもらったり、買い物に付き合ってもらったりしたのに、無駄だったね・・・ごめんね」

「ごめんね。どころか、涼香と必要以上に話が出来たり、一緒に買い物に行つて普段着を選んであげたり・・・」

考えてみると、前準備があまりにも信にとっては楽しすぎた。逆にお礼を言いたいくらい。

前準備が楽しすぎたから・・・キャンプに過剰に期待しちまったんだな・・・オレ。

そう思うと、溜息が出る。

しかし、そんな落胆しまくる彼を救ったのは、またもや彼女の一言だった。

「田島君つてさあ、キャンプが中止になったら、忙しいの？」

「へ？」

「あの・・・。デートとか、あるんだよね？」

心なしか、涼香が探るような目で赤くなっているのを見て、「何だ？」と思いつつ信は慌てて否定した。

「ない！ない！！そんなもの無いよ！！オレ、彼女なんていないしっ！！！！」

「・・・でも、夜、遊びに行ったりとかするんでしょ？葉山君と、仲が良くらいだし・・・」

・・・オレ、何か、誤解されてる??

信はちよつとムキになって、アイスの棒を握り締めた！

「ないよ！！オレ、葉山と、夜にそーゆー目的で遊びに行った事なんてないし！！」

中学の時、年上の彼女に振られた時は、数回連れ出されたけど！

でも・・・数回、だしっ！高校に入ってから・・・。

「ないよ・・・」

オレ、涼香さんしか、見てないから・・・。

信は、我ながら必死な顔で、自分を不安げに見上げる涼香を見詰めた。

「でも、涼香さん・・・。何で・・・」

何で、そんな事。訊くの？

信に見詰められて照れたのか、涼香はフツと顔を逸らすと、パクツとアイスバーにかじりつく。

その口の動きがあまりにも可愛らしくて、信はしばらくボーっと見とれてしまった。

ヤバツツ！！

ハツと「思春期の衝動」に気付き、自分の横に置いていた鞆を膝の上に置き、腰の辺りを隠す。

・・・反応しちまった・・・。

オレってば、単純・・・。

少々情けない気持ちで、柔らかくなりかかっているアイスを、シヤリシヤリ音を立てながら食べ進める。

「あのさあ。田島君」

涼香が目の前のアイスバーを眺めながら、遠慮するように話し出した。

「お願いがあるんだけど・・・」

「何？」

「・・・私の家ね、日本舞踊の家元なの知っていますでしょう？その

せいか、講演会とか交流会とか、御呼ばれとか、色々面倒なことが
沢山あるんだけど、私、一応長女だから、ほとんど親と一緒に出席
させられるのよ……」

「うん？」

「週に2〜3回はあるのよね。……ハッキリ言って、退屈だし、
私はあまり行きたくないの……」

「うん……」

「……友達と約束があるから、とか、会場の前まで友達が来てる
から。とか言えば、最初の15分くらい顔出しして、すぐに退席で
きるんだけど……」

「……」

これは……？もしかして……。

「田島君。会場まで、迎えに来てくれないかな？」

「イクツツツ！！！！」

バキッ！あまりにも力を入れたため、食べ終えたアイスバーの木
の棒が手の中で折れる！

「あつ、あかつ、もちろん、こんなの、家の用事をさぼりたい、つ
ていう私の我侭だし、そんな事に付き合わせるのも申し訳ないん
だけ……」

そんな事、カンケーないつつつ！！！！

信は、心の中で叫ぶ。

「と、友達と約束してて、会場まで来てる、つて言えば、本当にす
ぐ抜けられるし、……その、そんな事に、利用するみたいで申し
訳ないんだけど！」

利用でもなんでもいい！！！！

信は再び、心の中で叫ぶ。

「本当に、田島君の用事が無いときでいいから……」

あつたつて、そんなモン、キャンセルするっ！！！！

「お願い・・・できないかなあ・・・」

いつもは少々強気のイメージがある彼女が、何となく探るように信を横目で見ると。

「大抵、お昼に掛かる時間帯だから、・・・来てくれたら、ハンバ―ガーか何かおごるから・・・」

「いいよ。そんなの」

「・・・あつ、じゃあ、おにぎりの具、って、何が好き？」

「おにぎりの具？」

「うん。私ね、下に二人も妹がいるから、よく作ってあげるの・・・意外と得意なんだよ。・・・私の手で、イヤじゃなかったら、たまに作って・・・」

「『はちみつ梅』つつっ!!!」

涼香の気が変わらないうちにと、素早く口に出す。

「オレ、一番好きな具、『はちみつ梅』!」

涼香がちよつと、ぷつと吹き出す。

「はちみつ梅」は、その名の通り、はちみつに漬けた甘い梅干。

普通の梅が駄目な小さな子供や、女性などに良く好まれる。

「分かったわ」

涼香は嬉しそうな笑顔でクスクス笑う。

そして、ちよつと赤くなりながら、右手の小指を信の前に差し出した。

「・・・指きり」

「・・・」

もう、信は夢見心地だ。

踊り出してしまいそうな気持ちを抑えて、自分も右手の小指を差し出した。

細くて白い、綺麗な指。

絡めると、本当に細くて柔らかくて・・・。
力を入れると、折ってしまいそうだ・・・。

「・・・約束ね」

キャンプ中止で落ち込んでいた気持ちなど、もう、どこにもない。

信は最高に、幸せだった。

そしておそろく・・・。

涼香も。

第29話 信と涼香・夏休みの約束（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

長 く、お休みして、申し訳ありませんでした！

ラストまでサクサク行きます！って言っていたのに・・・。

本当にすみません！

信君涼香ちゃんの、プチらぶらぶ、は、楽しんで頂けましたでしょうか？

「完璧」の方で、二人の想いが通じ合うのは、学君美春ちゃんと同じ、高三です。

ですんで、今、手出しは出来ません。（笑）

今回はメインの二人が少ししか出ませんでした。次回はいっばいですよ！

夏休み中、入院で退屈している学君。

毎日美春ちゃんと二人っきりの時間がいっばいで、嬉しい限りですが・・・。

好きな女の子と、いつも一緒・・・。男の心境としては・・・。

はい、次回は少々危険です！

R-15に変更か???!ギリギリまでチャレンジ!!（おいおい）

ラブラブ度、最高潮でお届け!!（じれったすぎてついにキレたか!玉紀!!）

更新予定は、明後日13日!

では、次回!!

第30話 学と美春・危険な病室

「ひま・・・」

学が少々ムーっとした顔で、シャープペンシル片手に文句を言うと、美春は手に持っていた「夏休みの課題問題集」をクルクルつと丸めて、パコツと学の頭を叩いた。

「自業自得でしょっ。学が夏休み前に怪我なんてするから。入院生活なのよっ」

ベッドのリクライニングを椅子並みに起こして座る学の顔を覗き込むと、学は今自分を叩いた問題集をヒョイツと美春の手から取り上げ、パラパラとめくった。

「何だよ美春。まだ半分しかやってネーの？俺、やってやるうか？俺はスキル類全部やっちゃったし」

8月に入ったとはいえ、夏休みに入ってからまだ2週間。

私立西海学園高校の「長期休暇用課題」を、10日も掛からず片付けてしまえるのは多分この男だけだろう・・・。

「結構よっ。字が違うでしょっ。ばれちゃうわよ」

「大丈夫だ、って。俺、自慢だけど、字も綺麗だから」

「『字も』って、他には何が綺麗なのよ。『心』とか言ったら殴るわよ」

「顔」

はいはい・・・。

美春は溜息混じりに、学から問題集を取り上げた。

約束通り、夏休みに入ってから美春はずっと学の所へ通っている。宿題を一緒にやったり、DVDを観たりゲームをしたり。時々学に言われて買い物をしてきてあげたり。

毎日が家と病院の往復。

「つまらなくない？」と言われそうだが、とんでもない。

美春は、学と居られて、凄く嬉しい。

そして学も、本当に美春が毎日笑顔で自分のところに来てくれる事が、物凄く嬉しい。

が……。

「もう2週間だぜ……。病院内以外出歩けないから退屈でさ……」

ベッドの上であぐらをかいて、んーっつと伸びをする。

「傷口も傷まないしさ。気をつけてれば肋骨も平気だし。……自宅療養にしてくんないかなあ」

「そーいう事は、お医者さんに相談して頂戴。私に愚痴ってもしょうがないでしょ」

そう言ってから、からかうようににっつと笑う。

「それとも。欲求不満なの？お坊ちゃまっ」

「うん。溜まる」

……なにが……？訊こうと思ったが、逆にからかわれるだけなのが目に見えているのでやめた。

「そう言えば、美春さあ……」

学が腕を組んで、右手を顎の辺りに当て、何か考えるようにジーツと美春を見る。

「今日、スカートじゃないんだな」

「え？うん」

美春は大抵スカートだが、今日はピンク色のショートパンツ。……実は、キャンプ用に、と張り切って買ったやつだ。

「……ヘン？」

「いいや。凄く可愛い」

ニコッと「いい顔」で笑いながら言われて、美春は赤くなりながら顔を逸らしてしまった。

あーあ、入院しても「女ったらしぶり」は健在だわね。

「なあ、美春。アイス食いたくねー？」

「アイス？」

学はサイドボードから札入れを出すと、美春に背を向けたままポイツと放り投げる。

「俺、ラムレーズンな。美春も好きなの買ってきて来いよ。何個でもいいぞ。」

「外のジェラートショップの？売店の？」

上手に財布をキャッチして、肩越しに振り向いている学に問い掛ける。

「どつちでもいいぜ。売店にもけっこう美味しいのあるし」

「解った。行って来るね」

受け取った財布をちよつと上に上げ、にこつと笑って病室を出る。パタン……。とドアが閉まってから、学はハアッと大きく息を吐いて、我ながら呆れるように「正直な自分」に目を落とした。

「うん、溜まる」ってのは、冗談じゃなくて、結構、切実なんぞぞ。

そんな時に、綺麗な脚がすつきり出てるようなモン、穿いてくるなよな……。

それじゃなくても、毎日美春が傍にいただけで「ソツチ」の気分、絶好調なのに……。

長い入院生活。

おまけに美春は毎日やってきて、自分に優しい。

病室に閉じ込められ、出歩けなくて少々ストレス溜まり気味……。

「たまんねーって……」

学は抑えようのない気持ちを持って余したまま、それを紛らわせようとするかのように、何度もハーツと大きな溜息をついた。

「ありがとうございます！」

病院から歩いて10分ほどの所にある、ジェラートショップ。

そこから出て数歩歩いたところで、美春はキュッと眉をしかめ立ち止まった。

テイクアウト用の、ラムレーズンとストロベリーミルク入りの箱が入ったショップの袋を肘にかけ、学から預かった二つ折りの札入れを開く。

さっきお金を払う時、とても気になる物を見つけたのだ。

学から、買い物の際に札入れごと預かるのは初めて。

いつもはかさばらないように、お札を一枚挟んだ小銭入れを渡される。

今日は何を慌てていたのか、札入れごと投げてよこした。

・・・まさか学が、美春の綺麗な脚を見てつい「思春期の衝動」に襲われてしまったため、それを隠すために焦っていた・・・など。彼女は気付かない。

美春は財布のカード入れの間から、少しだけ顔を出していた「ソレ」を、ゆっくりと摘み上げた。

「・・・何？これ・・・」

口に出してしまうものの、何となくは解る。

四角形の小さな包み。

中になにか円形の物が入っているという事が、浮き上がった形から分かる。

美春は使ったことが無いし、使われるような事をしたことも無い。

男性のエチケット。大人になったらお財布か定期入れに一枚二枚

は常備するべき。といわれる……。いわゆるひとつの避妊器具。
コンドームだ。

「……………」

何となく、見ているだけで赤くなってしまっ。

ついでに何となく、ムカムカしてきた。

……何よお。入院してんだから、こんな物いらなんでしょうが！
それとも何？綺麗な看護師さんにも目を付けてるっていつの？
?!?!?!

あまりにもムカムカして、「以前から入っていただけ」という考
えが思い浮かばない。

「フンッ！」

思わず不満を口に出しながら、ソレを道端のゴミ箱に、叩きつけ
るように捨てた。

「学　！おまたせえ！」

そう言いながら、ドアを勢いよく開ける。……が、中の様子を
見て、今度はそっとドアを閉めた。

「……………学？」

ベッドのリクライニングを、いつもより少し倒して、学が目を閉
じているのが見えたからだ。

「……………寝てるの？」

やだ……アイス、どうしよう。

そう思いながらベッドへ近付く。

とりあえず、冷蔵庫に入れておこうかな。病室用には大きめ
の冷蔵庫だから、冷凍室も大きめだし。入るよね。

先にアイスを入れれば良いものを、美春はアイスの袋をベッドの
端に置くと、自分も学の傍らに近寄るように、ベッドの上へ腰掛け

た。

静かに腰掛けたつもりだったのだが、ちょっとキィッとベッドが軋む音。その音が、妙に大きく耳に響く。

学の寝顔、って、きれい……。

思わずジッと、その顔を見詰める。

別に寝顔を見るのは初めてではない。

小さな頃は、一緒のベッドでお昼寝をしていたくらいだ。

先日だって、手術後の学を、目を覚ますまでずっと眺めていた。

しかし、「好きな人が目の前で眠っている」という気持ちで見出すと、どうにも見方が変わってくる。

まつ毛、長いよね。肌もきれいだし……。

美春は、更に体を寄せて手を伸ばした。

指先で頬に触れ、スツとなぞる……。

意外に柔らかい肌。

鼻筋もスツとしてて、本当に綺麗……。

これだもん。もてるの、当たり前だよね。

さらさらの髪の毛を静かに掻き上げ、耳元をなぞって、首筋に沿って手を這わせる。

やっぱり、何か、首の辺りって女の子とは違う。

当たり前だけど、何かガツシリしてる、っていつか。

クツキリと浮き出た、明らかに女の子とは違う太さの鎖骨。

そこを、指でなぞってから、手のひらを胸に当てる。

あつ。やっぱり、女の子と違って、硬い。

当たり前の事に、思わずクスクス笑う。

視線を走らせて、ベッドの上で伸ばされた両脚をジーツと眺める。パジャマ越しに、太腿からスツと撫でてみた。

脚、長いなあ……。

やっぱり、ガツシリしてる……。

男の子だもん。当たり前かあ。

いくら一緒に居ても、こんなにジックリと学を眺めた事など無い。ましてや、あちこち勝手に触るなどもってのほかだ。

やーねえ……。私。何やってんだろ。

つついしてしまった自分の行動が、妙に恥ずかしい。

美春は真つ赤になりながら、学から手を離れた。

が、その時、いきなり学の手が動き、今まで学に悪戯をしていた美春の手を、ガシツと掴んだのだ！

「！」

びくつ！！美春の体が震える！

「あー！！もう、我慢できねえー！！！！」

そんな学の切羽詰った声と共に、その手をグイッと引き寄せられて、美春はベッドの上に押し倒された！！

なっ……。なにっつ？？！！！！

第30話 学と美春・危険な病室（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

もー、しょうがないなあ。（苦笑）

つつい学君に悪戯をしてしまった美春ちゃん。

でも学君は「タヌキ寝入り」？

「あー！我慢できねー！！」と叫んでしまいましたが・・・。
気持ちは解るけど。マズイって・・・。

はい「ギリギリまでチャレンジ」は続きます。

どうなる、二人！！

次回は6月15日更新予定！

では、次回！！

第31話 学！我慢限界?!・美春に強行突破?!（前書き）

注意

今回は、少々、らぶらぶ要素が高いです。

R・12は行っていると思いますので、「そういう雰囲気は嫌い」という方は

素早くここで、クローズしてください!!

読んでしまつてから「こういう表現きらい!」という苦情文句は一切受け付けません!

と、言うか、出来れば本当に12歳以下の方(いる???)は、今回スルーしましょう!

(ちょっと低年齢の方には適さない表現が含まれますので)

「えー?らぶらぶ、好きー!平気ー!」という方だけどうぞ!!!

第31話 学！我慢限界?!・美春に強行突破?!

「お前・・・何やってんの?」

学は少々ムツとした顔で、ベッドに押さえつけた美春を見下ろした。

「まっ・・・学っつ。起きてたのっ?」

声が上がする。

それはそうだろう。ついさっきまで、学の体にベタベタと(?)触りまくっていたのだ。

こっそり・・・のつもりではあったが、相手が起きていたとなれば話は別。自分がした事を全て知られてしまっているのだから。

「ねっ・・・寝てるのかと思って・・・」

「寝てる男の体に触る趣味があつたのか?美春」

「おっ、起きてんなら、最初から目え開けてればいいでしょっ!」
訊かれた事には答えずに、とりあえずは自分の不満を申し立てる。
美春は赤くなって学を見上げた。

「だ、黙ってやらせておくなんて、ズルイわよっつ」

「寝こみを襲うのと、どっちがズルイんだよ」

おっ、おそう・・・っつて、やめてよお!その言い方!!

「だって・・・学の寝顔、じっくり見るなんて久し振りで・・・。
何となく・・・あの・・・」

しどろもどろになっっている美春を見下ろし、学がニヤツと笑い、片手で美春の肩を押し付けながら、もう片方の手で、今まで自分を触っていた彼女の右手を掴んだ。

「そんなに触りたいんなら、もっと触っつていいぜ・・・」

美春の手を、自分の腰に当てさせる。美春の手がビクツと震えて引っ込めようと動くが、学がしっかりとその手を押さええている。

「ほら。こっち」

腰から臍へその方へ動き、その手を少し下げさせる。

「ちよつ、ちよつとっつ!!」

美春が焦った声を出した。もう少し下に下がれば、多分「元気いっばい」な「学自身」に触れてしまう。

「どこ触らせようとしているのよお!ばかあ!!」

「お前が人の体を撫で回すから悪いんだろ?責任取れよ」

「せつ・・・せつ・・・せきにんっ・・・てっつ!!」

声は上ずり震え、おまけに美春は真っ赤になってしまった。

そ、それは・・・アレ?

よく、雑誌なんかの体験コーナーに書いてある、「手で又いてあげる」・・・ってやつ???

「そつ、そんな事、出来るわけ無いでしょうっ!!した事もないわよお!!!!」

「じゃあ、教えてやるよ」

「ヤダツツ!!!!」

必死で抵抗を試みる美春を面白そうに見ながら、学は押さええた手を離す。

美春がホツとして、その離された手で学の肩を押し彼の下から逃げようとするが、その瞬間、学の上半身が押さえ込むように美春の上半身に覆いかぶさり、美春はよけいに動けなくなった。

「ちよつ、ちよつとお!何??」

「じゃあ、俺も触るぞ」

「え?」

「お前と『同じこと』する。文句無いな」

お、同じこと・・・って。。。

美春は動揺する頭で、さっき自分がした事を思い返していた。

え・・・と、頬に触って、髪に触って・・・。うーんと、それから・・・。

動揺して焦りまくる思考。その先を上手く思い出せない。

学はニヤ付いたまま、赤くなって焦る美春の顔を眺め、右手の指先で美春の頬をなぞった。

「柔らかい肌だな。・・・ホントツ。お前の顔って、可愛いよ」「
囁くような、艶っぽい学の声。

学は元々「いい声」ではあるが、こんな、何かを誘うような色っぽい声を聞くのは初めてだ。

「髪も、綺麗だし」

美春のふわふわした柔らかい栗色の髪を、指先で梳くように掻き上げ撫でる。

「!」

ベッドが軋んでしまうくらい、美春の体がビクンッと跳ね上がった!

学の唇が、美春の耳元に触れたかと思うと、そこからゆっくりと首筋をなぞり始めたのだ。

「ちょ・・・つとお、まなぶつつ」

あまりの事に、声が小さくなる。

「同じ事」と言っただけの学は、明らかに「違う事」をしている。美春は指先で学に触れていた。しかし、学は・・・。

「わっ、私、そんな事してないっつ!」

「した。同じ所に触ってるだけだ」

学の指先が移動するたびに、唇もゆっくりと移動していく。

そのたびに、笑われてしまうくらい大きく、まるで水槽から飛び出してしまった金魚のように、体がビクビクと震える。

・・・やだ・・・はずかしい・・・。

涼しげに胸元が開いたVネックのフレンチスリーブ。

そこにクッキリと見える美春の綺麗な鎖骨を、学の唇が堪能する。

「……まなぶ……」

ちよつと叱った声を出そうと思っていたのに、逆に怯えた声が震え出る。

どうしよう……。もう、終わりだよな？

この先、私、なにしたらっけ？

頬も熱いが、体も熱い。

緊張して、体が固まり動くことが出来ない。

学は慣れてるんだろっけど……。私は……。

すると学の手が、美春の片方の胸を撫でるように横からキュツと掴んだ。

「やっ！まな……っ！」

さすがにコレには美春も驚いた。

硬直した体。しかし、その驚きに手が動き、学の手を掴もうとするが、一瞬だけ胸を掴んだ学の手はもう離れている。

「……おまえよお。なんでもっとジツクリと俺の胸に触んなかったんだよ。」

焦りまくる美春を見下ろし、学はクスクス笑う。

「ば、ばかつ。じつくり……。なんて」

「そうしたら俺も、ジツクリ触れたのにさ」

そう言いながら、学の膝が美春の両脚を割る。

脚を閉じようとする力も、膝で固定された学の力にはまったく敵わない。

下半身をも押しかけ、動けないように固定して、学は美春の太ももを撫で始めた。

「……脚、長いよな。しっとりしてるけど……。汗かいてんの

「？」

「あつ、汗も出るわよお・・・」

全身から冷や汗が吹き出してきそうだ。

その原因は、体全体で自分を押え付ける学。今、自分に圧しかかっってきた下半身。

経験の無い美春でも解ってしまう。学の「今の気持ち」。

痛いぐらいの硬さを持って、太ももの内側に、パジャマとショーツパンツの布地を通し、それが伝わってくるのだ。

「ま、学っ。もういいでしょう？って、いつか、私、脚触って終わっただから。おわりっ、おわりっ。よけてっっっ」

両手で学の腕を掴む。が、学はよける気配が無い。

「やだ。もうちょっと」

「ばっ、ばかねっ。『その気』になったらどうすんのよっ！私なんかにつっっ」

もはや無駄だというのに、一応「平気」を装って言ってみる。

「そうだよなー。最悪だよなー」いつも通り、からかい口調でそう言ってくれるのを期待して。

しかし、学から出た言葉は・・・。

「・・・心配するなよ。・・・確か財布に1個入ってたはずだから。

・・・ちゃんと使ってやるよ」

「・・・へ???」

「本当は、使いたくないけど」

それって・・・。それって・・・。

「アレ」の事??

美春はさつき、道端のゴミ箱に叩きつけるように捨てた、コンドームの包みを思い出していた。

「・・・我慢も・・・限界だ、っっの・・・」

ちよつとお・・・。まなぶう・・・。

学は美春の耳元で、きつと何十人もの女性が夢中になったである
う声で囁いた。

「・・・しようか・・・？美春・・・」

第31話 学！我慢限界?!・美春に強行突破?!（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

えー、今日はR・12くらい??（笑）

前書きで注意していますので、「私こんなの嫌い!!」っていう苦情は無しね!

ハッキリ言つて、療養しなきゃならない学君に、露出度の高い夏の美春ちゃんは、体に悪いと思う。（笑）

次回、最終話!!

どうなる二人!!

6月17日更新予定!

では、次回!!

最終話 未満！完璧になれるまで！

「美春？」

自分の体の下にいる美春の様子がおかしいことに気付き、学は押さえつけるように押し掛かっていた体をちよつと起こして、美春を見た。

カタカタ、カタカタ……。

無意識なのだろう。美春の体が、小刻みに震えている。

目をグツと閉じて、奥歯を噛み締めるように唇を噛んでいる。

学をよけようと腕を掴んでいた手にも、力が入らない。

ただ指先で、学の腕を掴んでいるだけ。

怯える……。というよりは……。悲しそうな表情。

「美春……？」

「や……だ……」

美春が、「やっと」という感じで出した声は、かすれ震えていた。

「こんな……の、ヤダ……」

「……」

「これじゃ……。おんなじだもん……。学が……。遊んだ、女の子と……。おんなじだもん……」

特に私に手出ししてくる訳じゃなくても、学は「幼馴染」としての私に、凄く優しい。

「幼馴染」としての私を、凄く気に掛けてくれる。

私の気持ちは通じなくても……。

私は、その事が嬉しくて。
とても、とても、嬉しくて……。

学を好きな気持ちが、日に日に大きくなっていくのを感じる。
このまま好きになり続けたら、私の体の中が学への想いだけで爆
発してしまいそうなほど。

だから……。
だからこそ。

私の事、女の子として「好き」でもないのに……。
そんな事、しないで。

学にとっては、なんでもない事なのかもしれないけど……。
私は……。

好きな人と、「したいだけ」っていう気持ちで、そんな関係にな
ってしまうのは嫌なの。

……そんな事言ったら、私、一生ヴァージンかもしれないけ
ど……。

でも。

それでも構わないよ。

私は……学が好き……。

きっと、一生、学が好き……。

だから、「同じ」になんてなりたくないの。
一時の気持ちで、体を重ねるだけの相手となんて……。

お願い。

「同じ」にしないで。

自信過剰でも、自己満足でも。

私は、学にとって「特別な幼馴染」だと、思っていたいの。

「体、触ったこと……、謝るからあ……。やめて……。え……」
グツと閉じた瞳から、とうとう涙が流れ始める。

学は体を起こし、ゆっくりと美春の上からよけた。

美春の両腕を引き、上半身を起こさせる。

美春がゆっくりと目を開くと、まるでダムが決壊したかのように
涙が流れ始めた。

ポタポタツと頬を伝っては、胸の上に落ちる。

涙が流れる原因は、今までの学の行為のせいだけではない。

目を見開いた先にあった、学の顔。

自分を見詰める学の瞳が、あまりにも優しい。

今まで、からかうように自分を困らせていた人間とは思えないほど。

学？

いつもの、優しい学だよね。

私が好きな、学だよね？

そう思うと、涙が止まらない……。

「バーカ」

優しい声でそう言って、学は美春の額をツンツと突っついた。

「本気にすんなよ。……お前みたいなお子ちゃま……俺が

相手にするとも思ってたのかよ……」

俺は、嘘つきだ……。

「美春みたいな、何も知らない『お子ちゃま』じゃ、物足りなくて堪んねーよ……」

台詞の内容のわりに、口調がとても優しい。

学は、涙を流しながら切なそうに自分を見詰める美春を、苦しい思いで見詰め返した。

こんなにも、美春が愛おしくて堪らないのに……。

本当は、無理矢理にでも奪ってしまいたいほど、体の底から美春が欲しくて堪らないのに。

馬鹿なプライドが邪魔をする。

美春を本当に守れる男になるまで、この想いを、伝えてはいけない。と……。

本当は、壊れてしまうほど、思い切り抱き締めたいのに。抱き締めて。二度と離したくないのに。

愛してる……。

俺は、きつと一生……。お前しか、愛せない……。

「美春……」

学の指が、美春の目元を拭う。

「・・・泣くなよ・・・」

「・・・だ・れが・・・泣かした、のよお・・・」

しゃくり上げながら出る声。しかし、少しずつではあるが、学に見詰められて気持ちがだんだんと落ち着いてきたようだ。

ふわっ・・・。

まるで暖かい風のように、学が美春を軽く抱き締めた。

「・・・ごめんな・・・」

頭の上から、優しい学の声が、囁くように耳元に下りる。

もう涙は出ない。

愛しい。落ち着いた気持ちだけが、美春の心と体に染み渡る。

「学・・・」

・・・大好き。

たとえ一生、この気持ちが伝わらなくても。

「美春・・・」

・・・愛してる。

俺は絶対、お前を一生守っていける男に、なってみせるから。
だから美春・・・。

俺を、待ってて・・・。

「何をやっているんだ？」

後ろからいきなり小声で話しかけられ、さくらは驚いてドアを後ろ手に振り返った。

そこには医師と話を終えた一が、腕を組んで不思議そうな顔で立っている。

ほんの少し開いた、学の病室のドア。一がチラッと中を覗き見た。
「・・・ほう・・・」

中の様子を見て、感心するように声を漏らし、さくらをみてニヤツとする。

「頑張っていたか？我息子は」

さくらはハーツと溜息をつき、少々残念そうな顔をした。

「未満よっっ」

「シェイクみたいになってんじゃん」

さつき買ってきたアイス。スプーンなどいらぬ。

何故なら、二人が絡まっている（？）間に、ほとんど溶けてしまいい、シェイクというよりは柔らかい「飲み物」になってしまっているから。

「学が悪いのよっ」

美春が文句を言いながら、アイスではなくなってしまった「ストロベリーミルク」のカップに口を付けて、少しずつ飲む。

「美春が冷凍庫に入れておかないからだろう？」

学もカップに口を付けて、「ラムレーズン」をグツとあおる。

「それ以前の問題よお！もともと学がタヌキ寝入りなんかしてるからでしょうっ？」

ベッドの上に二人で座り、溶けたアイスをすすりながら、責任のなすりつけ合い。

学はクスツと笑いながら、美春に顔を近付ける。

「美春・・・」

「ん？」

「付いてる」

ぺろっ……。美春の唇の上に、ちよつと付いていたストロベリ
ーミルクを舌の先で舐めた。

パシーーンツツ!!

久々(?)。見事に決まる、平手打ち。

「どっ、どこ舐めてんのよおお!!」

よ、よりによって、く……。唇の上……。つてえ!!!

「おっ、お前なあ!病人に何すんだよ!!」

チエツ!もうちよつとだったのにつ!

「何が病人よお!あんな事したくせにい!!」

「やめただろ?!やってねーだろーがつつ!!」

「もうっ!ホントに懲りないんだからっ!!学のスケベツ!!」

「黙れ!お子ちゃま!!」

「いつか絶対、今回以上に痛い目みるからね!あんだなんてえ!」

大好きよ。学。

いつか。いつの日か。

この想いが、あなたに伝わる日が来るのかどうかは解らないけど。

「この俺に、そんな事出来る人間なんかこの世にいねーよ!」

愛してる。美春。

いつか。いつの日か。

俺の想いをお前に伝えて、「完璧」にお前を守る男になってみ
せるから。

「自信過剰！」

「確かな自身だ！」

いつか、きっと……。

いまはまだ、二人の関係が、「未満」でも……。

いつか、本当に

「完璧」になれるように……。

「理想の恋愛……未満！」

END

最終話 未満！完璧になれるまで！（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

「理想の恋愛・・・未満！」32話にして、ENDマークを打つことが出来ました！

最初から読んでくれていた方、途中から読んでくれた方、沢山の方に読んで頂けてとても嬉しかったです！

本当に有難うございます！！

あらすじ書きにも書いていますが、これは玉紀が続けている連載「理想の恋愛 完璧な愛」に出てくる、ベタベタ甘々カップル（笑）が高校一年生の時のお話です。

あちらの連載をやっていると、もちろんこの二人は幼馴染で小さい頃からずっと一緒だったので、色々な思い出エピソードが出てくる訳ですよ。

チヨコチヨコツと出てくるエピソードを、色々合わせて書かせて頂いたのがこの作品になります。

「完璧な〜」と同時に読んでくれた方は「あ、こんな話あったな」と気付いてくれていたでしょうか？

なんととっても、一番メインで書きたかったエピソードは

・一年生にして「ミス西海」になった美春ちゃん。

・美春ちゃんを守るため、ヤクザ系と喧嘩をして大怪我をする学君。

この2点でした。

特に、大怪我をする学君のエピソードは「完璧な〜」の第1部で、学君の告白に大きな役割を持って来ています。

その他には、

- ・生徒会長。本條由貴人。の話。
- ・学君が保健室の先生に目を付けられた原因。
- ・学君が大きな「情報網」をもっている理由。
- ・一年生の時から、涼香ちゃんを好きだった信君。
- ・実は涼香ちゃんも信君が気になっていた様子。
- ・美春ちゃんが教師にイタズラされそうになった事件。
- ・その教師を退職に追い込んだ学君。
- ・信君が「はちみつ梅」が好きなこと。
- ・学君の財布から、コンドームを抜き取って捨てたエピソード。

結構細かく、色々あります。(笑)

エピソードにはありませんでしたが、「息子の為に強攻する一さん」そして「信君のお父さん」この二人を書きたかったのもありました。

本来なら、「完璧な」の番外編で、エピソードを集めて書くのかな。とも思っていたのですが、考えていくうちにあまりにも話が長くなってしまい、「これじゃ番外編じゃないだろう・・・」と断念。

このまま、一本の連載にさせて頂いた訳です。

まだ結ばれて無い頃の話ですから、玉紀にしては珍しく「R-15指定」が無い！と、いう事で、「エッチシーンも無ければ、どうせくつつくつて分かってる二人の話しかあ」と笑われるかな・・・。と思いつつ始めた連載でしたが、思ったよりも多くの方に読みに来ていただけで、また、「完璧な」を読んだことがない、という方、本当に低年齢の方まで読みに来て頂けて、本当に嬉しかったです！

玉紀も、この連載をやっていて、とても楽しかったです。

じれったいけど、気持ちに通じていない二人もとても好きなので。

「理想の恋愛・・・未満！」いかがでしたでしょうか？

コレが一年生の時の話ですので、機会があったら、二年生になった時の話も書きたいな・・・なんて、欲張りな事を考えております。（二年生の夏休みにキャンプに行くので・・・それを書きたいです！）

「完璧な」を読んでくださっている方、その中からも沢山の方が読みに来てくれました。

本当に本当に、有難うございました！！

感謝をこめて。

玉紀 直

番外編・2人の夏物語「1 信・出会い」

「菱崎涼香 嬢だ」

「葉山！知ってんの?!」

女の子を「花」に例えた事なんて無い。
はつきり言つて、そういうハッキリとしない比喻は苦手だ。

でも今日。

私立西海学園高校入学式。

その場所。オレは……。

「牡丹の華」を見つけた。

校舎前の大きな桜の木。

その下に咲いていた、牡丹の華……。

流れるストレートの綺麗な黒髪。

化粧をしている訳でもないのに、白い肌に赤い唇が際立っている。
強い瞳に、凜とした物腰。

本当に、牡丹がそこに咲いているようで……。

凄く……綺麗な……。

「牡丹の華」といつても、本当の「花」じゃない。

早い話、……あんまり早くも無いが……「花のような女の子」だ。

その女の子は、誰かを待つように、桜の下に立っていた。

「日本舞踊菱崎流家元の長女だ。なかなか目が高いじゃないか。田島」

家や会社の関係で、文化人関係にも詳しい葉山。

どうやらパーティの席などで彼女を見かけた事があり、顔見知りらしい。

「菱崎……涼香……」

オレは、しばらくの間、その子から目が離せなかった。

「一目惚れ」という、はっきりとした確証の無い言葉。

でも、この世の中に「一目惚れ」は確かに存在するのだと……。

それを、初めて知ったんだ……。

そしてオレは、牡丹の華に、恋をした……。

番外編・2人の夏物語「1 信・出会い」（後書き）

・・・こっそりと、番外編、始めてみました。（笑）

玉紀のいつもの更新時間とは、かなり違う時間帯です。

今日、見つけてくれた方には拍手！！

明日はちゃんと更新情報に載せます。あとがきもちゃんと書きま
すね！

では、・・・こっそりと・・・。

明日、また！

番外編・2人の夏物語「2 涼香・出会い」

「やっぱり西海は美人が多いなあ！絶景じゃん！」

誰よ？そういう馬鹿な事を言っている男は。

入学式が行われる講堂と席を確認して、そこに居ようかとも思ったけど、私は一度外へ出た。

校舎前に大きな桜の木があつて、校門を入った時からそれが気になつていたから。

とても綺麗に咲いていたので、それが見たかった。

講堂を出て、桜の近くに来た時、その声は聞こえたの。

「可愛い子、いないかなつと」

やけに弾んだ明るい声。

ホント、男つてのはしょうがない。

入学式で何を浮かれ上がっているんだろう。

私は桜の木の陰から、覗くように声がしたほうを見た。

「・・・・・・・・」

何か言葉を出そうとした。

何を言おうとしたのかは、自分でも解からない。

でも・・・・・・・・。

その男の子を見た時。
心臓が止まってしまつかと思つた。

明るい笑顔で笑う。・・・可愛い顔の男の子。
可愛い。なんて、男子に失礼だけど・・・。
でも、本当に「可愛い系」。

見ているだけで元気になれそうな、爽やかな明るい笑顔。
一緒に居たら、きつとこっちまで笑顔になつてしまふ。

何？

どうして心臓の鼓動がこんなに早いのか？
どうしてあの男の子から、目が離せないのか？

その子は一緒に居る友達と何かを話している。
あれ？

あの一緒に居る「カッコイイ系」・・・。葉山氏じゃない？
製薬会社の御曹司だ。パーティなんかで会つた事がある。挨拶く
らいしかした事は無いけど。

カッコイイ人は好きだけど、ああいう「たらし系」は苦手だなあ。

そんな事を考えつつも、目は「可愛い系」の男子の方へいく。

ドキドキ。ドキドキ。

胸が苦しいくらいに高鳴る。

・・・どうして？

私は、その子から目を逸らして、桜の木にもたれかかった。

葉山氏が一緒だし。

声、かけてみようか……？

でも、男子に自分から声を掛ける……っていうのも……。

横目でチラッと、もう一度その男子を見ると、何となくコツチを見ているような気がして、慌てて視線を戻した。

声、掛けてくれないかしら……。

そんな事を考えてしまい、何か自分が凄く不純な事を考えてしまっているような気がしてくる。

ドキドキ。ドキドキ。

名前も知らない……。

話したことも無い……。

今見たばかりの男の子。

なのにどうして、こんなに体中が恥ずかしがるの？

ひと目で誰かに恋をする。

そんな不思議な恋を、私はこの日、初めて経験した……。

番外編・2人の夏物語「2 涼香・出会い」（後書き）

こんにちは！玉紀 直です！

連載が終わって2ヶ月。

番外編やりたーいーい！と、思いつつも色々ありまして・・・。

（知っている人は知っている（笑））

出来ないままここまで来てしまいました。

昨日、こつそりと「1」をやったんですよ。（クスクス）

見つけてくれた方は、ほんとに「拍手!!!」です!!!

本編の中で、信君と涼香ちゃんは夏休み中に会う約束を
してしまっただけね。

この番外編は、そんな二人のお話です。

信君サイド、涼香ちゃんサイド。両方の視点から書いていこうと

思います。（それも、玉紀が苦手とする「一人称」でっ!!!）

よろしければ、後数回、お付き合い下さい。

学君と美春ちゃんに負けなくらいの、すれ違いと、じれったさ、
そして切ない恋心。それを感じて頂けると嬉しいです。

もちろん、プチらぶらぶ、もあります。

今回は信君サイドから！

では、次回！

番外編・2人の夏物語「3 信・その朝」

「迎えに来たよー」

・・・軽すぎる・・・。

「待たせてごめんね。会いたかったよ」

・・・葉山じゃあるまいし、告つてもいないうちから、んな照れる事言えるか！

「オハヨー！涼香さんっ。今日も綺麗だね！」

・・・バカ丸出しじゃん！

ベッドの上へ座り込み、挨拶の文句をアレダコレダと考えていたオレは、思わず頭を抱え込んだ。

うまい挨拶が、ひとつも思いつかない・・・。

腕時計に目をやると、11時少し前。

今日行く文化会館はそれほど遠くはないから時間はかからないけど、でもそろそろ家を出なきゃならない。

「ごめんね。本当に迷惑じゃない？」どちらかと言えば、彼女は「気が強い」タイプ。

物もハッキリと言うし、人に対する対応もきびきびしていて物怖じしたところが無い。

そんな彼女が、ちよつと不安そうな声でそう訊いてきた。

迷惑な訳、ないじゃんっ！！

どこの世界に、入学式に一目惚れした女に子に、本当なら一回だつて会う機会なんてなさそうなこの夏休み中、会える機会をもらつて会いに行かない男がいるか！！

夏休みに入って5日目。

昨日の夕方、涼香さんから電話が来た。

明日は、夏休み前に怪我をして入院している葉山のところにも見舞いに行こうか。などと考えていた矢先。

家の電話が鳴り、「父さんかな？また今日も帰ってこられないのかな？」などと思いつつ電話を取ると、そこから聞こえたのは、オレが好きな、口調がハッキリとした綺麗な声。

「田島君？」

涼香さんだああ！！

「はいつ。田島君ですよ」

浮かれまくる気持ちを抑えながら、懸命に冷静な声で冗談（？）を飛ばす。

すると涼香さんが、電話の向こうでクスクス笑っているのが聞こえた。

可愛い声だなあ……。

電話で良かった。

オレ、今きつと、ものすごくバカ面してると思う。

しばらくその笑い声に聞き惚れていると、笑い声が不意に止み、言いづらそうな涼香さんの声が聞こえた。

「あ……、田島君、『あの』約束、覚えてる？」

待ってましたあ！！

オレは、ここぞ！とばかり、妙に張り切った声を出してしまった。「もちろん！で？いつ？どこ？何時？？！！」

一気に訊く。葉山なんかと同じ事をしたら「落ち着け!!」って怒鳴られそうだ。

涼香さんも驚いたのか呆れたのか、電話の向こうがちよっと沈黙した。

「やばっ！本当に呆れられた?！」

でも、やっぱり涼香さんは優しかった。

怒る気配も呆れる気配も無く、オレに教えてくれたのだ。

「明日。文化会館の小ホール。11時半くらいでいんだけど」

「分かったよ。11時半までは絶対に行くから。会館のロビーで待っていていい?」

「うん。ごめんね」

「何言ってるのさ。約束だったろ?」

「・・・ありがと・・・」

「うわぁ・・・かわいいなあ・・・」

話している姿まで想像できてしまう・・・。

きつと受話器を両手で持って、シャンと背筋を伸ばして首なんか傾げちゃって・・・。

「やばい・・・。ニヤニヤがとまんねー!」

「父様の知人の方の文化講演会なんだけど、本当は私、キャンプの予定が入っていたからいかないはずだったの。でも中止になっちゃったでしょ?だから、長女として行く事になっちゃって」

「そう！キャンプ!!」

「本当なら仲のいい友達10人程度で、キャンプに行く予定だったんだ!それも10日間も!!」

「責任者の葉山が、あんな怪我をして中止にならなければ。」

あいつの性格上、「自分の命より大事」と豪語する光野さんが、

怪しげな男に狙われているとなれば、徹底的にやっつけてしまう気持ちも解かる。あそこまでやったのも、理解できる。

しかしそのお陰で、無茶苦茶楽しみにしまくっていたキャンプは中止になり、夏休み中、涼香さんに会える機会も失った。

・・・が、何たる事が、彼女は「ある事」でオレに助けを求めてきたのだ。

「菱崎の長女として、いろいろな集まりに出なければならぬ時、中抜けする言い訳になってくれないか」と・・・。

断る訳がない!!

要は、その何かの集まりがある時、その場所に行つてあげれば良いだけ。・・・そして、それを引き受ける事によって、涼香さんに会える。

「明日、なんて突然だし、もし田島君、用事があるなら・・・」
「ないっ!!」

「ごめんな!葉山!見舞いは今度な!・・・って、どうせ光野さんが毎日来てて、葉山としては満足だろうから、オレが行つても「邪魔すんな。メロン持って帰れ」って感じかな?

「文館だね?必ず行くよ。本当に抜けられる?大丈夫?」

「うん。大丈夫」

「じゃあ、11時半ころに・・・」

「うん、じゃあ」

沈黙・・・。

本来ならここで電話を切ってしまうところなのだが、オレも涼香さんも電話を置かなかつた。

オレは、何となく名残惜しくて。だけど・・・。

涼香さんは？何で？

「田島君・・・」

涼香さんが口を開く。

「少し、お話しててもいい？」

「なんで？」なんて、余計な事は言わない。
だってオレも、涼香さんと話がしたいから。
「いいよ」

オレがそういうと、少々控え目だった彼女の口調は、いつもの明るいもの変わった。

そして1時間近く、オレ達は電話で話をした。

ほんの他愛のない話ばかりだったけれど、オレにとっては、最高に楽しい時間だったんだ。

玄関の鍵をかけ、家を出る。

文館までは、歩いて15分ほど。ハッキリ言って、近い。

夏の空を見上げ、楽しくなってしまうくらいに青くてすっきりとした空に向かい、ニッと笑う。

楽しくて楽しくて、堪らない！

楽しみで楽しみで、堪らない！

入学の時から、ずっと好きな彼女。

まだまだオレの片思いだけ・・・。

でも、いつかきつと……。

「よしっ！頑張るぞー!!」

オレは両手で握りこぶしを作り、青空を殴りつけるように空へと伸ばした。

もうすぐ……、彼女に会える……。

こんなに、女の子を好きだと思ったのは、初めてだ……。

番外編・2人の夏物語「3 信・その朝」(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

長い長い夏休み。待ちに待っていた、約束の電話。

さあ、いよいよ涼香ちゃんに会えます。

浮かれあがる彼の心。

じゃあ、涼香ちゃんは・・・？

今回は涼香ちゃんサイドから！

では次回！

「ねーえーさーまーあ」

「何してるのお？」

ドキーン！

背後から不意に聞こえた妹たちの声。

いつもは可愛くて堪らない妹たちの声が、今はとてつもなく疎ましく感じてしまった。

「あー！おにぎり作ってるう。晶香も欲しいっ」

末の妹。小学6年生の晶香しょうかが、私の手元を覗きこむ。

どうやらラジオ体操から帰ってきたところらしい。首からラジオ体操カードがさがっている。

「でもどうして？朝ごはんはもう出来ていたみたいよ。どこかに持っていくの？姉様」

そう言いつつ、次女で中2の京香きょうかの視線は、台所の調理テーブルに置かれた、丸いお重に注がれる。

お重……。っていつても、1段しか使ってないけど。

中には、それほど大きくは無いおにぎりが5個ほど出来上がっていた。

「うん。今日のお昼用に……。ちよつとね」

歯切れ悪いなあ。と思いつつも、ご飯を手の中でポンポンと転がしながら握り、海苔をつけてもう一度、ギョツ！

うん！きれいな三角！！

「あらあ？でも姉様が今日行くっていう講演会って、昼食会があるんでしょう？別におにぎりは要らないんじゃない？」

おっとりとした優しい口調には似合わず、意外に京香はツツコミがしつこい。

「ちよつとね。・・・差し入れ・・・なのよ」

「ふうん」

「ふうーん」

どうも納得しがたい声の、妹2人。

私はラップを2枚切って、出来上がっていたおにぎりを一つずつ包むと妹たちに渡した。

「有難う。姉様」

「わーい。涼香姉様のおにぎり、好きー」

・・・最初から、口止め分せしめるつもりだったくせに・・・。私がおか変わった事をしてしていると、両親が過剰なほどうるさいのは二人とも知っているから。

朝食前の戦利品を両手で持ち、おとりにここにお礼を言う京香と、無邪気にハシヤグ晶香。

普段は他人に無愛想だけど、私にはいつも可愛い笑顔を向けてくれる晶香が、いつも通りの可愛い笑顔で私に訊いた。

「涼香姉様っ。おにぎりの中身、なあに？」

あまりにも可愛らしくて、私はくすつと笑って答えた。

「はちみつ梅。よ」

オレ！一番好きな具、「はちみつ梅」！

田島君・・・食べてくれるかな・・・。

調子に乗って、本当に昼食用に作っちゃったけど。

本当に良かったかしら。

何となく不安になって、お重の中をじっと眺める。

他人の手で握ったものなんて食べられない。っていう人もたまに居るわよね……。田島君はそんなタイプじゃないと思うけど、人は見かけじゃないし……。

少し濡らした手の上に塩を振り、手のひらに乗るくらいのご飯をポンツと置く。

種を取ったはちみつ梅を乗せて、その梅を眺めながら考えた。

「おにぎりの具、何が好き？」って訊いた時、すぐに「はちみつ梅」って答えた田島君。

私の気が変わらないうちに……。っていうのが見え見えで、ちよつと照れくさかった。

最初に乗せたご飯と同じくらい量のご飯を、もう一度乗せて梅を隠し、両手で一度ギュツと握る。

大丈夫。きつと食べてくれるよ……。

田島君優しいし。

それに……。

もしかして、私の事……。

「……」

何となく赤くなってしまっている自分に気付いて、私はブンブんと頭を振った。

気を取り直すように、キュツキュツとおにぎりの形を整えて海苔をつける。

昨日電話した時、凄くドキドキしたなあ……。

夏休み中に会う約束はしたけど、何てだったってその理由が私の勝手な都合だし。

約束した時、「友達が来てる。って言えば、15分くらい顔を出してすぐに抜けられるから」って言ったけど……。

あれは、嘘。

家の用事を抜け出した事なんて、一度も無い。

今日だって、友達と図書館に行く約束をしているから、15分くらいで抜けさせて下さい。って、母様に頼み込んだんだもの。

「珍しいのね。涼香がそんな事を言うなんて」って、母様も驚いていた……。

だって……。田島君に会いたかったから……。

「いつ?!どこ?!何時?!」待ってましたと言わんばかりに返ってきた返事。

嬉しくて照れくさくて、少し黙ってしまった。

話が終わっても電話を切りたくなくて、受話器を両手で持ちながら、絶対に一言だって田島君の声を聞き逃さないとばかりに、ぴったりと受話器を耳に当て続けた。

もつともつと、彼の声が聞きたくて。

ずつとずつと、電話で彼と繋がっていたくて……。

「もう少し、お話していい?」って、訊いた。

嫌な声ひとつ出さず、「いいよ」って返事をしてくれた田島君。

凄く嬉しかった……。

1時間くらいお話が出来て、今日の事を考えると、正直、少し眠れなかったわ。

お重の蓋をカタンと閉めて、四隅に菜の花の刺繍がついたアイボリーの風呂敷に包む。

ランチバックより少し大きめの、淡いチェック模様が可愛いクー

ラーバックにそれを入れ、麦茶の水筒と、使い捨てのお手拭タオル、そして一応割り箸を入れる。

ドキドキ。ドキドキ。

だんだんと胸が高鳴っていくのが分かった。

田島君、喜んでくれるかな・・・。

「一番好き」って言っていたから、おにぎりの中身、ぜんぶはちみつ梅にしちゃった。

ドキドキ。ドキドキ。

「ホントに作ってきたの?!」なんて笑われないかしら。

ドキドキ。ドキドキ。

「・・・」

誰かに何かを作ってあげて、こんなにドキドキするのは、初めて。

嬉しくて嬉しくて、堪らない。

楽しくて楽しくて、堪らない。

「田島君・・・」

呟くと、胸がキュッと詰まる。

もうすぐ、彼に会える。

こんなに、男の子を好きだと思ったのは、初めて……。

番外編・2人の夏物語「4 涼香・その朝」(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

挨拶で悩んでいた信君でしたが、涼香ちゃんはこの朝、おにぎりを作っていました。

本編29話めでおにぎりの話が出てました。「はちみつ梅」です。

好きな男の子に何かを作ってあげるって、凄く張り切ってますけど、ドキドキもしますよね。

さて、自分の片思いだと思っ込んでいる相手の女の子が、おにぎりを作ってきてくれたりなんかしたら・・・。
それを知らない、信君の反応は？

次回は信君サイドから！

では、次回！！

番外編・2人の夏物語「5 信・待ち合わせ」

「お待たせ。ごめんね、時間過ぎちゃって」

そう申し訳なさそうに言いながら涼香さんが文化会館のメインロビーに現れた時、オレは思わず固まった。

時間は11時35分。「11時半くらい」と言われていたので確かに5分過ぎてはいるが、5分くらいでそんなに申し訳なさそうにされては、かえってオレの方が申し訳ない気持ちになってしまう。

「いや！それより、思わず固まってしまった理由！」

初めて見る。彼女の私服姿。

今まで主に制服姿しか見たことがない。

あとは・・・、学校で、体操着と、水着と・・・。

みつ、水着、っていったって、体育のプール授業の時だし！ジロジロ見てた訳じゃない！・・・はずだよな・・・。

いや！こんな言い訳をしたいんじゃない！ようは初めて見る彼女の私服姿に、見とれてしまった、という事が言いたい！！

「どうしたの？怒ってる？」

見とれて黙ってしまっただけなのだが、何も言わないのでオレが怒ってるのだと思っただけらしい。

その割に、涼香さんの表情には申し訳なさそうどころはなく、どちらかといえば「そのくらいで怒らないの！心が狭いぞ！」という感じ。

セミロングのストレートヘアを、サラサラ流しながら首を横に傾ける。いつもの涼香さんがする気の強い表情。

それが凄く、可愛い・・・っていうか、綺麗・・・。

「怒んないよ。5分くらいで」

見とれてボーっとしてしまったなんて気付かれないように、平然を装う。

「えらい！男はそのくらいじゃなきゃね！」

ロビーの椅子に腰を下ろして涼香さんを見上げるオレに、彼女は目の前で、とてもとても明るい綺麗な笑顔を見せた。

Vネックの白いTシャツ。

なんていうんだっけ……。あの短めの袖……。店員が言ってたよな。フレンチスリーブだっけ？

袖口と裾が別布なんだけど、ヒラヒラしているせいかシンプルだけど可愛い。

きれいな空色の、裾に涼しげな針抜き模様が入った5分丈パンツ。

上下とも……。オレが選んであげた服だった……。

まだキャンプの中止が決まっていない頃、キャンプなどで着られるような普段着を持っていない。という彼女に付き合って、買い物に行った。

「どんなのがいいの？動きやすければいいの？」と、いつもは、人になんて頼りません、ってイメージの彼女が色々とオレに訊いてくれた。

「田島君、選んでくれない？」……。そんなことを言われて何だかスツゴク嬉しくて、涼香さんのイメージに合いそうな、あまりごちゃごちゃとウルサイ模様が入っていないくてシンプルだけど可愛いイメージの服を、上下合わせて10着以上……。15着分くらいあったかな……。？選んだ。

その中から選んでくれれば。って思ったけど、驚いた事に、彼女は全部購入してしまった。

「だって。全部気に入ったんだもん」って……。女の子の買い物って、凄い……。

今、その中の2枚を着て、俺の前に立っている。

偶然？それとも、選んだオレに気を遣って着て来てくれたんだろ
うか？

もしそうなら……。凄く嬉しいけど。

……。まあ、そんな訳ないか！

そう思いつつ立ち上がる。

「さっ、とりあえず出ようか？家の用事を抜けるのに、男が迎えに
来てた。なんてバレたら困るだろ？」

「そうね。二度と途中退場なんてさせてもらえなくなるわ」

涼香さんがくすつと笑いながら、左手に提げていた淡いチェック
の鞆を右手に持ち替える。

「涼香さん。その鞆持とうか？何か重そうだけど」

「え？いいわよ。重くないしっ」

何故かドキツとした顔をする。何？何か大変なもの？

普通に小さなシオルダーバッグを肩に掛けているので、常備品で
はないだろう。慌てたって事は、着替えかな？

しかし彼女は、何かを思い直したように、オレの前にその鞆を突
きつけた。

「食べるなら持って」

「え？何を？」

「中……。おにぎり入ってるから」

「……。おにぎり？」

「田島君が、好きだ、って言った『はちみつ梅』のおにぎり。今
日のお礼に作ってきたから……。食べるなら持って！」

信じられない……。

「持つ!!」

オレは、奪うように涼香さんの手からその鞆を取り上げた!

「重い!」って重さじゃないけど、おにぎりが2〜3個の重さじゃない。何が入ってるんだろう。と思うが、今はそんな事より、涼香さんが作ってくれたっていう事実が無茶苦茶嬉しい!!!

「食べるからオレが持つよ!やっぱり駄目、って言っても返さないからね!」

鞆を両腕で抱えて、少々大袈裟にムキになってみた。すると彼女は、驚いた顔をした後に呆れた顔をして、

「駄目なんて言わないわよ。馬鹿ねえ。だいたい、食べてもらわないとせつかく作ったのにもつたいないでしょう?」

と呆れ口調で言うが、すぐに嬉しそうに笑ってくれた。

「男の子用。って、初めて作ったから、どのくらい食べるのか良く分からなくて……。沢山作ったの……。食べてね」

「もちろん!もし余しちゃったら、オレ、持って帰るから!」

そう言うのと、涼香さんはおかしそうに笑った。

オレが、はちみつ梅が好きだって言ったのも、「もし良かったらおにぎり作っていくよ」って自分で言ったのも、ちゃんと覚えていてくれたんだ!

「じゃあ、天気もいいしさ。公園でも食べようか?」

「いいわよ」

「……うわーあ……。なんか、デートみたいだ……」

思わずニヤケそうになり、その顔を見られないようにクルッと涼香さんに背を向けて、「さっ、行こ行こっ」と歩き出す。が、数歩目でおもむろに立ち止まった。

後ろから歩いてきていた涼香さんの足音も止まる。

「その服さ。……似合ってるよ」

自分が選んだから。って訳じゃないけど・・・、本当に似合っていたから、素直に口から出たんだ。

私服の涼香さんが、凄く可愛らしく見えた。っていうのもある。強気の彼女のことだから、きつと強気の返事が返ってくるかな。と思っただけど、やっぱり返ってきたのは予想通りの返事。

「もうっ！当たり前でしょっ！何言ってるのよっ」

あまりにも思ったとおりの返事で、オレは思わず苦笑いをする。でも、その後に出てきた言葉は、まったく予想しなかった言葉だった。

「似合うのは当たり前でしょっ。田島君が選んでくれたんだからっ」
照れている風の口調で、そう言った。

オレは、言葉が出ない・・・。

反対にオレの方が照れてしまう。

オレが選んだから、似合う。って？思ってくれてる？

っていうのは・・・、もしかして、オレ・・・少し、自惚れてもいいのかな・・・？

照れくさくて少し顔が赤くなってしまった気がする。

こんな顔してるの見られたら、涼香さんに笑われるよな・・・。

だからそのまま歩き出す。

涼香さんも歩き出したらしい。後ろからついてくる足音が聞こえだした。

外に出ると、空にはとても眩しい太陽。

「お天気良くて、良かった」

涼香さんの嬉しそうな声。

「そうだね」

オレは、抜けるような青空を見上げる。

凄く眩しい。きれいな空。

でも……。

この夏の空より、明るくて綺麗な彼女が……。
今、オレの傍にいる……。

番外編・2人の夏物語「5 信・待ち合わせ」(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

片想いで好きな彼女が、自分の為に何か作ってきてくれるわ、自分が選んだ服を似合うの当たり前、なんて言ってくれるわ……。

信君、幸せモードです。(笑)

……何故コレで、彼女の気持ちにまったく気付かないんだ君は？

デートみたいな待ち合わせで、ドキドキしてしまうのは信君だけじゃありません。

次回は涼香ちゃん視点で！

では、次回！

番外編・2人の夏物語「6 涼香・待ち合わせ」

「変じゃないかなあ……」

大きな姿見鏡の前で、横を向いたり後ろを向いたりしつつ自分の姿を眺める。

白いVネックのフレンチスリーブ。きれいな空色の5分丈パンツ。

こんな格好、した事ない……。

文化会館の小ホール用控え室で、私は何度も何度も自分の姿を確認した。

11時15分。あらかじめ母様には頼み込んであったので、口うるさい父様に見つからないように、こっそりとホールを抜け出した。ほとんどが着物の来客ばかりなので、来客用の控え室がある。

誰も居ない控え室で着物を脱いで、持ってきてあった服に着替えた。

田島君が、選んでくれた服。

キャンプに持っていくような服を持っていないからと言って、彼に買い物に付き合ってもらった時、彼は15着ほど選んでくれた。

多分、この中から選びなよ。って意味だったんだと思うんだけど、「涼香さんに似合いそうなのばかり選んできたよ。涼香さん、何着ても似合うとは思っけどさ!」……って。

その言葉が嬉しくて、内心凄く盛り上がってしまったって、全部買ってしまった……。

帰ってから、買ってきた洋服の量とカードの明細を見て母様が驚

いていたけど、「キャンプなんて初めての事だから、お洋服とか汚しちゃうと思うの。他人様の前で汚れた格好をしているのも失礼でしょう？着替え、沢山必要かな？って思ったの」って言ったなら、納得してくれた。

私も、これは買いすぎかな……。なんて思ったけど、考えてみると長襦袢一枚仕立てるよりずっと安いし……。いいかあ？って。

何より、田島君が、私に似合う、って言って選んでくれたんだもの。

私は改めて鏡の中の自分をじっと見た。

調子に乗って着替え用に上下組み合わせて持ってきちゃったけど、本当に変じゃないかなあ……。

でも……。

もしかして田島君、自分が選んだ、っていうのも忘れているかもしれない。

そうだよな。選んでくれた分だってあんなにあつたし。いちいち覚えていく訳ないかな？

男って、女の服装に興味なんて持っていないって人の方が多い。っていうしね。

そう考えると、ちょっとだけ寂しい気分になった。

ちょっと、心のどこかで期待していたのかもいけない。

田島君が選んでくれた服を着ていたら、彼がそれに気付いて褒めてくれるんじゃないか。って。

「似合うよ」なんて、いつもの明るい笑顔で言ってくれるんじゃないか。って。

「バカだなあ……。変な期待して……」
鏡に額をコンツとつける。鏡の中の自分と目を合わせると、妙に情けない顔をした自分が居た。

田島君を好きになってから、「強気になれない自分」がたびたび顔を出す。

自信のない自分が……。

少々落ち込みかけた私の目に、鏡に映った時計が目に入った。

11時30分。

「いけない！」

思わず叫んで鏡から離れる！

待ち合わせの時間だ！

荷物置き場から、淡いチェックのクーラーバックと自分の鞆を持つ。
つ。

クーラーバックの中は、もちろん朝作った「はちみつ梅のおにぎり」他。

私は、母様に見られたら「そんなに急いで、はしたない！」って怒られてしまうのではないかというくらい急いで、控え室を飛び出しました！

「5分くらいで怒らないよー」
相変わらずの明るい笑顔。

5分遅れた私に、田島君はそう言って笑った。

「えらい！男はそのくらいじゃなくっちゃね！」

強気の口調でそう言ったけれど、正直いつも通りのニコニコした田島君を見ることが出来て、嬉しくて嬉しくて堪らない。

家の用事を抜きたいから。なんて理由で頼んだ「偽のお迎え」。

考えてみれば「何、人を都合よく利用してんだよ！」って感じよね。でも、田島君からはそんな素振り、ちつとも見えない。

本当に……、田島君は、優しい……。

でも、やっぱり服には気付いていないかな？

それがちよつと残念。

それに、おにぎりを作ってきたって言ったたら、すごく喜んでくれたし。

……それだけで、充分だよ。

今日はとても良い天気なので、外でおにぎりを食べようという事になった。

「さっ、行こう、行こう！」

すごく嬉しそうに歩き出す田島君。

おにぎりくらいでこんなに喜んでくれるなら、私のほうが嬉しい。ご機嫌な気分で、彼の後ろについて歩き出す。と、彼が、急にぴたっと止まった。

「その服、似合ってるよ」

え……？

振り返らず、そう言う田島君。

服のこと……、気付いてくれたの？

私は飛び上がってしまいたくなるくらい湧き立つ気持ちを抑えながら、「いつも通りの私」の声を出した。

「もうっ、あたりまえでしょっ。何言ってるのよ!」

似合ってるよ。

耳の奥に残り続ける、田島君の声。

「似合うのは当たり前でしょっ。田島君が選んでくれたんだから」

似合ってるよ。

体中を駆け巡る、田島君の褒め言葉。

田島君。気付いてくれたんだ……。

嬉しくて、胸がどきどきする。
顔がだんだん熱くなってきた。

お願い……。

田島君……。

今、こっちを見ないでね。

私、今きつと、真っ赤になってる。

嬉しくて、すごくニヤついた顔をしていると思うの。
そんなみつともない顔、あなたに見られたくないから。

田島君は振り返る事もなく、そのまま歩き出す。

私も後からついて歩き出した。
良かった。振り返らなくて。

外に出ると、とてもよい天気で、とても気持ちのいい風が吹いていた。

「お天気良くてよかった」

公園でおにぎりを食べようって言っている時に、曇りじゃ嫌だも

んね。

でも、そんなこと思ってるの、私だけかな？

「そうだね」

でも、田島君も、嬉しそうに楽しそうに、そう口にした。

彼の横顔が見える。

明るい爽やかな笑顔。

この夏の空より、明るくて爽やかな笑顔。

私が大好きな、田島君の笑顔。

それが今、私のすぐ傍にある……。

番外編・2人の夏物語「6

涼香・待ち合わせ」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

ちよいお休みが長かったのですが、また番外編再開します。

・・・・「夏物語」なのに、9月になっちゃいました。笑

好きな人に服とか髪型とか褒めてもらえるのって、女の子にとっては凄く嬉しいものですよね。

ましてや片思いの相手！・・・と、思い込んでいる・・・人！！
夢見心地ですよ。

さて、公園にデートのような昼食をとりに行きますよ。

次回は信君視点で！

では、次回！！

番外編・2人の夏物語「7 信・1つ目の指きり」

「涼香さんって、おにぎり作るの上手だね」

お世辞でもなんでもない。

本気でそう思ったから、そう言った。

でも彼女は、完璧にお世辞だと思ったらしい。

「はいはい。それはどうもっ。嬉しいわ」

少々投げやりな返事……。

お世辞じゃないよおお！

二人で文化会館の近くの公園に来ていた。

子供の遊び用というよりは、遊歩道が公園の周りを囲み、植え込みや芝生が多い公園。散歩とか休憩用。っていったところかな？

芝生の上とかだと、服が汚れるって気にする女の子が多いから、

「ベンチにしようか？」って言ったたら、

「芝生でいいわよ。男の人って、食べた後でゴロンツて寝転がりた
いものでしょ？」だって！

女姉妹らしいけど、涼香さんは妙に男の行動や言う事に、理解が
深いところがある。

「男っていうのは、こういうものだ」って、悟りきってる……
っていうか……。

「お茶でも買ってくるから。待ってて」

場所を決めて、公園外の自販機でお茶でも買ってこようとした才
しを、涼香さんがニコリ笑って手で制した。

芝生の上に下ろした、涼香さんが持ってきた淡いチェックの鞆。

彼女が中を開けると、中が銀色。どうやらクーラーバックだったらしい。

涼香さんはその中から、綺麗な色の風呂敷包みと水筒を取り出す。

「ほら。冷たい麦茶」

水筒を指差して、ニッコリ。

それだけかと思っただら、割り箸に取り皿、箸休めの漬物が入ったケースまで出てきて……。

すっげー、気の遣いよう……。

何か……。感動……。

更に、おにぎり、といっても多分、アルミホイルとかラップに包んだ物だろうと思っただら、風呂敷に包まれた朱色の一段重の中に、きれいなおにぎりが並んでいるじゃないかっ！

感動……。ぱーと2。

「はい。どうぞ。田島君」

立ったまま、バカみたいに涼香さんが用意してくれるその光景を眺めていたオレに、おしぼりを差し出す。

「立ってないで。座りなよ」

くすつと笑う顔が、凄く可愛い……。

「う、うん。ありがとう」

その場に腰を下ろしながら、おしぼりを受け取って「えっ？」と驚いた。

「おしぼり……。冷たくて、キモチーイ」

おしぼりが凄く冷たくて、ちょっと熱い外気で汗ばむ手に気持ちがいい。

クーラーバックに入れておいたって、こんなに冷たいままにしておける訳がないのに。すると、驚いているオレの顔を見て、涼香さ

んは種明かしをしてくれた。

「おしぼりと保冷剤を重ねておいたのよ。冷たくて気持ちがいいでしょう?」

「気が利くー!ー!ー!」

「顔拭いてもいいよお。ゴシゴシって。男の人って、そういう事するものなんでしょう?」

「・・・サ店のサラリーマンか・・・。」

笑いながら、からかうように言う彼女。本気なんだか冗談なんだか解からない。

「いや、やめとくよ。お行儀ワルイ、って思われてもイヤだしねーえ」

からかうような彼女に、オレもからかうように返す。

「遠慮しなくていいのに」

もう一枚のおしぼりで手を拭くと、涼香さんは更にもう一枚出して、重箱のふたの上に置いた。

「食べて居る時に手が汚れたら、これで拭いてね」

どこまで気の付く子なんだー!ー!ー!ー!

感動・・・ぱーと3・・・

「どうぞ」と勧められるままに、重箱にきれいに並んだおにぎりを手に取った瞬間。

それはきれいな三角おにぎり。

感動・・・ぱーと4・・・

「涼香さんって、おにぎり作るの上手だね」

本心でそう思ったから、自然と口から出た。でも・・・。

「はいはい。それはどうも。嬉しいわ」

お世辞じゃないんだよーおー!りよーかさあんっつ!ー!ー!ー!

でも、そう言った後で、ちょっと嬉しそうに言ってくれた。

「言ったことあるけど、よく妹達に作ってあげているから、三角おにぎりには自身があるの。褒められると、やっぱり嬉しいわ」

はにかみながら、紙コップに注いだお茶を渡してくれた。・・・
かつ、かわいい・・・。

「いただきます！」

お茶を受け取りつつ、一応「食事の前のご挨拶」ってやつをして、
ぱくつとかぶりつく。

「・・・・・・・・」

思わず、動きが止まった。

「あれ？塩でも効きすぎた？」

涼香さんが、心配そうにオレを見てる。

・・・美味しい・・・。

何だ？この塩加減。

すっげー、オレ好み。

「すっげー・・・、美味しい」

いつものテンションでハシヤグ事も忘れた。そんな事の前・・・。

感動・・・ぱーと5・

「すっごい美味しいよ・・・。涼香さん・・・」

本気で真剣な声を出してしまったせいだろうか。自分の分のお茶を注いでいた涼香さんが、ちよつと赤くなって慌てた。

「や、やーねえ、そんなに大袈裟に褒めなくてもいいよ。私みたいな料理経験が浅い人間が作ったもの！田島君のお母さんが作った物のほうが美味しいでしょ？」

「うーん、涼香さんの方が美味しいかもなあ。母さんに作ってもらったのも、ずっと昔だから、あんまり覚えてないんだよな」

そう言いつつ、もう一口。

「最近作ってくれないの？おにぎり」

「うん。オレの母さん、オレが8歳の時に死んでるから」

「……」

ぱくぱくつと一個目を食べ終わり、お茶に口を付けながら涼香さんを見ると、彼女は紙コップを手にしたまま、びっくりしたように可愛い口をちよつと開けてオレを見ていた。

「どうしたの？」

「あの……、田島君……。お母さん……」

ちよつと呆然とした声。

……ああ。またか……。

慣れているとはいえ、ちよつとオレの方が困ってしまう。

「8歳の時に死んじゃってさ、オレ、ずっと父さんと二人なんだ。父さんも忙しい人だから。おにぎりなんてコンビニかおにぎり屋さんでしか買ったこと無いよ」

「……ごめんなさい。私……」

母親の話を出した事で、オレに嫌な思いをさせたとも思ったのだろう。涼香さんの声に元気が無くなった。

「気にしないでよ。オレ、慣れてるから」

満面の笑みで笑いながら、おにぎりをもつひとつ手に取る。

中に入っている「はちみつ梅」は、ちゃんと種が抜いてあった。
涼香さんは本当に細やかな心遣いが出る子なんだと、改めて思った。

「あのさ。田島君」

二つ目に手を付けようとした時、涼香さんが思い切ったように身を乗り出した。

「また私……。作ってきてもいい？」

「え？」

「褒められて、いい気になっただけだから、笑ってもいいけど……。また、作ってきてもいいかな？おにぎり」

一生懸命に答えを求めるように、更に身を乗り出す。

そのうちに、ほとんど距離の無い状態に……。

早い話が、そのまま腕を回せば、涼香さんを抱き締めてしまえるくらいの距離まで近付いていた。

「いつ、いいの??」

涼香さんの申し出にもびっくりだけど、予想外に彼女があまりにも近付いてきて……。もっと、びっくり。

「いつ……。イヤじゃなかったら……」

涼香さんも自分の行動に驚いているかのように、ちよつと言葉にどもる。

「イヤなんかじゃないよ！でも、本当?!面倒じゃない?!」

「ない!全然ないからあ!」

涼香さんは力説して、俺からパツと離れる。

そしておもむろに、右手の小指を差し出した。

「指きり。……しよ」

真っ白な肌。

長くて、細くて、綺麗な指。

「絶対また作ってくるからね。・・・指きり。しよ」

オレは、差し出されたその綺麗な指に、自分の小指を絡めた。

胸が、痛いくらいに、ドキツとした・・・。

彼女と指切りをするのは「偽のお迎え」を承知した時から二度目。でも、相変わらずこの綺麗な指は、オレの体温を上げまくる。

指の力を入れたら、折ってしまいそうだ・・・。

「じゃあ、楽しみにしてる！」

オレはそう言って、笑って見せた。

絡めた指を、このまま離したくない。

そんなささやかな欲望に、心を囚われながら・・・。

こんにちは。玉紀 直です。

涼香ちゃんの心遣いに、もう感動しまくりの信君。

彼にはお母さんがいません。

お父さんと二人だけの期間が長い分、女の子にしてもらう心遣いが妙に嬉しかったりするんです。

好きな人とする「指きり」。

凄くドキドキしますよね。それも片想いの相手です。

小指だけの小さな繋がりではありますが、そのまま離しがたい名残惜しさがある気がします。

さて、お食事後の二人。

また、ある約束をしますよ。

次回は涼香ちゃん視点で!!

では、次回!!

「ごちそうさまー！うまかったあっ」

田島君はそう言つて、うーんっとノビをすると、ゴロンツとその場に寝転がった。

「ほら。やっぱり食べた後、寝転がった」

私はそんな田島君を見ながら、クスクス笑う。

田島君は、両手を頭の下に置いて枕代わりにしながら、横で重箱を風呂敷に包んでいる私を笑顔で見た。

「だってさ、本当に美味しかったし、腹いっぱい幸せだと寝転がりたくもなるだろ？それに、涼香さんも転がっても良いって言ってくれてたし」

「寝転がりたいものでしょ？」とは言っただけ、「いい」とは言つてない。

でも、そんな意地悪な事を言う気も起こらないくらい、田島君の笑顔は爽やかで悪びれていなくて……。

可愛い……。

ポツ……と、自分の頬が温かくなるのを感じて、私は田島君から目を逸らし、風呂敷をキュツと結んだ。

男の子に対して「可愛い」なんて失礼かもしれないけど、田島君は本当に男子にしては「可愛い」顔をしている。

いっつも葉山君と居るせいであまり目立たないけど、「あの」葉山君と並んで立っていて、何の違和感も無くさまになっている、っていうのは凄い事だと思う。

性格だって、明るくて一生懸命で……。

重箱や水筒をクーラーバックに入れながら、すっかり空になった

重箱を眺めた。

おにぎりだって、残るかと思ったのに全部食べてくれた。それも1時間かけて。

田島君は決して食べるのが遅いタイプじゃない。学校で見ている、お昼なんて10分くらいで済ませている。1時間も掛けたのは、きっと私に合わせてくれたんだろう……。

お話しながら食べていたから。っていう事を除いても、男の子が食事に掛ける時間にしては長すぎるもんね。

本当に、田島君は優しい……。

なのに私、悪い事を言ってしまった。

「オレの母さん、8歳の時に死んでるから」知らなかったとはいえ、お母さんの話を持ち出してしまった。

そんな事、話した事も無かったし、聞いた事も無かったから。いつも明るくて元気な田島君からは、そんなの想像も出来なかった。

申し訳なさそうにする私に、「慣れてるから」って笑ってくれた。

本当に、優しい。……その2。

おしぼりやお漬物のタツパをバックに戻して、何気なく田島君を見た私は、心臓が飛び出るほどドキツとした。

芝生に寝転がった彼が、ジッと私を見ている。

優しい目で。「男の子」の顔で。

いつも「可愛い系」の田島君の顔が、すっごくかっこ良く見える。……「欲目」???

うつん！ちがうつん！！！！

間違はなくそう見えるのっ！！

……何？何で見てるの？どうしよう。これ以上顔を合わせてい

たら、私、恥ずかしくて真っ赤になっちゃう。

目を逸らそうにも、田島君をずっと見ていたがる私がそれをさせてくれない。

私はどうしたらいいのか解からなくなって、苦し紛れに変な事を言ってしまった。

「何、見惚れてるの？」

何を言ってるの！私っ！それもへいぜんとっつ！！

自信過剰にもほどがある、って、思われちゃうでしょう！！

でも田島君は、呆れもせず馬鹿にもせず、相変わらず「男の子」の顔のまま言った。

「涼香さんって、本当に綺麗な顔してるな。って思ってたさ。うちの、っていうか、1年生の中でもピカイチだよな」

「なっ、何、馬鹿な事を言ってるのっ。ウチのクラスには『ミス西海』がいるのよっっ」

親友の美春。夏休み前の学園祭で、彼女は1年生ながら「ミス西海」に選ばれた。

女の私から見ても、彼女は凄く可愛いし性格もいい。多分彼女を好きにならない男子なんて居ないんじゃないか、って思ってしまうくらい。

・・・その美春を差し置いて、何て事を言うのっつ！

「うっん、でもさ、人の好みも理想も、ひとそれぞれだろ？オレは涼香さんの方が美人だと思う」

ニコニコしながら、恐ろしい事を言う。

「そんな事言ったら、美春にいつつも恥ずかしいくらいにくっついてる、幼馴染の御曹司が怒るわよっ」

苦し紛れに葉山君の話を出すと、田島君は軽く笑ってやっと私か

ら顔を逸らし、空を見上げた。

心臓が、飛び出してしまいそうなほど、ドキドキする……。

「オレは涼香さんの方が美人だと思う」何でそんな事言うのよ……。

嬉しいじゃない……。

いや、美春より美人だ。って言われたのが嬉しいんじゃない。

田島君に言ってもらった。っていうのが、嬉しいの……。

でもやっぱり、気を遣って言ってくれたんだよね？

本当に、優しい。……その3。

……って事は、あれよね？

田島君は、美春には興味が無いって事よね？

ホッと心が安心する反面、田島君は「美春に恥ずかしいくらいく

つついている、幼馴染の御曹司」の友人であることを思い出す。

葉山君って、恐らく美春を好きなんだろうと思うから、そう考え

ると友人の田島君は美春を対象外に見るしかないのよね？

……もしかして、そんな友人同士のみがらみが無かったら、美

春みたいなタイプが好きなんじゃないかしら。

そうよね。やっぱり、美春は可愛いし……。

「オレは、涼香さん……の顔、好きだなあ……」

空を見たまま、田島君が呟く。

「好き」って言葉に反応して、もう心臓が飛び出してしまいそう。

でも、「顔」かぁ……。ちょっと残念。

「ありがとっ。田島君の顔も、可愛くて好きよ」

またまた苦し紛れに出る言葉。

「あーっ！素直に「ありがとう」って笑顔で言えば、素直で可愛い女なのに！！」

今だけ、自分のこんな性格が恨めしい。

空を見上げていた田島君。ゴロンツと転がってうつ伏せになると、腕を顔の下で組んだ形で私を見た。

「涼香さんの家ってさ、ここから30分くらいだよな」

「え？歩いて？」

「うん。．．．ああ、でも、オレで30分くらいだから女の子だともっとかかるかな？」

「40分か、45分くらいかしら」

「45分か．．．。涼香さんにそんなに歩け、っていうのも可哀想だよな。第一、涼香さんってそんなに歩いたこと無いよね？」

「．．．え？」

「帰る時、その荷物持ってあげるね。って言おうと思ったんだけど、そんなにかかるならタクシーで帰ったほうがいいね」

「．．．もしかして、送ってくれようとしていたの．．．？」

「もう少し食休みしたら、タクシー乗り場まで送っていくよ」

「ばっ、馬鹿にしないでよっ！」

私は慌てて反論した！このままだと、タクシーで帰されそうだったから。

いきなり大きめの声を出した私を、田島君はびっくりした顔で見る。

「わっ、私！足腰強いんだからね！45分くらい楽に歩けるわよ！」

あっ、歩いた事ないけどっ！

「日舞やつてる人間は、意外と体力あるのよ！文化系だと思ってバカにしないで！」

体力．．．あつたかなあ？．．．まっ、いいか？

「ごっつ、ごめん、ごめん!!」

田島君は慌てて上半身を起こし、ちよつと眉を寄せた私の前で両手を合わせた。

「馬鹿にしたわけじゃないよ。ごめんね」

「・・・馬鹿にされた、なんて思つてない・・・。」

「大丈夫よ。送つて」つて、軽く言えばいいだけだったのに、焦つてあんな怒つたような話し方をしてしまっただけ。

タクシーで、一人で帰るのが嫌だった。

送つて欲しかつたんだもん・・・。」

「じゃあ、オレ帰る時送るからさ。そのバック持つてあげるよ。物はなくなつたけど、重いだろう?」

「・・・うん・・・。」

ちよつと大きな声を出してしまった私に、嫌な顔ひとつしない。相変わらず笑顔で接してくれる田島君。

本当に、優しい。・・・その4.

「あのさ、田島君」

その優しさに、私は少々調子に乗る。

「また同じ様な集まりがあるんだけど、またお迎えに来てもらつてもいい?」

はつきり言つて、ズーズーしい。

彼だつて予定があるだろう。私が指定した日に、何か用事があつたら。優しい彼のことだ、彼は無理をして私に合わせてくれるのかもしれない。

それでも、田島君に会いたい。という我侷な私が、彼の返事を期待する。

そして彼は、期待通りににこっと笑った。

「いいよ。いつ？」

「迷惑じゃない？」

「本当に私のために時間を割いてくれるの？」

「涼香さん？」

「なかなか返事をしない私に田島君が不思議そうに問い掛ける。

「本当にいいの？」

「疑う私。」

田島君、苦笑い。

「当たり前だろ？一回引き受けたんだから。そんな遠慮しないでよ。・・・ほらっ」

田島君が、右の小指を差し出した。

「え？」

「涼香さんの真似で悪いけどさ。指切りしようよ」

「屈託の無い笑顔。それに誘われるかのように、私も指を差し出す。

「約束するよ」

「彼が優しく笑う。」

私は、自分の小指を、田島君の小指に絡めた。

さっきは、またおにぎりを作ってきてあげる。という約束をした。その時は、私から指を差し出したけれど・・・。

凄く、ドキドキしたの……。

でも、今も凄くドキドキしてる。

田島君の指。

私より大きくてがっしりしてて……。
彼みたいに、凄く温かい……。

「じゃあ、絶対よ」

私はそう言って、笑って見せた。

このままずっと、彼と小指で繋がっていたい。

ちょっとはしたくない想いを、心に秘めながら……。

こんにちは。玉紀 直です。

好きな人に自分を褒めてもらえるのって嬉しいですね。

近くに、どう考えても自分より上の人間が居るのに、それでも自分を褒めてくれる。

涼香ちゃんも、田島君に褒めてもらえて凄く嬉しかったです。

再び「約束の指きり」をする2人。

今度は信君から指を差し出します。

プチらぶらぶな指切りは、書いているほうとしてもホンワリした気持ちになってしまいますね。

でも・・・何となく信君、もう少しで告白できそうな雰囲気があったような・・・。

今回はその信君視点で！

では、次回！！

番外編・2人の夏物語「9 信・背中の彼女」

「誰が体力あるって？」

オレはちよつとニヤニヤしながら、目の前のベンチに座る彼女を、からかうように見た。

「……………」

赤くなって軽く下唇を噛みながら、「意地悪」とても言いたそうな顔をして、目だけでオレを見上げる。

その表情の、可愛らしい事ったら！！

45分の道程を、オレ達は文化会館から涼香さんの家へ向かって歩き出した。

涼香さんの歩調に合わせてられるように、ゆっくりと…………。もちろんオレは、出来るだけゆっくり歩いたよ。

だって、そのほうが長く一緒に居られるし、並んで歩いていられるし。

他愛も無い話をしながら、それでも会話は途切れる事無く。彼女の笑顔も途切れる事無く。オレ達は歩き続けた。

涼香さんはやっぱり綺麗だから、途中ファーストフードやコンビニの店先で溜まっている、中学高校くらいの男どもがチラツと視線をよこすけど、オレが一緒なんで「男連れか」とでも言わんばかりにちよつと嫌そうな顔をして目をそむける。

ふふーん、ザマーミロ。

今、涼香さんの隣に居る権利を持っているのはオレなのっ！

ちよつとした優越感が生まれる。

これで手でも繋いで歩いていれば、疑う余地も無く「彼氏彼女」

に見えるんだろっな……。

ちょっと残念……。

まさか、「手繋ぎ」とも言えないしな。

そんな事を考えつつ30分ほど歩いた時、何となく涼香さんの歩くスピードが落ちてきた事に気づいた。

いや、最初からそんなに早く歩いていた訳では、もちろんないけど。でも、明らかなスピードダウン。

「どうしたの？」

すると彼女は立ち止まり、ふくらはぎを摩りながら恥ずかしそうに言った。

「……ごめんなさい。脚、つりそう」

「日舞やってる人間は、足腰強いんじゃないっけ？」

「もうっ！ たじまくんっしっこいっっ！」

気休め程度に日影を作るバス停前のフード付きベンチで、「歩ける」と言ったのに歩けなかった彼女を、まるで弱みを握ったとばかりにしつこくからかうオレを、涼香さんが一喝する。

しかしその一喝も、あまり迫力が無い……。

ちよっと赤くなって、困った口調。

どっちかっていうと……。

むちゃくちゃ可愛いっ！！！

「本当は歩けるの！ 今日ちょっと慣れないサンダル履いてるから

っ、脚がつりそうになっただけ!!」

あくまでも「歩ける」と言いたげに意地を張る。

足元の白いサンダルは、甲の部分でクロスした靴地に控えめなラインストーン。踵は低め。でも、長いこと歩く時にはおススメ出来ないって感じ。

派手なものでは無いけど、涼香さんが履いてると凄く落ち着いて見えて、凄く似合ってる。

……ってというか、こういう涼香さんも可愛いなあ……。

っと、思っ、フと葉山の事を思い出した。

あいつも事あるごとに「美春は可愛い、美春は可愛い」って、うるさい。

なんか……感化されて無いか？オレ……。

その時、目の前にバスが一台停車した。

バス停にはオレ達二人だけ。乗るのかと思っただのさ。搭乗口が開く。降りる人は居ないみたいだ。

路線名を見ると、涼香さんの家の近くで停まるバス。客もそんなに乗っていない。乗っても彼女を座らせてあげる事は出来るだろう。「乗る？」

オレがバスを親指でしゃくると、彼女はムキになった。

「乗る訳ないでしょっ！歩ける、ってば!!」

オレはバスの窓ガラス越しにこちらを見ている運転手に向かって、手のひらを左右に振り「乗りません」の合図をする。

ドアは閉まり、バスはそのまま走り去った。

「もうちょっと休めば……。歩けるわよ……」

さっき、あまりにもムキになってしまったと思っただのか、涼香さ

んの声が大人しくなった。

普段は気が強い涼香さん。

きつと「歩ける」って言ったのに歩けなくなってしまった事が悔しいんだろう。

まあ、元々、帰りはタクシーでも帰るつもりだったところを、オレが涼香さんと居たいばかりに「送る」なんて言っちゃったんだ。

彼女だって、歩いて帰る羽目になるとは思っていなかっただろう。歩けなくなっちゃったのは、ちよつと、オレのせいかな・・・？

オレは、持っていたクーラーバックを一度下に置くと、ベンチに座る彼女の前に、背中を向けてしゃがんだ。

「はい。どうぞ」

「は？」

いきなり向けられた背中。首を傾げる彼女が想像できる。

「おんぶしてあげるから。ほらっ」

「・・・・・・・・」

10秒。沈黙。

「いつつ、いいわよおっつっ!!そんなのっつ!!!!」

乗っかってくれるのを待っていた俺の背中に、変わりに乗っかってきたのは、慌てふためく涼香さんの声。

あれ?こんな動揺する涼香さんって、初めてかも・・・。

「だって、歩けない、バスも乗らない。っていったら、どうすんだよ。ずっとここにいんの?」

肩越しに彼女を見ると、オレと目が合っつて顔を逸らす。

でもその顔が真っ赤になっていて、何となくコツチまで照れてしまった。

「おんぶ」は、恥ずかしかったかな？

そうだよな……。何となくで言っちまったけど、上半身をくっつけなきゃならないし、なんつーか、背中をまたぐような……。脚も開くし……。

「……」

やばいつつ！！！

想像しただけで「オレ」が「正直」になるっ！

ここでそれはマズイ！！！！

オレが歩けなくなるっつ！！

「いいから！ほらっ」

オレは苦し紛れに、ふくらはぎを摩っていた涼香さんの両腕を掴むと、彼女に抵抗する隙を与えず、その腕をオレの肩から回させて勢い良く立ち上がった！

「きゃっつ！」

涼香さんは焦った声をあげるが、オレは気にせずそのまま両脚に腕を回して、彼女の体を一度ポンツと上へ上げ、背中でバランスを取る。

「たっ、たじまくんっ！おろしてよっ！」

「うるさい！歩けない人は黙ってなさい！」

抵抗する彼女に、珍しくオレから一喝。

てつきり「何よ！男だと思っただけで威張ってんじやないわよ！！」と返ってくるのかと思っただけ、彼女は反対に「はい……」と背中で呟いて大人しくなった。

凄く珍しいけど、顔が見えないまでも、そんな素直な彼女もとて

も可愛く感じてしまい、オレはまたまた気持ちが悪く落ち着かない。

「あの、さ……、もう少し寄り掛かってよ。……背中では立てられず、落とすそうでおっかないから」

腕を伸ばして体を離し気味にしている彼女。

「落としそう」……なんて理由は付けたけど、本当は違う……。

「うん……。ごめん……」

大人しい涼香さんの声と共に、背中が凄く温かくなった。

「これでいい？」

「……うん」

オレは片手を一度離し、クーラーバッグを肘に掛けてから、涼香さんの脚を抱え直した。

「さっ、行くよ」

「……田島君の足なら、あと15分の道でも5分くらいで着いちやいそう」

「……そんな訳は無い。」

そんなに早く歩くつもりなんて無い……。

「ゆつくり歩くと。オレも、慣れないもの背負ってるからさ、脚がついたら困るし」

「やつ、やあね……。そんなに重い？」

「軽いよ」

涼香さんは軽い。

重いのは……。

オレの男として正常な下半身……。

早く、なんて歩ける訳は無い……。おまけに腰は引き気味だ。

「30分くらい掛かるかもよ……」
「……いいよ」

涼香さんの体温を背中を感じる。

背中が温かくて……柔らかい……。

「もう少し寄っ掛かってよ」彼女を感じたくて、ついつい口から出てしまった。

下心丸出し……。涼香さん、気づいてなかったかな？

オレがそんな、「やーらしっ」って言われそんな事を考えてしまったなんて……。

でも、止まらない。

自分が止められない……。

一日、一日、彼女が好きで堪らない。

「好きだ」って……

抱き締めてしまいたい……。

「田島君の背中……、気持ちいい……」

どことなく嬉しそうな、彼女の声が背中でした。

オレ、今晚・・・

・・・絶対に、眠れない・・・。

こんにちは！玉紀 直です！！

うわー！！！！一ヶ月ぶりです！！！！

ごめんなさい！としか言いようが無いです！

とりあえず、明日も更新します。

後2回で、番外編も完結です。

大好きな女の子が、背中で身を預けている。

「正直」にもなりますよ！。思春期ですもん！（にやにや）

本編の「理想の〜」で信君を書いていない期間が結構長いので、
なんか懐かしくて、こんな正直な信君が妙に可愛い……。

さて、次回は涼香ちゃん視点！

この「初めての待ち合わせ」とは違う日の話になりますが、また
急接近してしまうようなシチュエーションがっつ！！

では、明日！！

番外編・2人の夏物語「10 涼香・彼の背中」

「これに乗ってきたの？」

私は目の前の田島君を見て、ちよつと驚いた声を上げてしまった。

「うん。そうだけど？」

いつもの「爽やか君」の笑顔で、田島君は笑う。

・・・自転車に跨って。

「偽のお迎え」という名目で、この夏休み、田島君に会うのは5回目。

いつもは昼くらいの時間なんだけど、今日は昼から。

「3時のオヤツの時間も近いしさっ。甘いモンでも食べに行こうよ」と誘ってくれたのが嬉しくて、ウキウキと本日待ち合わせだったビルを出た。

すると彼は「ちよつと待ってて」と言っつて、ビルの出入り口の横に停めていた自転車の、盗難防止用ロックを外し始めたのだ。

なんて言うか・・・、タイヤが太い、大きな自転車。女の子とか、自転車通学している男子とかが良く乗っているような奴じゃなくて、男の子っぽいつていうか、雑誌でしか見た事がないけど、マウンテンバイクっていうの？あんな感じのガツシリした自転車。

「これ、田島君の自転車？」

「オレのじゃなかったら、オレ、堂々と涼香さんの目の前で自転車泥棒した事になつちやうよ」

・・・それもそうだわね。

「今日は、ちよつと場所も遠かったしさ。『歩く』って距離じゃなかったから自転車にしたのだ。もちろん帰りはこれで送ってあげる

よ

「え？後ろに？乗るの？」

私がちよつと驚いた顔で田島君を見ると、彼はその反応が面白かったのかアハハツと笑った。

「大丈夫だよ。飛ばしたりしないから。・・・本当はさ、葉山みたいにバイクでお迎えっていう方がカッコいいんだと思うんだけど、オレ、バイクの免許持ってないし」

「うっん！葉山君はかっこつけ過ぎ！田島君は自転車の方が似合ってるよ！」

・・・これって・・・褒め言葉？？

自分でも何かおかしいなと思うけど、田島君もおかしかったらしくて、声を上げて笑い出した。

「自転車の方が似合ってる、かーあ！ありがとーっ！」

お礼を言われるほどの物でもないとは思っけど、失礼じゃなかったかな？

私は恐る恐る、田島君が握っている太いハンドルを指先で撫でてみた。

「頑丈そうな自転車だね・・・なんか、田島君のイメージじゃないなあ・・・」

「あれ？今、自転車が似合ってるって言ってくれたじゃん」

「なんかさ、田島君は『ママチャリ』ってイメージだったんだもん」
登校の時、男の子も良く乗ってる。・・・でも、こういう大きな自転車に乗ってる人に、そんな事言うのは失礼かな？

かっこ良さではコッチの自転車の方が上だし。

でも、優しい田島君は、もちろん気分を害したような顔なんてしない。

それどころか、自慢げな顔をして胸を張った。

「オレ、ママチャリも早いんだぞー。ママチャリ競走だけは唯一、

葉山に勝てるしっ」

「ええっ！うそっつ！！」

思わず心から驚いた声が出てしまった。・・・はっ、葉山君が、誰かに負けるところなんか見たことないしっ！

すると田島君、へへッと笑って頭に手をやった。

「タッチの差で1秒・・・って感じ？それも、スタートした瞬間に近くを光野さんが通って、一瞬ヤツがよそ見をした。っていうおまけ付き」

「・・・」

二人で顔を見合わせ、同時に声を上げて笑い出す！

「なあんだあ！それって、びみよー！！」

「でも！勝ちはず勝ちー！！」

「田島君、セコイぞー！！」

もうっ！田島君といると、本当に楽しい！！

実は田島君と会う前、ちょっと気分が落ち込んでいた。

最近、御呼ばれや集まりが有る度に、私が途中退場している事を父様に咎められたのだ。

それも、「友達と約束があつて、迎えに来てくれるから途中で抜きたい」という事を父様には言わず、母様にばかり言っていたので、それもまた気に入らないらしい。

夏休み中に田島君に会えるのも、これで最期かもしれないな・・・。

これ以上「抜け出し」をしたら、もつと父様を怒らせてしまいそうだし。

下手をしたら「友達、って、誰が来ているんだ?!」なんて言って、見にきかねない。

長女のせいかな私には特に口うるさい父様が、男の子が迎えに来て

る。何て知ったら・・・。

「この先にさ、メロンクリームソーダーがスツゲー美味しいサ店があるんだ。・・・って言っても、ウチの事務所に居る受付のオネーサンが教えてくれたんだけどさ。そこ行こうよ！」

「メロンクリームソーダー？」

「うん。涼香さん、好きなんだろ？」

・・・そんな事、言っただけ？ううん、確かに好きだけど。

考えてみて、ちよっと思いだたる節があった。

あれは確か、キャンプに着ていく服なんかを選びに付き合ってもらった時、帰りにハンバーガーを食べに行つて、私がメロンソーダーを飲んでいたのを見て田島君が・・・。

「それにアイス乗つけたヤツって、美味しいよね」って言ったから、

「あ、私ね、ジュースとアイスを混ぜないように食べるの上手よ」
って答えた。

「大好きだから、良く食べるんだ」そうやって言ったのを、覚えていてくれたんだ。

そう考えると、何となく感動・・・。

「ありがとう。田島君。うれしい」

我ながら声が嬉しそう。でもなんか、クリームソーダー食べに連れて行ってもらえるのが嬉しいみたいに聞こえてないかなあ・・・。

私はっ！田島君の優しさが嬉しいのっっ！！！！

田島君は、ニコツと笑って後ろを指でしゃくると、ハンドルを握った。

「じゃあ、乗って。またぐのが嫌だったら、横座りでもいいよ。ただ、後輪にスカートが絡まないように、足の間には挟むか前の方に寄せて手で押さえててね」

実は今日は膝下スカート。こんな事ならパンツにでもすれば良かったな……。

お尻を乗せやすいように、田島君はちょっと自転車を傾けてくれた。

私は横座りで静かに乗り、スカートをまとめて足の間には挟むと、両手で田島君のＴシャツの背中をきゅっと掴んだ。

「ねえ、涼香さんさ、自転車の後ろって乗ったこと無いだろ？」

「え？うん」

何で分かるんだろ？田島君は肩越しに振り返り、ニヤツとする。

「そんな掴まりかたしていたら、落ちるよ」

「そう……なの？」

でも、どこまで掴まって良いものなのかしら？

恥ずかしかつたけど、私は両手で田島君の腰に捕まった。

「まだ駄目。落ちるよ」

腰から腕を回す。とりあえず体は離し気味に、お腹のところを指を組んだ。

「うーん、もう少し、しがみついて」

少し体をつける。なっ、何か、ドキドキしてきた！

「腕！グツと回して！」

じれったくなってきたのか、ちょっと田島君の口調が厳しくなっ
た。

「こ、こっつ?」

「もっと、ギユツツ、って掴まって!」

「え・・・?ぎゅっつ??」

「早くっ!!ほらっ、いくよ!!!!」

私の準備も整わないうちに、田島君は勢い良くペダルをひと漕ぎ!

「きゃっ!」

スムーズに動き出す自転車。

確かに私の乗り方が甘かったらしく、動き出した瞬間、その勢いに体が置いていかれるような錯覚を起こし、私は思い切り田島君に抱きついた!!

「O、K!」

どことなく嬉しそうな、彼の声。

私・・・私・・・

体が固まってしまった。

初めて乗った、自転車の後ろだから・・・?

うっん。違うの。

田島君にガツチリと抱きついてしまっている自分に、驚いている。

以前してもらった「おんぶ」の時も恥ずかしかつたけど・・・。

こっ、これはっ、その比じゃないっつ!!!!
体が硬直する。

胸のドキドキが、体中を包む。

2、3回深呼吸をして、落ち着こうと努めた。

腕を回した、田島君の体……。

やっぱり男の子だなあ……。ガツシリしてる……。

ぴったりと抱きついて、くっついてしまった上半身。

彼の温かさを感じる……。

自転車が走る。風が起きる。

彼のちよつと男の子っぽい匂いが、鼻先をくすぐった……。

田島君の背中……。きもちいい……。

以前、おんぶしてもらった時も、同じ事を思ったっけ。

この背中を……。この温かい体を、自分の物にしてしまえたら、
どんなに幸せだろう……。

そんな事を考えてしまい、ちよつと赤くなってしまった。

……。ヤダ……。何を考えているんだろう……。

そうは思いつつ、ハンドルを握る手を思い出す。

私なんかより、大きくてシツカリとした手。

あの手に抱き締められたら、どんなに幸せだろう。

ばっ！ばかっつ！！また変なこと考えて……！！

こんな事考えてるなんて田島君に知られたら、「やーらしっ」って思われちゃうじゃないのっっっ！！！

好きだから触れたい……。

好きだから触れて欲しい……。

一緒に居ると、そんな気持ちが止まらない。止められない。

一日一日、彼が好きで堪らない。

「ずっと自転車こいでいたいなー！」

そんな楽しそうな彼の声が聞こえる。

彼を感じる為なら、父様に怒られたっていいや。

そんな、親に言わせるところの「悪い子」な私の部分が、耳元で囁く。

彼と一緒に居たいでしょ……っ……。

番外編・2人の夏物語「10 涼香・彼の背中」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

二人して同じ様な事を思ってますねー！

以前テレビのトーク番組を見ていたら

「やっぱ、学生の頃、彼女が出来て一番最初にしたのは自転車の二人乗り！男として、あれは外せないですよ！」

と、今人気の若手俳優さんが語っております。

「こう、抱きつかれた腕の感じ、っていうか、まあ、結局のところ、背中に当たる、胸の柔らかさが堪えないんですね！」

・・・正直な人だなあ・・・。と思いつつ大爆笑。

そうかー、自転車かあ・・・。

と、考えつつ、使っちゃったー！

まあ、信君視点の時は「おんぶ」でしたけど。

でも、自転車の二人乗りでドキドキしてしまうのは、女の子だって同じ。

だって、好きな人に背中から抱きつくんですよ！

思春期は男の子だって女の子だって同じ。

涼香ちゃんだって、ちょっとはしたない事くらい考えちゃいます！（笑）

さて、いよいよ、今回は番外編の最終話。

今まで信君涼香ちゃん交互の視点で書いてきましたが、最終話は両視点でいくので、三人称（玉紀のいつも通りの書き方）で行きます。

もう！いいから、お前ら付き合え！って言われるくらい、学君と美春ちゃんに、ある意味負けなくらいのじれったさで！

最終話は、明後日更新！！

（明日は違う連載の更新日なので・・・）笑（

では、次回！！

番外編・2人の夏物語「最終話・いつかふたりで・・・」(前書き)

最終話、いつもよりちょっと長めです。

番外編・2人の夏物語「最終話・いつかふたりで・・・」

「うわぁ、美味しい！今日の」
聞いているほうが思わず笑みを零してしまいそうなほどに嬉しそうな声。

そんな声をあげる涼香を、信は満面の笑みで見詰めた。

「涼香さんの好みだろ？」

その問いに涼香は同じく満面の笑みを作り、こくりと頷く。

どちらかといえば「美人顔」の彼女。

しかし、こんな笑みを作る時はどことなく可愛らしく子供っぽい。それを見詰める信の心の中はもちろん・・・。

りょーかさんっ！かわいいっっ！！かわいいっっ！！！かわいいっっっ！！！！

と、親友の学に感化されているとしか思えないような反応を、起こし続けているのだ・・・。

主に若者が多い、昼時のハンバーガーショップの店内席。

恒例の「お迎え」に参上した信は、ちょうど昼時だった事もあり「ハンバーガー食べに行こう。今日のは絶対『美味しい』から」と涼香を誘った。

今日のお迎えは駅前のホテルだったので、もちろんその近くにもハンバーガーショップはあったのだが、信はわざわざそこから三十分自転車を飛ばし、彼らが通う西海学園高校の近くにある店へやってきた。

どうしてわざわざ？と涼香は思ったが、涼香を先に席へ座らせ、信はハンバーガーやポテト、ジュースとサラダなどが乗ったトレイ

を持って席へ着くと、最初に言ったのだ。

「ポテト食べてごらん。絶対涼香さん好みだよ」と。

ファーストフードのポテトは、時間帯や揚げる人間の技術で風味や食感が変わる。

涼香の好みは、揚げすぎているかカリカリの食感。そして、ちょっと効いた塩味。

この二つが揃った日は「当たり」。

そしてその事を、信は以前、一緒に買い物に行った帰りにハンバーガーを食べに行つて知つた。

「美味いだろ？もう少ししたら揚げ立てがもう一個来るからさ。いっぱい食べなよ」

涼香はポテトをつまんでいた手をちよつと止めて、ジツと信の顔を見た。

「・・・田島君、どうして今日のポテト美味しい、つて知ってるの？」

「絶対『美味しい』」そう言つて信は涼香を誘つたのだ。

何かを知っているとしたか思えない信に、涼香は不審そうな顔をす

疑いの目を向けられた信は、手にしていた照り焼きバーガーの中に挟まったレタスの少なさに少々不満を感じつつ、「そんな不満も、涼香さんの笑顔で解決！」とばかりに、笑顔ではない彼女に笑いかけた。

「仲がいい二年の先輩がさ、ここでバイトしてるんだ。前にもここで食べた時、ポテトの揚げ方が上手で涼香さん気に入ってた？で、先輩にその日ポテトを揚げていた人知ってるかどうか訊いたんだ。そうしたら、大体シフトが同じ人らしくてさ。今日も入つてつて昨日電話で先輩に聞いたから、ポテト揚げるの頼んだんだよね」

え？もしかして……私の為？

涼香の心に「期待」が横切る。が、目の前の信が自分のポテトを美味しそうに食べているのを見て、「自分が美味しいのを食べたいからかなあ？」とも思う。

実際涼香のためなのだが……。

「はい、お待たせー」

その時、二人の間に「揚げ立てです」と言わんばかりの熱そうなポテトが置かれた。

「あつ、先輩。すみません」

今ポテトを持ってきた、店の制服に身を包んだ少年を見上げながら、信が礼を言う。どうやらこれがバイトをしている先輩らしい。

涼香もその少年を見上げる。

どっちかといえば女の子受けしそうな顔立ちに、染めているのか少々長めの茶髪。よく学と立話などをしている上級生の中に見かける顔なのを、涼香は思い出した。

葉山君の遊び仲間関係の知り合いなのかな？などと涼香が考えていると、少年は、信が連れている女の子はどんな子だ？とばかりに涼香に目を向けた。

「ええっ！君、菱崎涼香さんっ???!」

少年が驚いた声を上げる。

「え……あ、はい……」

つられて涼香も驚く。……なんで私の事知ってるの？

「何だよ！田島ちゃんの連れ、って、菱崎さん??!まさか、付き合ってるの?!」

「ちっ、違いますよ!」

「付き合っただけなんかに居ません!!」

二人同時に慌てて否定。

互いに、相手に下手に意識されたら恥ずかしい。という気持ちから出た「否定」だったのだが、反対に相手がすごい勢いで否定したので、互いに少々落ち込む。

・・・どっちもどっちだ・・・。

「ホントー?じゃあさ、ここで会ったのも何かの縁だし」

少年は二人の返事を聞いて安心した笑顔になると、信よりも高いであろう長身を屈め、テーブルに手を付けて涼香を覗き込んだ。

「おれと付き合おうよ。菱崎ちゃん」

「は??」

いきなり何言っただけなの?涼香は目を丸くし、信は驚いて思わず立ち上がりかけた!

「一年の菱崎さん、っていったらさ、光野さんに次ぐ美人で有名じゃない。光野さんは葉山のガードがきつくて声もかけらんないしさあ。それにしても田島ちゃんの友達だとは知らなかった。こんな美人と付き合ってたなら、ちょっとした自慢だよ」

少年は学の「夜のお出かけ」でよく一緒になる遊び仲間だ。女癖があまり良くないのも、信は知っている。

バイトだって、元々は遊び半分みたいなものだ。学生など若い客層が多いこの店の、女の子狙い。

「いいだろ？おれって楽しい人だよ。絶対に退屈させないからさ。
・・・ほらっ、田島ちゃんも応援してくれよ」

出来るかあああ！！！！

信が相手は先輩だという事も忘れて怒鳴り付けようとした時、涼香が一言、冷静な声で言い放った。

「すみません。私。好きな人が居るので」

ハンバーガーを食べ終えて、ジュースのカップが空になっても、二人は席から動かなかった。

見事に振られた少年はすぐに仕事へと戻ったが、涼香の話に返事をするのも辛いほど無口になってしまったのは信だった。

好きな人が居るので。

そんなの・・・ないだろ・・・？

だって、そんな素振り一回だって見せた事ないじゃん。
何だよ・・・。

告白もしないうちから、失恋かよ・・・。

あと三日で新学期が始まる。

夏休み中楽しかった「偽のお迎え」も今日で終わり。

今日の帰りに告白しよう。

信はそう決めていた。

ああ……、もっと早くに「好きだ」って言うっておけば良かった……。

思えば最初のお迎えの日、おにぎりを食べた公園で、一度告白しかかった。せつかく「好きだよ」まで口から出たというのに、その後どうしても照れくさくて「涼香さんの顔」と言ってしまった……。

オレのばか……。

でも、その時告白してたって、好きな奴が居るんじゃないか？

一緒に居て楽しかった夏休みの思い出が、走馬灯のように駆け巡る。

きつと、死ぬ直前ってこうやって色々な事を思い出すんだろうなあ……。

オレも今、もう死にそうだ……。

限りなく落ち込む信。

そんな信を見て、涼香は申し訳なさそうに声をかけた。

「ごめんね田島君。仲の良い先輩に、あんな事言っちゃって」

「あ、いや、別に……」

「後から怒られたりしない？連れが生意気だ、って……」

「そんな事ないよ。そんな人じゃないし。……それより、こっちこそ、……ごめん」

あまりにも涼香が申し訳なさそうに言うので、信は思わず謝り返した。

「好きな奴が居るのに……。オレ、連れ回しちゃって……」

楽しかった。

一緒に居る事が、あまりにも楽しかった。

涼香さんの頼みなら、何でも利いてあげたかった。

彼女の笑顔が見たくて、その為になんでもしたかった。

涼香さんが、好きで好きで、堪らなくなった……。

「涼香さんと居ると楽しくてさ。……ちょっと、調子に乗ってたかな……」

「偽のお迎え」を頼まれただけ。毎回その役目を終えれば、すぐにバイバイで良かったのに。

一緒に買い物に行ったり、食べに行ったり。最後は必ず彼女の家まで送っていく……。

「本当に……ごめん……」

「謝らないでよ！」

急に涼香が声を荒げた。

信が驚いて涼香の顔を見ると、彼女は切れ長の綺麗な目を吊り上げて、睨むように信を見ている。

「何、真に受けてるのよ！あんなの、嘘に決まってるじゃない！……嘘なんかじゃない……」

「好きな人が居るなんて嘘よ！ああいうタイプの男に子は、ああでも言われなきゃ諦めないでしょう?!」

・・・田島君を好きなのは、嘘じゃないの・・・。

「私だって、バカじゃないのよ！嫌だったらお迎えなんて頼まない！楽しくなかったら、こんな所に来ないし！一緒にだって帰らない！」

楽しかった・・・。

一緒に居て、とてもとても楽しかった。

田島君にお話して欲しくて。

田島君に触れて欲しくて。

ずっと彼を感じていたくて・・・。

田島君が、好きで好きで、堪らなくなった・・・。

泣きたいくらい。

あなたが好き・・・。

怒っているのかと思ったら、今度は目に沢山涙を溜め始めた涼香。そんな涼香を見ると、信は胸が詰まる思いがした。

どうして、泣いてるの？涼香さん。

泣いた顔の涼香さん、もちろん可愛いよ。

でも・・・、

涼香さんは、毅然とした顔や笑った顔が、最高に綺麗なんだ。

桜の木の下に咲いていた、牡丹の華。

その凜とした立ち姿がとても綺麗で。

オレはその時から、涼香さんから目が離せない。

「ありがとう。涼香さん」

信は片手を伸ばし、空のカップに添えられたままだった涼香の手を静かに包み込んだ。

涙が流れてしまいそうになっていた涼香だが、あまりにもドキッとしてその涙も引っ込んでいってしまいそうだ。

「オレも、凄く楽しかった」

告白するのは・・・やめよう。

「こんなに楽しい夏休み、今まで無い、ってくらい……。楽しかった」

涼香さんは、誰かに「付き合おうか？」って言われたくらいで、こんなにも動揺して泣いてしまうような子なんだ。

「涼香さんに、お迎えのご指名もらえて、本当に嬉しかった」

そんな彼女に「好きだ」なんて言ったら、この先口も利いてもらえないほど驚かしてしまう。

「ありがとう。涼香さん」

君が好き。

凄く凄く、心が追いついてこられないほどのスピードで、君の事を好きになって行っている自分が居る。

「私も・・・楽しかった」

涼香は、優しく包まれた手の感触を幸せに感じながら、涙が溜まった目を空いている方の手で拭い、そして信を見て微笑んだ。

「ありがとう・・・」

あなたが好き。

とてもとても、自分では止められないくらいのスピードで、あなたを好きになっていく自分が居る。

もしかして田島君も私の事好きでいてくれる？

あなたがあまりにも私に優しくして、時々そう思ってしまうことがある。

もし、あなたに告白なんかされたら・・・。

そう思っって、喜ぶ自分と・・・。

怖がる自分も・・・。

そんな夢みたいな事・・・。

あるかどうかなんて解からないけど。

それでも・・・。

いつかあなたと、手をつないで歩きたい。
指切りみたいに小指じゃなくて。

しっかりと、決して離れないくらいの強さで手をつないで。

「いい人ね。田島君って」

いつもの、「気の強い涼香」の顔で、涼香はにこっと笑う。

思い切り・・・強がって・・・。

「まあね。よく言われるよ」

信も、いつもの「明るい爽やかな可愛い顔」でにこっと笑った。

押さえ切れない想いを、無理矢理隠して。

いつか・・・。

いつか君を、この腕で正面から抱き締められる日まで。

オレはずっと、君の事、好きでいるから。

いつか・・・

二人の想いが

本当に通じ合う日を信じて・・・。

いつの日か・・・。

番外編・二人の夏物語

END

番外編・2人の夏物語「最終話・いつかふたりで・・・」(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

うわー！終わりました。番外編！

信君と涼香ちゃん、結局今回は告白できず！

・・・って、というか、信君が遠慮しちゃうんですね・・・。

ここから二年！二年後の高三で、二人の想いは通じる訳ですが・・・。

よく持ったねえ・・・。二人とも・・・。ってというか、信君。

もう、今すぐくつついてもおかしくないんですけどね。(笑)

如何でしたでしょうか？番外編、楽しんで頂けました？

さて、番外編も終わって・・・

「理想恋愛・・・未満！」完全完結になります！

本編と番外編。両方お付き合いくださった皆さん、読んで下さって、本当に有難う御座いました！！！！

今、「二年生編」を思案中です。(笑)

でも、多分来年になるかな？

また書く時が来ましたら、是非、じれったくて歯痒い学君と美春ちゃん、そして信君と涼香ちゃん。この二組に会いに来て上げてくださいな！

また、違う作品でお会いできますことを心から願って・・・。
最後まで読んで頂き、本当に有難う御座いました！！

感謝を込めて。

玉紀
直

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4352g/>

理想の恋愛・・・未満！

2010年10月8日12時02分発行